
著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ(UNKNOWN)
月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
~白銀のカリアティード~ III
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～III

Ｊ・さいろー

原作　ニトロプラス

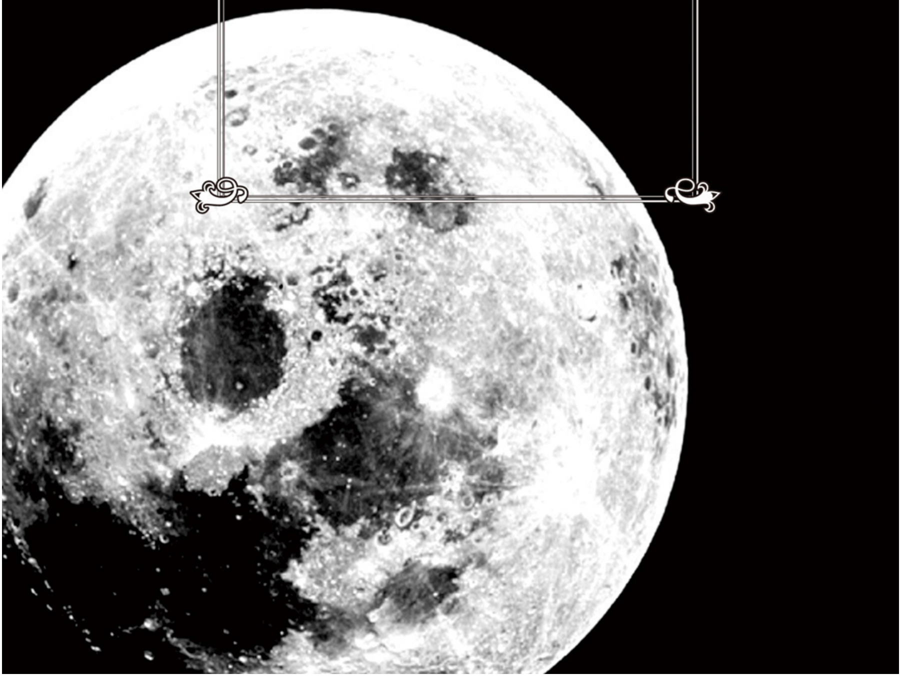
イラスト　大崎シンヤ（UNKNOWN）



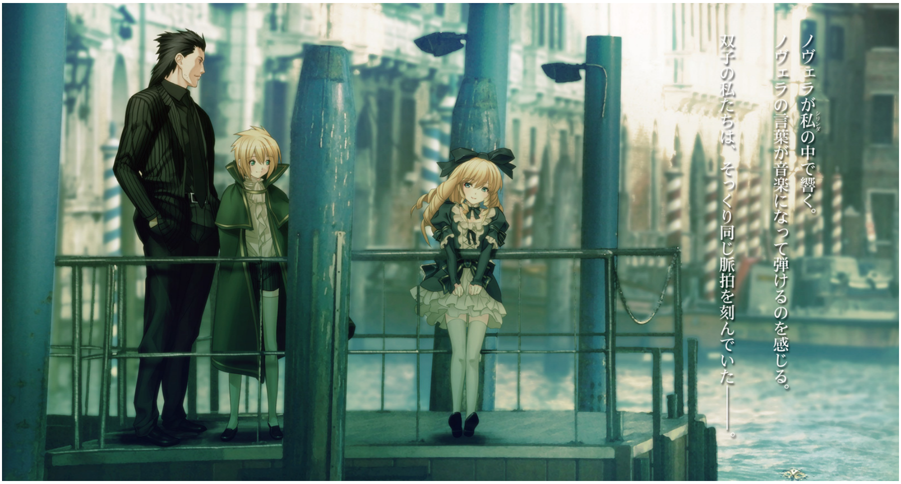
著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ（UNKNOWN）
月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
～白銀のカリアティード～
III

CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
cariatide di argento III

INDICE




ペルラ
教皇庁直属の自動機械人形。
錬金術の秘儀が綴られた
「カリオストロの遺稿」を
隠し持つ仮面の男の監視を
教皇庁より命じられている。
フランチェスコ
オルマ・ロッサの副頭領に拾われた、
はぐれ者の人狼。
ノヴェラを破壊し、弾丸を一夜にして
壊滅させ、フォーラの足跡を追う。
アレッシオ
南部出身のギャング。自動機械人形の兄妹
ノヴェラ&フォーラの主人である謎の富豪
“仮面の男”の部下。
子供ギャング団・弾丸のさえないお守り役。


ノヴェラが私（シリンダ）の中で響く。
ノヴェラの言葉が音楽になって弾けるのを感じる。
双子の私たちは、そっくり同じ脈拍を刻んでいた――。

目次

蛙姫

　昔々のこと、さる遠えん国ごくにたいそう物覚えの悪い娘がおりました。

　その娘はとても美しく、きらきら輝く金色の髪と、宝石のように光る青い瞳を持っておりました。娘が年頃になると、美び貌ぼうの噂うわさを聞きつけた若者からの求愛は引きもきらず、ついにはその国の若い王子が彼女を妃きさきにと申し入れてまいりました。

　王子はとても優しい人で、娘は幸せでいっぱいでした。しかしどうしても肝かん心じんの王子の名前を覚えることができません。娘が王子と農夫の名前を間違えたという噂話を聞いた王様は烈れつ火かのごとくお怒りになり、妖精に命じて娘を蟇蛙ひきがえるに変えてしまいました。

　蛙にされた娘は悲しみましたが、妖精のまじないはどうしようもありません。やがて人々は哀れな娘のことを忘れてしまい、そうして月日が流れました。

　すっかり老いた王様は、跡継ぎを決めるために王子たちに嫁探しをさせることにしました。そして三人の王子に白い矢を一本ずつ渡すと、こう言いました。

「ひとりずつ、城の尖せん塔とうよりこの矢を射てみせよ。矢の当たった家の娘から、一人だけを王女として城に迎えよう」

　王様は、最高の娘を見み出いだした王子に王家を継がせる約束をされたのです。

　王子たちはわれ先に一番高い塔に登ると、弓に白い矢をつがえ思い思いに放ちました。

　一番上の王子の矢は貴族の家の屋根に、真ん中の王子の矢は鍛か冶じ屋やの屋根に立ち、末の王子の矢はどぶの中に落ちてしまいました。

　次に王様は三匹の子犬を用意すると、矢の立った家の娘に預けるように言いました。

「この子犬をもっとも見事に育てた娘こそ、王女にふさわしい」

「ただちに愛すべき娘たちに犬を育てさせましょう」

　上の王子たちは王様の言いつけどおり、貴族の娘と鍛冶屋の娘に子犬を育てさせることにしました。

　困ったのは末の王子です。どぶの中には子犬を預ける相手などいるはずもありません。半ばあきらめ気味にどぶの中を覗のぞくと、一匹の蟇蛙ひきがえるが白い矢を咥くわえていました。

「蛙よ、蛙」

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前をちっとも愛していない王子だよ」

「愛しい王子様。きっと私が美しくなれば、私を思い出してくださるでしょう」

　王子はがっかりしていましたが、王様の命じたことを蛙に話してきかせました。

「きっと、王子様を次の王様にしてさしあげます」

「蛙のそなたになにができるのだ」

　それでも王子は言いつけどおり、蟇蛙に子犬を預けて城に帰りました。

　時が過ぎて、子犬を王様に見せる日になりました。

　上の二人の王子の連れてきた子犬は、それはそれは見事な毛並みの丸々と太った犬に育っておりました。ひとりだけ犬を連れてこなかった末の王子は、王様に催促されて仕方なく蟇蛙のところへ行きました。

「蛙よ、蛙」

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前をちっとも愛していない王子だよ」

「愛しい王子様。きっと私が美しくなれば、私を思い出してくださるでしょう」

　そして蛙が差し出したのは、金色と銀色の毛並みを持つたいそう美しい犬でした。

　末の王子の連れ帰った犬を見て、王様は言いました。

「これを育てた娘こそ、王女にふさわしい」

　しかしそれでは蟇蛙がこの国の王女になってしまいます。

　末の王子が困っているのを見た王様は、家来に命じて言いました。

「ならば今度は麻あさを糸に紡つむいでもらおう。最も美しい糸を紡いだ娘を嫁に迎えるぞ」

　上の王子たちはそれぞれ、貴族と鍛か冶じ屋やの娘に細く美しい糸を紡つむがせました。

　末の王子もまた、蟇蛙ひきがえるのところへ麻あさを持っていきました。

「蛙よ、蛙」

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前をちっとも愛していない王子だよ」

「愛しい王子様。きっと私が美しくなれば、私を思い出してくださるでしょう」

　そうして蟇蛙が紡いだのは麻ではなく、絹きぬのようにきらきらと光る金と銀の糸でした。

　王様はたいそう喜んで、末の王子に命じました。

「さあ、お前の妃きさきを連れて参るのだ」

　しかし糸を紡いだのは醜みにくい蟇蛙です。

　王子は悩みました。醜い蟇蛙は自分を跡継ぎにするために、美しい犬と糸を用意したのです。そのことを思うと、王子は醜い蟇蛙を不思議と愛しく感じるのです。

　ついに意を決した王子は、花嫁を迎える白い馬車に乗ると、あのどぶの淵ふちから優しい声で呼びかけました。

「蛙よ、蛙」

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前を愛する王子だよ」

　そのときです。

　蟇蛙は自分を愛してくれた王子の名前をようやく思い出しました。

「ああ、愛しい王子様……」

蟇蛙は王子の本当の名前を呼びました。

するとたちまち妖精のまじないが解かれ、きらきら輝く金色の髪と、宝石のように光る青い瞳を持った美しい娘が姿を現したのでした。

こうして王子と物覚えの悪かった娘は、末永く幸せに結ばれました。

これで物語はおしまい。

この話を聞いた人も、語った人も、地獄へ落ちることは決してないはず。



CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
carlatide di argento III
人形と弾丸

i

瞼まぶたを開いても、悪夢に終わりはないようだ。

薄暗い照明に照らし出された取調室にアレッシオはいた。

この手の部屋の眺めは、どの街の警察署でも大差ないものだ。古びたテーブルに格こう子しのついた窓、奥にあるのは書記用のデスク。違いがあるとすれば、ヴェネツィアでは居い丈たけ高だかだった取調官の態度が、腫れ物に触るようにぎこちなくなったことだ。

市警察の中にも仮面の男マスケリーノの息のかかった者がいる。

彼らはまだ知らないのだろう、アレッシオとボスが決けつ裂れつしたということを。

「それで、なにか心当たりは」

「あれば話している」

「そうでしょうな、しかし思い出したことがあれば……」

答えずに睨にらみつけると、刑事たちは困ったように顔を見合わせた。

マフィアのすることに市警察は介かい入にゅうしない、それはこの街を動かしている不ふ文ぶん律りつのひとつだ。彼らとしても深入りを避けたいのだろうが、トラットリオ・カプレットの殺さつ戮りくはあまりに凄せい惨さんすぎた。

「まったく、この街は訳が分からんな」

ノックもなしに開いた扉から、よれよれのコートを着た中年男が姿を見せた。

男は市警察の刑事たちを退出させると、コートのポケットにねじ込んでいたウィスキーの小こ瓶びんをテーブルに置き、アレッシオの正面に腰を下ろした。

「ヴェネツィアの殺し屋が、御お伽とぎの国で子守りをしているとはな」

「俺が誰かを殺したんですか」

「ふざけるなよ、極ごく道どうが」

　アレッシオはこの男をよく知っている。

　男の名はパウロ、この国の裏社会で煙たがられている麻薬調査官だ。ヴェネツィアで小さな組織に飼われていたアレッシオは、この男の影を踏まぬようにしながら仕事をこなした覚えがある。

　パオロは先日もバールに現れ、古物商のベルッチについての聞き込みをしていた。あのときはノヴェラの機転でやり過ごしたが、弾丸パロツトラの調査も進んでいると思ったほうがいいだろう。

「飲やるか？　それからじっくり話を聞かせてもらおうじゃないか」

「あいにく俺は被害者の身内で、あんたの取り調べを受ける謂いわれはない」

　小瓶を掲げた格好のパオロが肩をすくめた。

「分かってるさ。この部屋が気に食わんのだろうが、応接室が塞がっているので辛しん抱ぼうしてほしい。マフィアが表の待合所で事情を聴かれるのも具合が悪いだろう、こんな取調室でも配はい慮りよはしているんだ。まあ俺の感想を言わせてもらうのなら、麻薬がらみのトラブルって線もゼロじゃあないと思うがね」

「言いがかりはよしてくれ」

　うらぶれた外見をしているがパオロは切れ者だ。弾丸パロツトラが麻薬を扱わないことくらいは、とうに調査済みだろう。

「どうしてあんたが俺の前に出てきた」

「古こ物ぶつ商しようの販売網を潰つぶしたな？」

　首をかしげてみせると、ウィスキーの瓶びんに口をつけたパオロがぐいっと喉のどを鳴らした。

「勤務中に飲んでいいのか」

「とぼけるならそれでもいいさ。どうしてこの俺が、自分から仕事を奪ったちんぴらとこんな薄暗い部屋で顔を突き合わせていると思う？　スラムの現げん場じようがベルッチの館に酷こく似じしていたからだ。この一件をベルモントの市警察がどう処理するかは分からんが、早晩、同じ麻薬中毒者ドウロガードの犯行とでも発表されるだろうよ」

　そこで言葉を切り、疲労の刻まれたアレッシオの顔を覗のぞき込んでくる。

「驚かんな、からくりの種を知っているって顔だ」

「あんたの想像力に感心しているのさ」



「お前は仮面の男マスケリーノに飼われているそうだな。せっかくだから敬愛すべきボスについても話そうじゃないか。奴の組織はおかしいぞ、普通じゃあない」

「……どうしてそう思う？」

「俺は麻薬捜査官だよ、ここの刑事どもには見えないものが見えることもある」

　ウィスキーを呷あおったパオロが先を続ける。

「俺がこの街に残っているのは、古こ物ぶつ商しようベルッチの別荘で起きた殺人事件が、麻薬中毒患者ドウロガードの犯行と断定されたからだ。その捜査に協力してほしいと要請を受けたのさ」

「今回の事件が同一犯なら、これもあんたのヤマになるってことか」

「そうはならない。捜査協力っていうのは、俺の持っているベルッチの麻薬販売網に関する情報を、こっちの刑事部に提供してやる程度のことだからな。何者かに潰つぶされた販売網についての古い情報だし、俺もそろそろヴェネツィアに戻らなくちゃならん。どうだ、安心したか？」

「ぺらぺらとよく喋しやべるんだな」

「警察官は話せることしか話さんよ、そんなことは知っているだろう。まあその話は置くとしてだ、俺が言いたいのは、ベルッチについて調査するうちに、この街の麻薬取引の全ぜん貌ぼうが見えてきたってことだよ。そこでおかしなことに気がついた」

　ぼろのコートを着た刑事が、テーブルに身を乗り出してくる。

「つまり、麻薬ドウローガビジネスが停滞しているのさ。ここしばらくは現状維持だっていうんだから、おかしな話だ。いいか、それまでベルモントにおける麻薬の流通は増加傾向にあった。あの血ち腥なまぐさい抗争の裏で、シチリアルートの麻薬が大量に流れ込んでいたのさ。その抗争を、仮面の男マスケリーノはたったひと月で片付けてしまった」

　五週間だ──アレッシオは心の中で訂正した。

「それほどの手腕を持った仮面の男マスケリーノは、なぜか、抗争が終結すると同時にぴたりと活動を止めてしまうんだ。ポルノも麻薬も売春も全て横ばいときている。商しよう売ばい敵がたきもなしに現状維持というのは、つまり末端が動いているだけで組織の上は何もして

いないってことだ。そんな馬鹿な話があるか。何のために苦労してベルモントの裏社会を牛ぎゆう耳じったというんだ。まるで経済には興味がないとでも言わんばかりだ。だから俺は、仮面の男マスケリーノになにか別の目的があるような気がしてならんのだ」

　さすがは名の通った麻薬捜査官だ。パオロの分析は真実の一端をつかんでいる。

「麻薬マニアのあんたにとっちゃ優良マフィアだろう」

「ごまかすな。俺が言いたいのは、仮面の男マスケリーノがまともじゃないってことだ」

　パオロがテーブルを叩いた。

「理屈の通じない奴ほど怖いものはない。答えろ、やったのは仮面の男マスケリーノか？　マフィアの連中ってのは、どうすればあんな風に子供を殺せるんだ」

「あんた自身で試してみるかい」

「現げん場じようには動物の毛が散乱していたそうだな。おまけに店の名前が『仔山羊亭トラツトリア・カプレツト』だ。麻薬で頭のいかれたスラムの連中は、狼の遠吠えが聞こえたなんて言ってやがる。いくら御お伽とぎの国でも、そいつはいただけない話だと思うがね。おい、どうした、気分でも悪いのか？　お前のボスはなんて言ってるんだ？」

　中年の麻薬捜査官に肩を揺さぶられながら、アレッシオは嘔おう吐とをこらえていた。

　古物商のベルッチ──そうだ、全てはあの別荘から始まったのだ。

　ベルッチを殺したのも『そいつ』に間違いない。襲撃者はあの別荘で、弾丸パロツトラについての情報を得たのだろう。

　そのことにもっと早く思い至っていれば、あるいはガキどもを救ってやれたかもしれない。

　反へ吐どと嗚お咽えつを噛かみ殺す。取調室の薄暗い照明を見上げながら、アレッシオは顔面の筋肉がひきつるのを必死に抑えこんだ。

＊

──それは、わずか二時間前のことだった。

　ぽっかりと虚うつろな空には満月が浮いていた。

　月光とガス灯に照らされて、御伽の国ベルモントは虹色に輝く。旧市街チエントロ・ストーリコの華はなやかな大通りを過ぎて十分あまり、タクシーが停まったのは煌きら々きらしい光の届かぬ街の底だ。

　黒ずくめのアレッシオは、ランビキ地区に垂れ込めた闇の中にいた。

　腕をからめたフォーラの巻き髪が湿った風になびく。衣きぬ擦ずれの音を聞きながら見上げた食堂トラツトリアには、灯りひとつついていなかった。

　なにかがおかしい。タクシーの中から感じていた流血の予感――そいつを抑えつけながら、進むたびに重くなる足を食堂へと運ぶ。

　子供たちはどこへ行ったのだ。

　ノヴェラは。

　ルーカは。

　食堂トラツトリアに人の気配はなく、今け朝さまでは我が家のようだった建物が、闇の中に異様な圧迫感を立ちのぼらせている。

　ジャケットに手を入れて銃じゆう把はを握った。『トラットリア・カプレット』の文字が刻まれた一枚板の看板の下、両開きの扉に大きな亀き裂れつが走っている。壊れた取っ手を握ると、すぐに血の臭いが漂ってきた。

　フォーラを下がらせて扉を開けた。

　室内は暗かったが、荒らされていることはすぐに分かった。手探りで電灯のスイッチを押し、アレッシオは中の様子を確認した。

　ふっ、と意識が途切れたのは、わずかな時間だったようだ。

「どうしたの、ご主人様」

　黄金の髪が月明かりに煌きらめいている。視線を上げると心配そうに覗のぞき込むフォーラの顔が見えた。アレッシオの背中には食堂の扉があり、フォーラの頭上に満月が浮かんでいる。

　脳が状況を理解するのに僅わずかな時間が必要だった。食堂の中を見たアレッシオは、無意識のうちに外に出て、扉を閉めるとその場にへたり込んだのだ。

　壊れた扉にもたれて深呼吸をした。首をかしげるフォーラに向かって口だけで笑った。

「なんでもない、気のせいだ」

　敵の気配はない。頭の混乱が収まってくる。立ち上がり、トラットリア・カプレットの扉に向き直った。

　俺はなにか違うものを見たのではないか。まずそう思った。昨夜のベッドで、暗闇の中にフォーラの笑顔を見てしまったように、脳が勝手な情報を捏ねつ造ぞうしたのではないか。

　携帯酒瓶ヒツプフラスクのキャップを開け、安酒を呷あおる。いずれにしろ中に入るしかないのだ。ここはアレッシオの家なのだから。

　壊れた取っ手に手をかける。

　そしてアレッシオは、自分の脳が正常に機能していたことを再確認した。

「……」

　言葉は出なかった。

　落ち着け、心を乱すな。口から迸ほとばしりそうになる感情を嚙かみ殺して、黒ずくめのマフィオーゾは現実の惨さん状じようを脳に焼き付けた。

　食堂に血が溢あふれていた。

　殺し屋のアレッシオでさえ見たことがないほどの、黒く濁った血の海が広がっている。そこにあったのは殺さつ戮りくと破壊の痕跡だった。

　なにが起きた。

　壁に染み付いたクロワッサンやピザの香りが、血の臭いに塗りつぶされている。

　二十人からの子供たちが一度に食事をとることのできる広い食堂。その一面に死体が転がっていた。ひっくり返されたテーブル、頭を割られた弾丸パロツトラの子供たち──夕食までは元気に騒いでいたガキどもだ。その細い腕がちぎれて転がり、腹を食い破られた死体が内臓をさらけ出している。

　足がもつれた。

　血の臭いに胸が苦しくなる。これが、仮面の男マスケリーノの報復だというのか。

まだほんの小さなチビも、生意気になった思春期の少年も、弾丸パロツトラは等しく肉の塊かたまりにされていた。

血溜まりに足を取られながら死体をまたいでゆく。奥のテーブルの近くで、赤いコートを着たリタが頭を割られて宙を見上げていた。その腕の中にはリッカルドの写真が抱かれている。そして、その向こうに転がった人形の腕と足――。

ノヴェラはそこに散らばっていた。

手足をもがれたノヴェラの胴体は、食堂の中央で仰向けにされていた。十八世紀風の衣装の下でノヴェラの身体は踏み砕かれ、発ば条ねと鉄線が服を突き抜けて飛び出している。腹には大穴がぽっかりと口を開け、あたりには血に混ざった水銀が飛び散っていた。

頭部は胴体から離れた厨ちゆう房ぼうの近くに転がっていた。ほんの数時間前まで人間らしい表情を浮かべていたノヴェラの顔は、右半分が完全に粉砕され、煌きら々きらと輝いていた両眼の緑柱石スメラルドもえぐり取られている。

そこにあったのはノヴェラの形をしたがらくたと、子供の形をした肉にく塊かいだった。

立ち尽くすアレッシオをよそに、フォーラはきょろきょろと食堂の中を見回している。こっちの視線に気づくとにこやかに手を振ってきた。緑柱石アクアマリーナの瞳には子供たちも、壊れたノヴェラすら映っていないようだ。

俺のせいか。

食いしばった歯の隙間から声が漏もれる。

食堂は血の海だ。アレッシオがボスと諍いさかいを起こしたばかりに、みんな殺されてしまった。

そして、床に点々と残る、赤い足跡オルマ・ロツサ！

室内に残された犯人の痕こん跡せきを、殺し屋の眼は見逃さなかった。

いったい、オルマ・ロッサと仮面の男マスケリーノにどんなの関係があるというのだ。仮面の男マスケリーノはアレッシオのような虫けらを抹まつ殺さつするために、裏社会に名だたる暗殺集団を投入し、食堂トラツトリアの子供たちを皆殺しにしたとでもいうのか？

頭の中で思考が暴走している。落ち着いて考えろ！　どんな人間

も、あるいは殺人機械の自動機械人形オートマタであったとしても、こんな風に人を喰い殺したりはしない。子供たちはみな、身体を嚙かみちぎられているのだ！

　血の薫かおる室内で深呼吸をした。

　大丈夫だ、俺は殺し屋だ、人の死に様は見慣れている。

　唇の中で何度もそれを繰り返し、あらためて食堂の中を見回した。

　食器も荷物も人間の身体も、全てがぐちゃぐちゃにばら撒まかれている。その向こうで、血の海には不似合いなドレスを着たフォーラが、なにかを両手に持っているのが見えた。

「フォーラ、それはどこにあった」

「そこの棚たなの上よ」

　フォーラが手にしていたのは銀のバンドネオンだった。それがキャビネットの上に無傷で置かれていたというのだ。

　食堂トラツトリアを襲ったのが仮面の男マスケリーノの配下なら、なぜこれに手をつけなかった？

　そもそも、なぜノヴェラを破壊したのだ？

　不自然だ。ノヴェラのバンドネオンをきっかけに、次々と違和感が広がっていく。

　食堂の床には動物の毛が散らばっている。無数の銃じゆう痕こんが刻まれた壁には、爪つめのような引っかき傷と赤い足跡オルマ・ロツサ──しかし、この足跡は人間のものではない。

「人じん狼ろうだと？」

　口の中で呟いた。もはや、ノヴェラと仮面の男マスケリーノの御お伽とぎ話ばなしを信じるほかになさそうだ。

　人狼は実在する。

　人食いの化け物が街のどこかに潜ひそんでいて、アレッシオの家族を皆殺しにしたのだ。

　ルーカとノヴェラは弾丸パロツトラの子供たちを守るために怪物と戦ったのだろう。あるいは弔とむらいだったのかもしれない。血まみれの床を見て回ると、リタの死体の近くに奇跡的に破壊を免まぬがれた銀色の円筒シリンダが転がっていた。

「ノヴェラ」

　両手で拾い上げた。声をかけても銀の円筒シリンダはなにも答えない。

　手の中の円筒シリンダは無傷ではなく、縦に大きく走った亀き裂れつから中の歯車が覗いていた。

　バンドネオンを抱えたフォーラは、彼女の指定席だった隅のテーブルに行くと、倒れていた椅い子すを立てて腰を下ろした。赤黒い血のこびりついたテーブルに肘ひじをついて髪を梳とかし始める。いつか同じ場所でオレンジを切り分けたときのように、緑柱石アクアマリーナの瞳にはなにも映っていないように見えた。

　ノヴェラの円筒シリンダを抱いた手が小刻みに震えるのは、眩暈めまいのしそうな異臭がさっきからアレッシオを苦しめているからだ。フォーラは感じないのだろうか。はじめは血と内臓の生臭さだと思ったが、どうやら何かが焦こげた臭いのようだ。

　リタの死体を越えて食堂の奥へと進むと、臭いはますます強くなった。

　厨ちゆう房ぼうに入る。アレッシオは吐き気をこらえて室内を見渡した。

　やはりここも血の海だった。子供たちは重い什じゆう器きに押し潰つぶされ、あるいは食いちぎられて、食器や皿がばら撒まかれた床の上に転がっている。その奥でニコロの宝物だった石いし窯がまが黒い煙を上げていた。

　そこにいたのはルーカだった。

　一度は鎮しずめた感情に、ハンマーで殴なぐられたような衝撃が襲い掛かってきた。

　石窯の口からぶら下がった黒いスーツの足。ルーカの上半身が窯の中に突っ込まれているのだ。煙はそこから立ちのぼっていた。

　お気に入りだった黒いスーツの下腹部が食いちぎられ、腸が垂れ下がっている。ルーカは焼き殺されたうえに食い殺されていた。厨房を覆おおった煙と異臭は、焼けたルーカの身体から立ちのぼったものだった。

　アレッシオは口を押さえたまま絶叫した。

　嘔え吐づくような叫びに喉のど奥おくがひきつった。それでも声は

止まらなかった。押し留めてきた感情の、ここが限界だった。

　右手の怪物が動いて銃を抜く。しかし狙いをつける相手はここにいない。行き場を失った怪物を震わせてアレッシオは再び大声で吼ほえた。怒りと恐怖がないまぜになった、すさまじい感情の噴出だった。

　死んだ、みんな殺されたのだ！

　つかの間の安らぎを見み出いだしていたはずの食堂トラツトリアは、アレッシオを親父バーボと慕っていた子供たちの死体置き場にされていた。今日までの生活が、家族が、一夜にして消え去ったのだ。叫びを飲み込むまでに、さっきの何倍もの時間と精神力が必要だった。

　厨ちゅう房ぼうの床を見回すと、無数の薬やつ莢きように囲まれるようにルーカのＭ９が落ちていた。

　ルーカはもう弾を撃ちつくすようなへまはしない。両手でそれを拾い上げ、怒りに任せて壁を蹴った。

　ルーカの最後の戦いぶりが知りたかった。しかし焼けた脳は決して戻らない。アレッシオの前にルーカの姿が戻ることも二度とない。家族を失うのはこれで二度目だ。以前は姉を救えず、今度はガキどもを救えなかった。

　石いし窯がまから引きずり出したルーカを厨房の入り口に横たえる。常人ならばとうてい正視できぬほど破壊されたその姿を、眼の奥に灼やきつけた。

　それから、小さなリタの死体の前にかがみ込んだ。頭の半分を割られたリタもまた、二度と笑うことはない。

　リッカルドの写真を抱いた少女の瞳を閉じてやると、悪ふざけをした彼女にベッドに誘われたことを思い出した。最後にリタは何を想いながら死んでいったのだろう。それを知りたくても、食い荒らされた脳は元に戻らない。

　しかし、こいつはどうだろう。

　アレッシオは、手にした銀の円筒シリンダを見つめた。

　ルーカやリタと同じようにノヴェラの肉体も破壊されていた。しかしどこかの職人が新しい肉体いれものをしつらえて、修理した円筒シリンダを組み込めばどうなるだろう。こいつはまた何食わぬ顔で動き出し、魂たましいについての手前勝手な問答を囀さえずりはじめるかもしれない。

──化け物め。

口を衝ついた言葉を危うく飲み込んだ。

無数の銃じゆう痕こんが刻まれた食堂の壁に銀の鉈なたが突き立っている。血の海に散らばった薬莢とＭ９の弾だん倉そう、生々しい戦闘の痕跡は手の中のノヴェラが果か敢かんに戦った証拠に外ならない。

床の上に、ノヴェラのつけていた弾丸パロツトラのネックレスが落ちていた。いつかリッカルドがリタに作らせたものだ。アウトードロモでバンビーニと決着をつけたあの日、この食堂でノヴェラはこいつを誇らしげに首から下げていた。

ノヴェラは化け物ではない、俺の家族だった。

手の中にずっしりと重い白銀の円筒シリンダ。そのあちこちから水銀が零こぼれ落ちてくる。

慌あわてて手で押さえても無駄だった。

「どうかした、ご主人様？」

「なんでもない、フォーラはなにも見なくていい」

嗚お咽えつが洩もれたのかもしれない。血と水銀にまみれたネックレスを拾い上げたアレッシオは、それをフォーラのところへ持って行き、細い首にかけてやった。

「素敵ね」

弾丸をつまんだフォーラは、壁の鏡に自分の姿を映して喜んでいる。彼女の円筒シリンダには、ノヴェラの形見がどんな色の宝石に見えているのだろう。

厨ちゆう房ぼうの奥で物音がしたのはそのときだった。

瞬時に身体が反応した。

小走りにルーカの焼死体をまたぐ。銃を構えたアレッシオは、ほとんど烈れっ火かのようになって厨房に踏み込んだ。

奥でなにかが動いている。

「誰だ」

短く声をかけると、倒れた調理道具の棚たなの下から小さな人影が

這はい出してきた。

「おいら、いったいなにが……」

　ニコロだった。たったひとり生き残った弾丸パロツトラの少年は、ステンレスの棚を押しのけてきょろきょろとあたりを見回した。声は確かだが、その顔は血にまみれている。アレッシオは急いでニコロを助け起こした。

「親父バーボ？」

「大丈夫か、大人しくしていろ」

「おいらなら平気だよ。親父バーボ、それよりなにがあったの？」

　なにも覚えていないのか、ニコロはきょとんとした顔をしている。

「ひどいな、散らかってるなんてもんじゃないよ」

「血が出ている、あまり動くな」

　ふらふらしているニコロの肩を抱きとめた。

　どうやら顔の血は頭から流れ落ちてきたもののようだ。指でかき分けた前髪がべとべとしている。手で拭ぬぐってやると、バターのようなそれはニコロの脳みそだった。

　アレッシオは慌てて救急車を呼んだ。

　　　＊

　取調室の天井は低かったが、血まみれの食堂トラツトリアほどの息苦しさは感じられなかった。

　机を挟んだ向こう側では、パオロが猫なで声を出したり机を叩いたりとせわしない。事情聴取などといいながら、この男の口調は尋じん問もんと変わりがなかった。

　時計は午前四時、しかし窓の外の闇やみが薄れる様子は感じられない。

「ずいぶんと参ってるな、目に生気がないぞ」

「あんたが俺の立場だったらどうだい」

「すぐにボスを頼るだろうよ。それをできない事情があるのなら別だがね」

　話しながらも、抜け目のない視線がアレッシオをとらえている。

　警察に腹を探られるのは覚悟のうえだ。惨劇の食堂トラツトリアに救急車を呼ぶのは愚行と言ってよかったが、頭に穴の空いたニコロを放置して立ち去ることはできなかった。

「病院から連絡があったぞ。子供の容態だが、頭の傷は金属が刺さって穴が空いたもののようだ。意識もあるし命に別状はないそうだ」

「そうか……」

　安あん堵どの息が洩もれた。おそらくは棚たなの角か、あるいは飛んできた食器が刺さったのだろう。人間というのは脆もろいのか頑丈なのか分からない生き物だ。

　ともあれ、これで食堂トラツトリアは市警察の管理下に置かれることとなった。

　この事件をマスコミはどのように報道するだろう。仮面の男マスケリーノの、あるいは教きよう煌こう庁ちようの力が働くことは想像に難かたくない。そして食堂トラットリアの惨劇が街中に知れ渡るころ、果たして俺は生きているだろうか……。

　取り調べはすぐに終わった。

　被疑者でもないマフィオーゾを拘こう束そくする力など、市警察にありはしないのだ。警察車輛ガゼツラの後席で、アレッシオはフォーラに肩を貸しながら窓の外を眺めていた。

　眠らない旧市街、古代復興運動リナツシメントに守られた御お伽とぎの街並み──飛び去る景色を見つめながら、ふとベルモントに流れてきた頃のことを思い出した。いくつもの組織に使い捨てられ、絶望だけを懐ふところに入れてこの街に流れついたのは、わずか三年前のことだ。

　追憶に浸るアレッシオの耳にパオロの声が入り込んでくる。

「別荘の大量殺人、仮面の男マスケリーノ、壊れた機械人形、二十人からの子供の死体、それに頭のおかしい売春人形プツターナ……お前はいったい、何に首を突っ込んでるんだ？」

「御伽の国の裏側さ」窓の外を見たまま言い返す。

「あんたは古こ物ぶつ商しようの麻薬ルートを捜査しに来たんだろう。つまり、この殺人事件が解決しなくても水の都へ帰れるってわけだ。それなら余計なことには首を突っ込むな」

　肩を竦すくめたパオロが黙って運転を続ける。ふいにフォーラがアレッシオの手を強く握ってきた。視界を飛び去るガス灯の彼方かなた、建物の屋上で黒い影が踊っている。

「……！」

　窓にへばりついたアレッシオが見たものは、狼の影だった。

　満月を背にした狼が人形を相手に踊っているのだ──。

「なんだあれは」

　パオロがブレーキを踏む。アレッシオはとっさに叫んでいた。

「停めるな！」

「だめだ、事故だ」

　警察車輌ガゼツラが停まる。踊る狼とは反対側の窓を見ると、横転したバスが歩道に乗り上げたまま燃え盛っていた。その周囲には、無数に転がる破壊された自動機械人形オートマタ。

　忘れるはずがない、あれはボスが放った刺し客かくの喜劇ラッコントだ。武装した人形どもを乗せたバスの姿は、アレッシオの脳裏に鮮明に焼きついている。

　あいつがやったのだ。

　窓から狼の姿を追った。満月を背にした狼が人形の首をちぎって投げ捨てている。その拳が人形の腹を貫き、振り回し、叩き落す。

　あの恐ろしい殺人人形どもを、まるで蚊かでも潰つぶすかのように。

　間違いない、あいつが、ああやって壊したのだ。ノヴェラも、ルーカも、アレッシオの帰るべき家すらも、化け物の太い腕にちぎり捨てられたのだ。



運転席から現場を確認したパオロは、無線で仲間を集めている。

「パオロ！」

刑事の名を呼んだアレッシオは、自分の声と身体が震えていることに気がついた。

自分とフォーラだけで、あんな化け物を相手にできるわけがない。残念だが、ここでゲームセットのようだ。いまさらボスへの義理もない。闇夜に踊る狼をパオロに見せるのだ。全ての事情を打ち明けて警察の世話になるのが、生き残るただひとつの方策だろう。

「どうした」

パオロがようやく振り向いた。

卑怯なのではなく、現実を受け入れるということだ。半年前に弾丸パロツトラの親父バーボ役を受け入れたときように……。

しかし、アレッシオの喉のどをついたのは別の言葉だった。

「車を出せ、すぐにだ」

「なにか理由でもあるのか」

「いいから出してくれ」

応援の車しや輛りようが到着するのを見届けてから、パオロは車を出した。

なぜそう言ったのかは分からない。しかしアレッシオの脳が、ここを離れるべきだと叫んでいた。

炎上したバスが遠ざかる。

わずか一夜にして、アレッシオは流血の迷宮に迷い込んでしまったのだ。アレッシオだけではない、自分を信じていた子供たちも迷宮の中で無残に息絶えた。

これは誰の物語だ？

ノヴェラの言葉を思い出すと、また身体が震えた。

震えの源みなもとは怒りだった。

恐怖と憤ふん怒ぬ、真っ二つに割れた思いが胸の奥で渦うずを巻い

ている。

「あの事故はおかしいぞ。バスの運転手がどこにもいないし、周りにあったのは人形の残ざん骸がいばかりだ。それも……」

「前を向いて運転しな」

「アレッシオ、お前は何を知っているんだ」

「あんたに二つ忠告しておく。ひとつは麻薬以外の捜査に深入りをしないこと、もうひとつは酒を飲んで運転席に座らないことだ。アルコールに脳がやられると、見てはいけないものが見えるようになる」

　窓からの夜景に人じん狼ろうの影が張り付いている。

　パオロに警告しながらも、アレッシオはフォーラの手を強く握っていた。

ii

　バンドネオン。

　十八世紀の衣装。

　筆記用具。

　ルーカのＭ９。

　愛用のM84と予備の弾薬。

　そして、銀の円筒シリンダ。

　木箱を開けて中身を確認する。見られて困るものは、救急車が到着するまえにトラットリア・カプレットの物置きに隠しておいた。短機関銃ミニウージーとリッカルドの拳銃を現場に残しておいたので、あとは警官どもがつじつまを合わせるだろう。

「兵隊さんに見つからなくて良かったわ」

「警官はマフィアのすることに目を瞑つむるものさ」

　パオロの警察車輌ガゼツラでトラットリオ・カプレットに戻ってきたアレッシオとフォーラは、現場検証の続く食堂を避けて、裏庭の非常階段から建物内に入っていた。

　木箱の中身を鞄かばんに詰めてから三階へ登る。まずは兄妹の部屋でフォーラの裁さい縫ほう道具をまとめ、自室の床下から弾薬とス

コッチのボトルを引っぱり出す。

「こいつは高いんだ」

「宝探しみたいね」

　大切に取っておいたラフロイグの三十年物だ。スラムの底を這はうような生活から抜け出したときに封を切ろうと思っていた。

　ボトルの中身を携帯酒瓶ヒツプフラスクに注ぐ様子を、フォーラはきらきらした目で眺めている。それから二人がかりで荷物をバッグに詰めて運び出すことにした。

　表にいる警官たちは見て見ぬふりをしているが、こっちの行動はそのままパオロに伝わるのだろう。そうでなくても、ボスの人形や人じん狼ろうといった化け物どもに捕ほ捉そくされるかもしれない。現場から荷物を運び出すことは危険極まりない行動だった。

　それを押し切ったのは居直りに近い心情だ。頭の中を熱く痺れさせたまま、来るなら来いといった気持ちで淡々と荷物を移動させ、スラムの外で捕まえたタクシーにフォーラとともに乗り込んだ。

　シートにもたれかかり大きく息をついてから、アレッシオは懐ふところにぶち込んだ拳銃に手をかけていることを初めて自覚した。

　窓から空を見上げる。朝が来るまでに、ほんの少し時間があるようだ。

「観光ですか？　うらやましいですな、街の人間では骨董人形アンティークなどに手が出ませんよ」

　自動機械人形オートマタの少女を侍はべらせたアレッシオを見て、運転手は勝手な誤解をしているようだ。無視して視線を外に泳がせた。

　食堂トラツトリアの惨劇に出くわした瞬間の、わけの分からない感情の爆発が嘘うそのようだ。

　ルーカ、ノヴェラ、弾丸パロツトラの子供たち、それに仮面の男マスケリーノ。今夜の出来事はどれも現実味がなく、まるで夢の中をぼんやりと漂っているようだった。

　現場に証拠をいくつか残したのも、隠した荷物を回収したのも、必要な処置だと思ったからやったことだ。しかし何のための処置なのかは自分でも分からなかった。バンドネオンやノヴェラの衣装を持ち出してきた理由も明確でなく、ホテルに着いたら荷物をまとめて、それ

からどうするかも分からない。

　アレッシオは、フォーラを連れてベルモントを脱出することを空想した。

　それも悪くなさそうだ。ローマやヴェネツィアではなく、どこか遠くの国にでも渡って、毎日スコッチを飲みながらフォーラの御お伽とぎ話ばなしに耳を傾ける暮らしは悪くない。

「ノヴェラはどこに行ったのかしら」

　歌うような声に振り返ると、フォーラは手にした銀の円筒シリンダを覗のぞき込んでいた。

　彼女はどこまで理解しているのだろう。

　不思議に思いながら視線を窓の外に戻す。

　心が停まっている。そこにはなんの情動もなく、ぽつりと浮かんだ満月を取り巻く闇やみ空ぞらのような、ぽっかりとした虚無があるのみだった。

　街外れのうらぶれた安ホテルにタクシーが着いた。

　寝静まった無人のフロントを抜けて、エレベーターで四階を押した。

　タクシーは尾つけられたと思ったほうがいいだろう。ここに長居はできない。ボスの影響下にないホテルを他にもいくつか知っているが、もはや市内に留まること自体が生命の危機につながっている。すぐに荷物をまとめ、次の行動を決めなくてはならない。

「朝になるのを待って車を調達しよう」

「ドライブ？」

「そうさ、しばらく旅に出る」

　まともに運転できるなどとはお世せ辞じにも言えないが、他に手段はなさそうだ。それを聞いたフォーラは「素敵」と拍手のふりをした。

「駆け落ちね、私は屋根のついてない車が好きよ」

「逃避行にオープンカーは似合わないな」

　この街の裏側がどのような動きを見せているのかは分からないが、

アレッシオは人じん狼ろうと殺人人形どもが戦っている姿を確かに目撃した。満月を背に踊る人殺しの化け物ども、あの戦闘でどちらかが潰つぶれてくれれば、少しは状況も好転するだろう。

　廊ろう下かを歩きながら考えを少しずつまとめて、ノブに手をかける。

「ここからは身軽さが命いのち綱づなになるな。荷物は最小限に減らそう。その円筒シリンダとバンドネオンはともかく……」

　話しながらドアを開けたとき、異様な気配を感じた。

　フォーラの瞳が丸く見開かれる。その視線の先、ホテルの狭い室内に女の姿があった。

　十八世紀風のドレスをまとったそれは、あきらかに自動機械人形オートマタだった。その目に光るガラス玉の瞳石ジエンマは、彼女たちが電気式イミテーションであることを表わしている。そして、右手に握りしめた銀の鉈なた。その人形が一体ではなく五体、部屋のあちこちから一いつ斉せいにアレッシオを振り向いた。

　喜劇ラツコント――仮面の男ペトルチアーニの刺し客かくだ！

　そう思った途端、銃声がアレッシオの右手から迸ほとばしった。

　思うより先に一発、続けてさらに二発、立て続けに引き金を引いて円筒シリンダの収まった腹部を撃ち抜く。硝しよう煙えんの匂いに感情が昂たかぶって、自然と叫びが喉のどを衝ついた。

　ドアの正面に立っていた人形が跳ね飛ばされてベッドに転がる。残る四体は部屋の四隅に散開すると、一斉に突っ込んできた。

　化け物どもの好きにさせるものか。

　引き金を絞しぼりながら、アレッシオの脳裏にルーカとノヴェラの姿が明滅した。さらに銃声が轟とどろいて二体目が崩れ落ちる。三体目に銃口を向けたとき、最初に撃った人形がむくりと起き上がるのが見えた。

　まさか、この距離で目標を外したのか。

　信じがたいミスだが、目前に迫った銀の鉈はまぎれもなく現実だ。

「がらくため！」

　吐き捨てたアレッシオは、壊し損ねた一体目の腹部に向かってさらに二発ぶっ放した。

　今度も銃弾は円筒シリンダを直撃せず、喜劇ラツコントはぎくしゃくとした動きになりながらも銀の鉈を振り回してくる。身をひねって躱かわすと、息つく暇もなく三体目と四体目が袈け裟さがけに斬りつけてきた。

　間かん一いつ髪ぱつ、そいつを潜くぐり抜けて人形の腹を蹴る。敵がひるんだところで銃を構え直した。

「ご主人様」

　心配そうに駆け寄ってくるフォーラを右手で制して、引き金を立て続けに引いた。至近距離から鉛なまり弾だまをぶち込まれた銀髪の人形が、痙けい攣れんを起こしながら崩れ落ちる。アレッシオは倒れた人形に向かって、さらに引き金を絞った。

　この呪われた御お伽とぎの街は、こんな連中の跋ばつ扈こする世界だったのだ。おめでたい人間どもは、それに気づかずに踏み潰されてゆくのみだ。

　まだ、喜劇ラツコントは四体も残っている。

　皆殺しにしてやる。

　一発、二発、三発──炸さく裂れつ音おんがホテルの廊下に響く。

　怒りがアレッシオの本能を眩くらましていた。いくら引き金を引いても、手の中の怪物はいっこうに目を覚まさない。気がつけば十三発を撃ち尽くし、無意識に弾だん倉そうを取り替えていた。

　その隙を突いて、残る四体が襲いかかってくる。

　俺はなにをやっている、手順が滅茶苦茶だ。

　廊ろう下かに退いて銃口を向けるが、またも狙いが定まらない。

「ふざけるな！」

　頭に血が上った。銃を握った手で迫る人形を殴なぐりつける。こいつは最初に円筒シリンダを撃ち損じた奴だ。こいつが全て悪い。

　叫びながら、よろめいた人形に向けて何発も鉛なまり弾だまをぶち込んだ。

　ドレスに包まれた人形の腹部は粉々になったが、残る三体はアレッシオを囲んで鉈なたを振り上げた。

　斬られる──。

転がって躱かわそうとしたが、もう間に合わない。それでも目を開いて活路を探すと、黄き金ん色の塊かたまりが横合いから突っ込んでくるのが見えた。

フォーラだった。

狭い廊下の壁を蹴って、フォーラは一番端の人形に体当たりをした。喜劇ラツコントどもがよろめいた隙に辛からくも虎こ口こうを逃れたアレッシオは、フォーラの姿を仰いで息を呑のんだ。

黄金の巻き毛が宙になびく。

体当たりの衝撃を逃がすように空中で一回転したフォーラは、足を着く前に肘ひじで喜劇ラツコントの首を絡め取った。着地と同時にそいつの身体が反動で宙に浮き、陶とう器きの砕けるような音とともに首と胴体が分離する。

まるでサーカスの軽かる業わざ師しだ。宙を舞った首なし人形は残る二体の喜劇ラツコントに激突し、まとめて壁に叩きつけられた。

床を蹴ったアレッシオは、銃口を人形の腹部に押し当てて残る二体の円筒シリンダを撃ち砕いた。銀の鉈が手から零こぼれ落ちるのを受け止め、首なし人形の胴体に振り下ろす。

床に転がった頭部が、魂たま消ぎるような悲鳴を上げた。

胴体から伸びた鉄線と細管が、もげた首につながったままなのだ。アレッシオは構わずに鉈を振り下ろした。ドレスを切り裂き、胴体を割り、円筒シリンダを叩き砕く。怒りに任せて、人形の動作が完全に停止するまで破壊した。

「ご主人様！」

鉈を投げ捨てると、フォーラが飛びついてきた。

アレッシオの首に回された彼女の手首は、折れそうなほど華きや奢しやなものだ。

「驚いたな、どこで覚えたんだ」

「分からないわ。でもきっと……」

「きっと？」

「愛の力よ」

苦笑したアレッシオは、とにかく荷物を全てまとめてホテルを出る

ことにした。所持品の選別をしている時間などない。廊ろう下かに並んだドアの向こうでは、宿泊客が息を殺してこっちを窺うかがっている。マフィアのすることには誰も口を出さないが、遅かれ早かれ警察が駆けつけてくるだろう。真っ先に来るのは、仮面の男マスケリーノの息のかかった警官かもしれない。

　チェックアウトもせずに足早にホテルを出た。フォーラの手を引いて、夜明け前の裏道を大通りへ向けてまっすぐに走る。

　風を切る音がしたのはそのときだった。

　思う間もなく、フォーラがアレッシオを突き飛ばした。よろめいて道の真ん中を空けると、何かが頬をかすめて飛んでいった。

　がらん！

　重量のある金属の塊かたまりが石いし畳だたみにぶつかって転がる。それは銀の斧おのだった。

　これは、銀の城の回かい廊ろうで見たのと同じものだ。

　振り向いたアレッシオは、闇の中になびく赤い髪を見た。その下で緑柱石ヘリオドールの瞳石ジエンマがぎらぎらと黄金色に輝いている。

　──フィアーバだ。

　奴はまずい。アレッシオはフォーラの手を取って走りだした。フィアーバの運動能力は他の殺人人形どもを凌りよう駕がしている。

「ココココココココ……」

　乾いた木を叩くような声をあげてフィアーバが四つん這ばいになった。たちまち、下着のようなドレスから伸びた白い手足が、蜘く蛛ものような機敏さで動きだす。

　仮面の男マスケリーノの言葉を思い出した。

　この人形は、兄と姉への害意だけで動いているのだ。兄と姉──それはつまり、ノヴェラとフォーラのことだ。

　二丁めの斧が飛んできた。

「伏せろ！」

　叫ぶより早くフォーラは身を伏せた。手をつないでいたアレッシオも、石いし畳だたみの上に引き倒される。鋭く回転した斧が頭上をか

すめ、表通りの散さん水すい栓せんに当たって跳ね返った。

　ほんの二○メートルも行けば表通りなのだ。しかしフィアーバが背後にいる。かつかつと石畳にピンヒールを打ちつけて、信じられない速度で這はい寄ってくる。

「ココココココココ……」

　壊れた人形の声が迫る。

　銃帯から抜いたM84をぶっ放した。

　一発、二発、三発──フィアーバは蜘く蛛ものように左右の壁に飛び移り、全ての弾が闇やみの彼かな方たに吸い込まれる。

　だめだ、どうしても右手の怪物の制せい御ぎょができない。

　石いし畳だたみの上を後ずさりして逃げ道を探した。

　フィアーバが跳躍した。腹の円筒シリンダを狙おうにも黒いコルセットは防弾だ。

　赤い髪が迫る。妖よう艶えんな美女の顔が、狂気と悪意に歪ゆがんで闇の中から迫ってくる。左右の手にはぎらりと月光を照り返す銀の斧おの。

　それは、実体化した恐怖そのものだった。

「畜生カツツオ！」

　アレッシオは鞄かばんに差した散弾銃スパスを構えた。こいつが駄目なら終わりだ。

　フォーラが跳ね起きる。石いし畳だたみに転がった銀の斧を拾うとフィアーバに投げつけた。

　銀色の回転が空を切る。

　交差させた左右の斧を振り広げ、フィアーバがフォーラの斧を打ち落とす。

　いまだ。がら空きの胴体に向けて、アレッシオは散弾銃スパスの引き金を絞しぼった。

　──ズダン！

　破裂音が深夜のベルモントを揺るがした。

　身をひねって躱かわしたフィアーバの身体が路地の奥へと跳ね飛ばされる。当たったのだ。円筒シリンダを破壊したかどうかは分からないが、人形のもろい軀く体たいに散弾を浴びせてやった。

　胸の奥につかえていた息を吐き出した。

　警察車輌カゼツラの音が聞こえてきたのは、その直後だった。

「走るぞ」

　敵の状態を確認している暇はない。

　表通りまで走り、タクシーをつかまえて急いで乗り込んだ。仮面の男マスケリーノとつながりのない外資系の安ホテルを指定して、シートに浅く腰を下ろす。

「私の知らないホテルだわ」

「ああ、マフィアとは関係のない宿だ」

「外泊が続くのなら、着替えをもっと持ってくればよかったわ」

　手を握られた。隣に座ったフォーラは窓の外を見ながら、まるで旅行に出かけるみたいにうわついている。

「なにか顔についてるかしら？」

　アレッシオの視線に気づいたフォーラは、鞄から取り出した手鏡で自分の顔を覗のぞき込んだ。そのまま、しばらく眺めてから満足げに微ほほ笑えんで鏡をしまう。

「お前は何者なんだ」

「私よりも、ご主人様のほうが知っているわ」

　呟いてどこか遠い瞳めをする。

「銀の城のご主人様か」

「いいえ、あなたよ」

　フォーラは楽しそうに笑って窓の外に視線を送った。車は裏通りから旧市街の大通りに出て、まっすぐ北へ向かっている。大通りを歩く観光客たち、そのなかに自動機械人形オータマタの姿を何度も見かけた。

　アレッシオはそいつらの視界に入らないように、身を沈めてやりす

ごした。つくづくベルモントは人形だらけの街だ。そこに何体の殺人人形が紛れているか知れたものではない。

「そこを左に折れてくれ、あとは指示したとおりに頼む」

　汗で手が濡れている。ヴェッキオ橋を渡ったところでアレッシオは行き先を変えた。

　細い裏道を抜けて、アルノ川に沿うように北へ上る。観光地を離れ、古い町並みが続く山の手で、灯りの消えた古いホテルに車をつけた。

　ドゥオーモ・スプレンディドという名のホテルは、かつてこの観光の街の裏社会で三つのファミリーが抗争を繰り返していた頃に、街への進出を狙った外資によって買収されたものだ。仮面の男マスケリーノによって裏社会が再編されてからというもの、外資の多くがベルモントから手を引いたが、ドゥオーモ・スプレンディドのように採算の取れているいくつかの物件は、次の波乱を見越してそのままにされている。

　ホテルのフロントマンは、アレッシオの素す性じようを知っているので話が早かった。他た言ごん無む用ようで部屋を用意させ、狭いツインに転がり込む。そこでようやく息をつくことができた。

　あてがわれた部屋は七階だった。

　カーテンの隙すき間まから外を見ると、バルコニーの向こうの景色はもう明るくなっていた。

　アルノ川の黒いうねりに色彩がつき、ベルモントに朝日が昇ろうとしている。

　もうじき、人口四十万の巨大な街が動きだす。アレッシオと弾丸パロツトラたちが消えたことなど気にも留めず、新しい旅行者を迎え入れては経済という歯車を回し、用の済んだ旅行者を吐き出すのだ。

　先のことなど何も見えぬまま、太陽が赤い屋根の連なりを照らし始める。

　アレッシオは生き延びるために、仮面の男マスケリーノに先んじて次の手を考えなくてはならない。

　上着を探ると、さいわい煙草たばこは落としていなかった。ライターに火をつけ紫煙を肺に満たすと、胃が引きつるように痛みだす。

　トラットリア・カプレットでニコロの作った夕食を食べてからとい

うもの、なにも口に入れていないのだ。肉体は空腹を訴えているが、焼け焦げたルーカの姿が頭にこびりつき、食欲はまるで湧いてこなかった。死体を前に朝食を摂ることも平気なマフィオーゾが、情けない話だ。

「美お味いしいものでも食べましょうか」

　こっちの気も知らずにフォーラがはにかんでみせる。返事をするかわりにアレッシオはベッドに腰掛け、彼女の細い手首を握った。

「ご主人様……」

　フォーラの頬に紅が差す。しかしアレッシオは愛を囁ささやきたいのではなかった。

「電気式イミテーションを素手で壊したな」

「ご主人様のお役に立てたかしら」

「充分だ、どこで覚えた？」

　手を握られたままフォーラは少し考えて、そのまま答えるのを忘れてしまったかのように窓の外に視線を移した。いくら待っても答えの来る気配がなかったので、アレッシオは質問を変えた。埒らちの明かない会話でも、なにか話していれば頭が回る。

「ノヴェラがどこに行ったか分かるか」

「知らないわ」

「弾丸パロツトラのガキどもは？」

「誰のこと？」

　フォーラの視線は窓の外を向いたままだ。

「なら、狼はどこにいる」

「……赤ずきんを食べておなかいっぱい」

　それはリタのことだろうか。胸の奥にひりつくような不快感を覚えたアレッシオは握った手を離し、それから部屋の中を歩き回った。

　空腹が感情を昂たかぶらせる。薄布のような絨じゆう毯たんを革かわ靴ぐつで踏み鳴らしながら、怒りと焦しよう燥そうを少しでも身体の外へ逃がそうとした。不思議と恐怖はなかった。あの圧倒的な破壊と殺さつ戮りくを見せつけられても、恐怖心は完全に麻ま痺ひしたま

まだ。かわりにアレッシオを捕らえているのは、溶岩のようにどろりとした怒りの泥濘ぬかるみだった。

　くるった殺人人形どもに、狼男の怪物、そんな連中が寄ってたかってスラムの生活を踏み潰つぶした。なにが起きたのかも分からず、なぜ殺されたかも知らされずに、ガキどもは肉の塊かたまりに変えられたのだ。

　この御お伽とぎの国を支配しているのは、あんな怪物どもなのか。

「ふざけるな、俺たちは人間だ」

　二本目の煙草たばこに火をつけて、煙を吸い込んだ。フォーラはまだ窓の外を見ている。

　仮面の男マスケリーノは、彼女をどうしたかったというのだ。

　昨夜、旧市街の地下に隠された銀の城で、アレッシオは仮面の男マスケリーノの正体を見てしまった。両手両足が機械仕掛けの半分機械人形ハーフマタ、それが自分たちのボスだったのだ。

　そして奴は言っていた。フォーラは復ふく讐しゆうの道具だと。

　復讐の相手は人じん狼ろうなのだろう。

　なんのために？

　それはきっと、仮面の男マスケリーノが半分機械人形ハーフマタであることと関係があるのだ。奴の敵はオルマ・ロッサ。赤い足跡という名を持つこの暗殺集団は、この国の裏社会に深く食い込んでいる謎なぞの組織だ。この国のマフィアの誰しもが、その名前に畏敬の念を抱いている。

　南部に生まれたアレッシオがベルモントまで流れてきたのも、オルマ・ロッサのような本物の存在を身近に感じたかったからだ。ひとりの男として彼らと相あい対たいしてみたかった。

　仮面の男マスケリーノはそのオルマ・ロッサを人じん狼ろうマフィアだと断じ、ノヴェラとフォーラを狼退治の切り札にしようとしていた。そして、その背後にいるのは教きよう煌こう庁ちようだ。

　アレッシオの手の届かないところで巨大な歯車は回転を続け、ささやかな営みの全てを押し潰つぶそうとしている。この街が回るのに必要な棺かん桶おけがあるとして、そこに刻まれているのは俺の名前かもしれない。

　考えれば考えるほど、胸のむかつく話だった。

アレッシオのような男が雇われるか、そうでなくても喜劇ラツコントどもがやがて俺を殺しに来る。そうしてフォーラを連れ去り、また過か酷こくな魂たましいの試練を与えるのだろう。

どうすればいい。

生き延びるために誰を殺せばいい。

夜を待ってベルモントから脱出することも考えた。フォーラとともに仮面の男マスケリーノの手の届かぬところに身を潜ひそめよう。それはどこだ。カンパーニャか？　シチリアか？　この国を出て海を越えるべきだろうか。

頭に浮かぶ想像はどれもとりとめがなかった。焦あせりが思考を曖あい昧まいにしているのだ。

スイッチを切り替えないといけない。アレッシオは鞄かばんから出した銀のバンドネオンを膝の上に乗せた。惨劇の食堂トラツトリアに残されていたバンドネオンは、幸いどこも壊れていないようだ。いつかノヴェラに教わったのを思い出しながら、蛇腹ベローを動かした。

ぎこちないグレゴリオ聖歌が流れ出した。

「やっぱり下へ手たなのね」

ベッドに腰をかけたフォーラが、途方にくれた顔でアレッシオの指先を見ている。彼女の手には白銀の円筒シリンダが抱かれていた。

「ノヴェラが聞いたらがっかりするかも」

そうではない、ノヴェラはフォーラの円筒シリンダを蘇よみがえらせるためにこの楽器を奏かなでていたのだ。

いったい彼女の華きゃ奢しゃな身体に、どのような秘密が隠されているのだろうか。仮面の男マスケリーノはその機能を呼び起こさせるために彼女の歯車に負荷をかけ、憎しみという名の魂を生み出そうとしていた。

「ノヴェラは君の何だ？」

「弟よ」

白銀の円筒シリンダを撫なでながらフォーラが微ほほ笑えんだ。

その中にノヴェラがいる。いや、その円筒シリンダが修理され、再び動き出したときにノヴェラは現れるのだ。アレッシオは黙って蛇腹ベローを動かし続けた。哀調を帯びたバンドネオンの音色が、ノヴェ

ラとルーカ、そして弾丸パロツトラの子供たちとの日々を蘇よみがえらせる。

　料理の得意なニコロには店を出させてやろうと思っていた。リタに接客を覚えさせれば、街角に立って病気をもらってくる心配もないだろう。そしてルーカには、もっとマフィアの作法を覚えさせてやらなきゃなるまい。安いウィスキーをグラスに一杯、その匂いを嗅かいだだけで顔を赤くしているうちはまだまだ洟はな垂たれだ。『俺が弱いんじゃねえよ、親父バーボが飲んだくれなんだ』ジュースのグラスを離そうともせずに、あいつはそんなことを言いやがる──。

　ミスタッチばかりで、どこを引いているのか分からなくなってしまった。

　バンドネオンを抱えたまま、アレッシオは歯を食いしばった。何気ない日常の思い出だけならまだいい。アレッシオの脳内では、無邪気に笑う弾丸パロツトラのガキどもと血まみれの食堂トラツトリアが明滅を繰り返しているのだ。

　焼け焦げたルーカの死体、踏み砕かれたノヴェラの頭部、血の海に横たわったリタとリッカルドの写真、食い荒らされた子供たち……押し寄せてくる弾丸パロツトラの記憶をやり過ごしながら、アレッシオは自分が親父バーボでなくなったことを改めて感じていた。

　手の中に残ったのは頭のおかしなフォーラとノヴェラの円筒シリンダ、あとは敵ばかりだ。

　蛇腹ベローを支えた右手を見る。この手はもはや怪物ではない。

「なぜだ」

　自然と言葉が洩もれた……なぜこうなった？

　命のやり取りの現場で右手の怪物を制せい御ぎよできなかったのは初めてだ。初めて銃を撃った八歳のときから、どんな絶望のただ中にあってもこいつだけはアレッシオに忠実だった。

　もしも怒りで心がぶれたというのなら、今のアレッシオは一匹狼の殺し屋などではなく、ただの親父バーボになってしまったのだろう。

　そんな奴が、あんな化け物どもと渡り合えるものか。

　もはや市警察に頼るほかに途みちはないのかもしれない。どうしてあのとき、俺はパオロに全てを打ち明けなかったのだろう。

「なにを考えているの？」

「どうやって生き残るかだ」

「それは、楽しいこと？」

　ノヴェラの円筒シリンダをさすりながらフォーラが目を丸くする。

　アレッシオはため息をついた。

「どうして楽しくないことばかり考えているのか、俺にも分からんよ」

　思い返せば、それは姉を火事で失ったときからずっと続いている。あの夜からアレッシオを守る者は誰ひとりいなくなってしまった。疲れた身体を預ける相手は永遠に失われたのだ。

　頼る者のなかった惨みじめな少年時代、アレッシオを守るものは己おのが手で磨みがき上げた銃の腕だけだった。

　勝つことではなく、負けないこと。

　勝つことではなく、死なないこと。

　一流のマフィアになってみせると大きな風ふ呂ろ敷しきを広げ、銀幕の中にいるマフィオーゾのスタイルを真ま似ねながらも、アレッシオは結局そうやって生きてきた。頭上に掲げた野望とはうらはらに、楽しくないことばかりを考えて生きてきたのだ。それを間違っていたとは思わない。おかげで今日まで生き延びてこられたのだから。

　だが、こうも思う。

　姉を救えなかったあの夜から、アレッシオは高く飛ぶための翼を無くしてしまったのだろう。偽りの希望に惑わされぬように、命を無駄にせぬために、翼を無いものと定めたのだ。

　だからいま、アレッシオは街の底にいる。

　いや、街の底からも追われようとしているのだ。

「フォーラは何を考えていたんだ」

「これから行くところのことよ」

「これから？」

「ええ、今度は西のほうがいいわ」

　歯を見せて笑ったフォーラは、できそこないの聖歌に乗せて歌うよ

うに語り始めた。

「サルディーニャの別荘ヴイラは素敵だったわ。水の都も好きだけど、地中海の温かくて明るい陽差しが忘れられないの」

　仮面の男マスケリーノとの記憶でも蘇よみがえったのだろうか、フォーラがうっとりと目を閉じる。

　ノヴェラのことも、ルーカやリッカルドたちのことも忘れて、彼女は夢ばかり見ているのだ。

「そこで俺と寝たのか」

「ふふふ……」

　思わせぶりに笑うだけで答えようとはしない。いたずらな表情は、まさしくフォーラのものだ。

　マフィアは性的な逸いつ脱だつをしてはならない。

　仮面の男マスケリーノにしてみれば、アレッシオとフォーラの関係は逸脱にほかならないだろう。掟を破った者には相応の報いが訪れる。だからこんなことになってしまったのだ。アレッシオがフォーラを抱いたせいで、ガキどもは……。

　首を振った。思考がおかしな方向を向いている。アレッシオが兄きよう弟だいをボスに返さなかったことと、食堂トラツトリアが人じん狼ろうに襲われたことは無関係だ。

「これから行きましょうか」

「どこへ？」

「サルディーニャよ、きっと忘れられない旅行になるわ」

「無理を言うのはやめてくれ」

「無理じゃないわ、だってご主人様が一緒だもの。宴うたげが始まるのはこれからよ」

　緑柱石アクアマリーナの瞳が、屈託のない光を湛たたえたまま笑っている。アレッシオの背筋を悪お寒かんに似たものが走った。

　こっちの苦労も知らずに、フォーラは彼女の思い描く未来図を次々と口にする。

「ヴィラのお庭にあった……あれは何の樹だったかしら。そこの木陰

に吊つるしたブランコから、私の瞳みたいに青い海を見て過ごすのよ。時が過ぎるのも忘れるくらい素敵な眺めだわ。ノヴェラを呼んできてバンドネオンを弾かせるのもいいわね。それからキスは毎日……」

「やめろと言っているんだ！」

　バンドネオンの箱を叩いて声を荒げた。

「サルディーニャの別荘か。そんな所に飛んで行けるのなら、とっくにこんな街を捨てているさ。だがな、今の俺は拳銃ひとつまともに扱えなくなっちまった。もうベルモントを出ることだってできやしない。こんな穴倉みたいな部屋で息を潜ひそめるだけなんだ。いかれた人形なんかに関わったばかりにな！」

　フォーラはきょとんとした目でアレッシオを見上げている。彼女に何ひとつ責任がないことは分かっている、それがたまらなかった。

「互いに助け合うのがマフィアだと言うのなら、家族ファミリーを失くした親父バーボはいったい何なんだ。この街を出て、俺は何をすればいい」

「私が決めていいの？」

　緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマがきらきらと輝いた。

「ふざけるな」

　でき損ないの人がら形くため──その言葉を辛かろうじて飲み込んだアレッシオは、逃げるように立ち上がって窓を開けた。バルコニーの向こうに赤い屋根の町並みがどこまでも続いている。しかしベルモントの景色は意識の中にほとんど入ってこなかった。

　煙草たばこに火をつけ、灰を落としながら吸い続けた。

　いったい俺はガキどもの復ふく讐しゆうを果たしてやることが本当にできるのか。

　右手を銃じゆう把はにかける。まるで他人の手だ。

　やがて背後から、かすかな寝息が聞こえてきた。骨董人形アンティークは人間のように眠ることもできるが、睡眠が不可欠というわけではない。アレッシオは視線を窓から外さなかった。無邪気な彼女にどのように接すればいいのかも分からず、煙草を吸い続けた。

　五本も吸い終えるころには、陽が高く昇っていた。

　ベッドを振り返ると、フォーラは背筋を伸ばしたままの格好で、ノヴェラの円筒シリンダを抱きながら寝息を立てていた。

　しばらく人形の寝姿を眺めていたアレッシオは、テーブルの上に置いたままのバンドネオンを鞄かばんの中に戻すことにした。銀のバンドネオンとノヴェラの円筒シリンダ――なにがあっても、これらを手放すわけにはいかない。フォーラの隣に腰を下ろし、彼女が抱いたままのノヴェラの円筒シリンダに手を触れた。

　ふと、緑柱石アクアマリーナの瞳が開かれた。

「ノヴェラの夢を見たわ」

　円筒シリンダを抱えたフォーラが微ほほ笑えむ。その声色はさっきまでと違い、どこか懐かしい響きを帯びている。アレッシオは黙って次の言葉を待った。

「あの子ったら、また難しいことばかり話していたわ。進歩がないのよ」

「ノヴェラはなんと言っていた？」

「知りたい？　でも、今日はゆっくり寝ないとだめよ」

　振り向いたフォーラの手が、アレッシオのジャケットの中に滑り込む。肩を押され、ベッドに仰あお向むけにされた。予想以上の力に抗あらがえなかった。

　身軽に飛び跳ねたフォーラは、アレッシオの腰の上に跨またがって顔を寄せてきた。

「眠るまえにあなたの好きだったお話をしないとね、アレッシオ」

　そうしてフォーラが口ずさんだのは、蛙かえる姫ひめの物語だった。それはアレッシオがヴェネツィアの娼しよう館かんで何度も聞いた御お伽とぎ話ばなし、フォーラがテレジーナだった頃の物語だ。

　無臭の吐息が耳じ朶だをくすぐり、黄金色の髪が頬にかかった。間近に迫った唇から紡つむぎだされるのは、魔法で蟇ひき蛙がえるにされた愚かな娘の物語。それが歌うような声に乗せて、淀よどみなく流れてゆく。

「あなたはだあれ？」

　フォーラが耳元で囁ささやく。

　苦笑したアレッシオは、ヴェネツィアの夜を思い描きながら続きの

台詞せりふを口にした。

「お前をちっとも愛していない王子だよ」

「愛しい王子様。きっと私が美しくなれば、私を思い出してくださるでしょう」

　くすくすと笑いながら、フォーラは蟇蛙の台詞せりふを口にする。

　ヴェネツィアでも、アレッシオの隣には彼女テレジーナがいた。

　彼女は自動機械人形オートマタの娼しよう婦ふ、しかし若いアレッシオにとってはかけがえのない存在だった。

　それがある日いなくなり、八年後のベルモントでフォーラと再会した。

　あの出会いが偶然だったのか、必然だったのかは分からない。確かなのは、もう彼女を失ってはならないということだ。

　白い手のひらに視界を塞がれると、猫のように緊張していた五感が解きほぐされてゆく。

「あなたは疲れているわ、アレッシオ。たっぷり眠りなさい」

　甘い囁きが脳に染みる。フォーラの御お伽とぎ話ばなしに導みちびかれながら、アレッシオは深く重い眠りに落ちていった。

iii

　銀の刃やいばが空を裂き、次から次へと襲い掛かってくる。

　月光を弾き返す鋭利な刃をかいくぐり、丸太のような腕で横よこ殴なぐりになぎ払った。ばらばらになった人形が宙を舞って、ベルモントの夜景に吸い込まれてゆく。

　屋根から屋根へ、狼の筋力にものを言わせて飛び移る。

　愛すべき月の光を浴びながらフランチェスコは夜空に吼ほえた。

　満月の夜は、牙と爪の支配する狼の世界だ。人間の子供の血を浴び、呪わしい機械人形どもを粉々に撃ち砕く。これこそが狼の宴うたげにふさわしい。

　きらびやかなドレスをまとった人形の両腕を押さえ込み、ひと思いにに引きちぎった。切断された細管から噴き出した水銀が月光に煌きらめいて、ベルモントの夜景を飾りたてる。

　喉のどを衝つくのは歓喜の叫びだ。

　銀の短剣を振り回す人形を肘ひじで跳ね上げ、左の拳を胴体に打ち込んだ。人形の外がい殻かくが粉砕され、突き込まれた拳が円筒シリンダを握り潰つぶしながら背中へ貫通する。かたかたと悲鳴を上げるそいつの身体を夜の街に放り捨てた。

　遥はるか地上を見下ろすと、横転炎上したバスと無数に散らばる人形の残ざん骸がい、その間を警官たちが行ったり来たりしている。

　少し離れた車道から警察車輛ガゼツラが走り出すのが見えた。

　満月の光を浴びた狼の嗅きゆう覚かくは、その中に覚えのある匂いを嗅ぎ取った。口の周りを赤く染めた子供の血を、べろりと舌で舐なめ上げる。

　これは、あの食堂トラツトリアで嗅いだのと同じ匂いだ。

　隣の屋根に飛び移ったフランチェスコは、警察車輛ガゼツラがスラムの方角へ消えてゆくのを黙って見送った。追う必要はない。中にいるのは生き残りか、取り調べの警察官といったところだろう。

　路地裏で最後の一体を破壊したフランチェスコは、食堂トラツトリアで拾ってきた革の鞄かばんから、銀の仮面マスケラを取り出した。

　狼にとっては忌いまわしい金属。触りたくもない銀器の仮面マスケラだ。

　しかし、この仮面は不思議とフランチェスコの興味をそそった。

　面白い顔だ。

　フランチェスコは、爪つめの先に引っ掛けた仮面の表情を覗のぞき込んだ。黄金の瞳を見開いて、笑ったようにも泣いたようにも見える仮面の目を睨にらみつける。腹におさまった子供のうち、誰が被っていたものだろうか、子供の玩おも具ちやにしては高価な代しろ物ものだ。

　そしてこの仮面からは、どこか自分に似た怨おん念ねんを感じるのだ。

　目の穴の向こうには、ぽっかりと夜の闇が広がっている。

　不意に、空気を切り裂く音が聞こえた。

　フランチェスコが跳躍すると、さっきまで頭のあったところを何かがかすめて飛び、建物の石壁に当たって硬質の音をあげた。

　着地と同時に獣の血が沸ふつ騰とうする。路地の左右から、数十体の自動機械人形オートマタが姿を現したのだ。

　旧市街で破壊した路線バスに乗っていた何倍もの数の人形が全て、狼に致命傷を与える銀の武器を持っている。

　そうだ、宴うたげはこれからだ。

　まだ壊したりない。肉のない身体を粉々に粉砕し、踏みにじりたくてたまらない。月が沈むまで、狼の夜に終わりはないのだ。

　もっと来い、街中の人形が集まって来い。この路地裏から破壊の宴の第二幕が開くのだ！

　雄お叫たけびをあげたフランチェスコは、石いし畳だたみを蹴けって人形の輪に飛び込んでいった。

＊

「そう、宴が始まるのはこれからよ」

　ご主人様の手を引いた私は、ヴィラの寝室からアクアマリーナの水みな面もを見下ろせるバルコニーに出た。

　目め路じの限りに広がる海と空の色。バルコニーから見下ろした海辺の景色はどこまでも青く澄み渡り、まるで私の瞳が風景に溶け出したみたいだ。

　緑柱石スメラルドの海岸なんて呼ぶ人もいるけれど、太陽をきらきらと反射する海の色はアクアマリーナと呼んだほうがずっとしっくりくる。

　吸い込まれそうな青空を見上げて、私は深呼吸をした。

　空から降りてきた風が、穏やかに波打つアクアマリーナの海を渡って、私たちのいるバルコニーを吹き抜けていった。

『潮風を浴びるのは身体によくありません』

　ペルラ姉様ならきっとそう言うだろうけど、そんなこと私はまるで気にしない。

「さあ、踊りましょう」

　手を引かれたご主人様が少し照れくさそうにしている。だから私はこれ見よがしにドレスの裾すそをひるがえし、太陽の下でくるくると回ってみせた。

「夜になったらご主人様の大好きなペコリーノのピザを食べましょ。私はピザのかわりにたっぷりのフルーツ、それに食後のミルト酒があれば最高。そうだ、ご主人様は心配するかもしれないけれど、ヨットで沖に出るのもいいわ」

　次から次へ素敵なアイデアがひらめいてくるのは、ご主人様と二人きりだから。ご主人様と一緒にいるときは、頭も身体も、私の全てが活き活きと輝きだすみたいだ。

　気がつくと──私が目を離した隙に、ご主人様は隣の部屋のノブに手をかけていた。

　だめよ、そっちに行ってはいけないのに。

　けれど、言葉が思うように出せなくなった私の前で、ご主人様は扉を開けてしまうのだ。

「行きましょう、そこを見るのはいけないことよ」

　私は血の海を越えて、ご主人様の腕を取った。狼に喰い荒された子供の死体をよけながら、扉の向こう側へ物言わぬご主人様を引き戻した。

「家の中はだめね。やっぱり海に出ましょう」

　バルコニーに戻ったご主人様は、煙草たばこをくわえて水平線の向こうを見つめている。私はそんなご主人様の背中を眺めながら、淡く透明な海の奏かなでる波音に耳を傾けていた。

　午後になって、ノヴェラがバンドネオンを弾きにやってきた。

　私は木漏れ日の射す木陰で、樹に吊つるされたブランコを漕こいでいた。漕ぐのをやめないまま手を振ってやると、ノヴェラは少し決まりが悪そうにはにかんでみせた。

「ご主人様は留守にしているの、ここには私しかいないわよ」

　ブランコの上から声をかけると、ノヴェラは黙ってうなずいた。

　近くには白いテーブルと折りたたみ式の椅い子すがある。ノヴェラは椅子に足を組んで座ると、膝に乗せたバンドネオンの蛇腹ベローをゆっくりと動かし始めた。

　懐かしい音色がサルディーニャの温かい風に乗る。ブランコのロープが樹に擦こすれる音がうるさくなったので、私は漕ぐ足を休めてノヴェラの演奏に耳を傾けた。

「フォーラ、君はだれ？」

「あなたの■よ」

　なんと言ったのか、自分でも聞き取れなかった。ノヴェラはちょっと困った顔をして先を続ける。いつものバンドネオンの治療なんだと分かって、私は少しがっかりした。

「フォーラはどうしてひとりでここにいるの」

「ご主人様を待っているのよ」

「ご主人様はどこ？」

「知らない。きっとお仕事が忙しいんだわ」

　ブランコの下の芝を蹴っ飛ばす。

「せっかくノヴェラが来ているのに、ご主人様はどこへ行ってしまったのかしら」

「フォーラは、僕とご主人様を会わせたくないんじゃなかったの？」

「そうよ。でもご主人様は少し疲れているの。ノヴェラのバンドネオンを聴きたがるわ」

　サルディーニャの青い海も、ご主人様の心を安らかにはできなかったのだ。

「どうして？」

「決まってるわ、貿易のお仕事が大変なことになっているのよ。だから私は、ご主人様を慰めてあげるの」

　ブランコから降りて、ノヴェラの向かいに腰を下ろした。

　テーブルのミルト酒を口の中で転がす私を、ノヴェラは眩しそうに見ている。

「知ってる？　ご主人様にはお姉さんがいたのよ」

　ノヴェラが首を振った。

「知らなくてもいいのよ。ずっと昔に不幸があって亡くなってしまった人だから」

「フォーラはその代わりになるの？」

「そうよ、私にしかできないことだもの」

「そうだね」

　バンドネオンのボタンに指先を躍らせながら、ノヴェラが静かに笑う。なぜだか私は、その緑柱石スメラルドの瞳に魅みせられてしまった。

「ねえ、ノヴェラ」

　椅い子すから腰を浮かせた私は、ノヴェラの足元の芝生しばふに膝を抱えて座りなおした。

　バンドネオンの音色は優しく流れてくる。



「ここで聞いてもいい？」

「うん」

　これまでずいぶん意地悪をしたのに、ノヴェラは身体を預けさせてくれた。

「私、ノヴェラのことが嫌いだったわ」

「それは、好きじゃないってこと？」

「違うわ」

　バンドネオンの音色に乗せて言葉を交わす。

「好きだけど嫌いだったの、なぜって……」

「僕がご主人様を取ってしまうと思ったから」

　先を越された私は、口を尖とがらせてノヴェラを見上げる。

「ノヴェラはいつだってご主人様と一緒にいたわ。私がお屋敷を追い出されたときだって、ずっとご主人様に愛してもらってた」

「けれどご主人様は、ずっとフォーラのほうを見ていたよ」

「嘘うそだわ、私を慰なぐさめているのよ」

「嘘じゃないよ、僕という存在は、君を助けるために在あったんだ」

「ノヴェラはそのために生まれたの？」

「ご主人様にとってはそうだった。けれど、僕にとっては違う」

「難しいわ」

「難しいよ、僕もまだ分からない。ずっと分からないんだ」

　ふいに涙が流れてきた。悲しくなって、私は泣き声になった。

「私がノヴェラを嫌いなのはそれだけじゃないわ。ノヴェラはご主人様と一緒になって、醜みにくい私の姿を見てしまったもの」

「フォーラが憎んでいるのは僕なの？」

「え？」

考えてみた。ノヴェラのバンドネオンを聴きながらたくさん考えて……。

「分からないわ」

私は首を振った。

「けれどご主人様は、私のことを嫌っているわ。醜みにくい化け物で、頭のおかしいがらくただって思ってる」

どうしてそんな風に思われるようになってしまったのかしら。

涙が止まらなくなって、私はノヴェラの外がい套とうの裾すそを引っ張った。

「きっと、私が御お伽とぎ話ばなしを忘れてしまったせいだわ。赤ずきんも、テレジーナの結婚も、なにひとつちゃんとお話できないからよ」

「だからご主人様はフォーラの王子様になれなかった」

「そうよ、私はご主人様の命令にも、ペルラ姉様の期待にも応えられなかったわ。だから妖精の魔法は解けないの」

「それは、フォーラがフォーラだからだよ」

はっと、電流に打たれたように私はノヴェラを見上げた。

「私は、私？」

ノヴェラの声が私の中で響く。私の頭━ううん、円筒シリンダの中で、ノヴェラの言葉が音楽になって弾けるのを感じる。

「いま、ご主人様はフォーラに優しい？」

「うん……」

手の甲で涙を拭ぬぐう。そんな私を緑柱石スメラルドの瞳が見つめている。

「それならご主人様はもう、フォーラの王子様なのかもしれない」

「ノヴェラはロマンチストだったのね」

恥ずかしいのをごまかそうと、私は咳せき払ばらいをして芝しば草くさを引っこ抜いた。

グレゴリオ聖歌の旋律に耳を傾ける。どうして、いつかの私はノヴェラのことを女だなんて思ったのだろう。彼はこんなにも逞たくましく私を支えてくれているのに……。

演奏の終わりに、ノヴェラは優しい声でこう言った。

「フォーラ、君は僕のなに？」

「妹よ」

私はノヴェラの目を見ながら、はっきりと答えた。

心の霧きりがさっと晴れたみたいだ。透き通る潮しお風かぜを受けながら訳もなく笑ってしまった。

太陽が少し西に動くと、風も穏やかになった。

日が暮れるまで、私はノヴェラにもたれかかって彼の話を聞いていた。

ノヴェラの話は難しいことばかりだけど、ノヴェラの言葉はバンドネオンの音色みたいに私の中に染み込んでくる。

双ふた子ごの私たちは、そっくり同じ脈みゃく拍はくを刻んでいる。

私はいつの間にか眠りに落ちてしまい、気がつくとノヴェラはいなくなっていた。

夜になると、私は王子様に抱きついて甘えた。

疲れきった王子様は、私の助けを待っている。

だから、もう少しで妖精の魔法は解けるのだ。

私は王子様に腕枕をされながら、じっとその時が来るのを待っていた。

*

「つまりは馬鹿げた話なのさ。魔法がひとりでに解けるなど、それこそが御お伽とぎ話ばなしだとは思わないかね？」

「貴方あなたにかかった呪いもまた、ひとりでには解けないのでしょう」

「呪われている？　この聖せい別べつされた銀の城に住む私がかね」

闇やみの中、仮面の男マスケリーノの甲かん高だかい声が響く。

ペルラは受話器を持ったまま、眉まゆひとつ動かさずにその声を聞いていた。

恐怖というものは、いろいろな形で心の中から滲にじみ出してくるものだ。その兆候を聞き逃すまいと、耳をそばだてていた。

「その呪いは貴方ご自身が、灰色の脳細胞にかけたものではありませんか？」

「それは子供向けの哲学だね。全てのはじまりは私の脳のう味み噌そにあるというわけか。この御伽の街に襲いかかろうとしている悲劇の、全ての発端がここにあると」

ペルラの私室は真の闇に包まれていた。密閉された箱のなかに、照明となるものはひとつとして存在しない。ここに光は不要なのだ。この部屋のどこに何があるのか、それらの正確な位置は記憶のデータとして円筒シリンダの楽譜スコアに記録されているのだから。

真珠の瞳が像を結ぶ必要があるのは、指揮棒バツケツタを操るときと、懐中時計サポネツタで敵を切り裂くとき、そして恐怖に怯おびえる犠牲者の顔を愉たのしむときだけだ。

「言っておくがね、私はフォーラの悪あがきが嫌いではないのだよ。悪あがきこそが、魂たましいの練成には欠かせないものだと考えているからね」

仮面の男マスケリーノがことさら鷹おう揚ような口調になった。受話器の向こう側は光溢あふれる銀の城だ。そこで唾つばを飛ばしている仮面の男マスケリーノの姿をペルラの円筒シリンダは明確に思い描くことができる。

いかにして仮面の男マスケリーノの精神にダメージを与えるか。ペルラの円筒シリンダはそれを何度もシミュレートしている。その一方で円筒シリンダに刻まれた彼女の理性は、その行為自体が仮面の男マスケリーノの掌たなごころの上だと警けい鐘しようを鳴らしてもいる。

しかし……できることなら、仮面の男マスケリーノが絶望に打ちひしがれる声を聞いてみたい。

ペルラは感情を完全に排除した声で、事実だけを告げることにした。

「……ノヴェラが破壊されました」

「なんだって」

「スラムの子供を寄せ集めた食堂トラツトリアが人じん狼ろうに襲撃され、そこにいた全員が死にました。ノヴェラの軀く体たいは粉砕され、瞳ジエ石ンマと円筒シリンダを奪われました」

「ばかなことを言うな、そんな報告は入っていない」

「当然です。報告をするべき自動機械人形オートマタもまた、人狼と貴方の部下によって破壊されているのですから」

「なんということだ、それでは……」

「貴方は丸腰になったのです、仮面の男マスケリーノ」

　仮面の男マスケリーノの声に、怯えの色が滲にじみ出してくる。淡々と事実だけを突きつけながら、ペルラは暗い愉ゆ悦えつを味わっていた。

「ならばどうにかしたまえ、君達にとってもこれは重大な局面だろう。私が死んだら、カリオストロの遺い稿こうも手に入らないのだよ」

「そうでしょうか？」

　受話器に寄せた口元がほころぶ。

　ペルラの円筒シリンダは、受話器の向こうにいる仮面の男マスケリーノを想像した。肥満した小心男の慌てふためく様さまを思うと、円筒シリンダの収められた下腹部がかすかに熱を帯びてくる。

「無防備な銀の城では、満足に眠ることもできませんか？」

「意地悪なことを言わないでくれ。私だって相そう互ご不ふ可か侵しんの約やく定じようは承知している。しかし、あと少しでフォーラの魔法物語フイアーバが完成するのだよ」

「貴方あなたがそう思うのは自由です」

「今度こそは本当だとも。いったい私が、これまでに何体の人形を弄いじり回したと思っているんだい。私の錬れん金きん術じゆつが完かん璧ぺきだということは、君が指揮棒バツケツタで確かめた通りじゃないか。その私が言うのだから間違いない。白銀の円シリ筒ンダ、錬金術の楽譜スコア、退たい魔まの機から構くり──必要な装置は全て整っている。あとはその玉ぎよく座ざにつく者が、我を我と思えるかどうかが鍵なのだ」

　確かにその言葉は正しい。

　玉座につく者──つまり円筒シリンダの機能を統すべるフォーラの意識が、体内に仕組まれた機構を受け入れ、御ぎよしえるかどうかだ。その成否はペルラにも分からない。

「はじめに神は言った、光あれ！」

　仮面の男マスケリーノが受話器の向こうで声を張り上げた。

「フォーラの瞳石ジエンマに光が宿るのを、私はただ待ち焦がれるのみだった。つまりは君と同じことだ、可愛かわいいペルラ。我々は追い追われる間柄であり、共に一人の相手をめぐる恋こい敵がたきでもあったのだな」

「幼よう稚ちな言葉遊びに付き合うつもりはありません。どちらにしろ貴方は切り札を失いつつあるのですから」

　そろそろ頃合いだ。切り札を突きつけてやろう。

「お分かりですか、アレサンドロ・ペトルチアーニ？」

　ペルラは努めて平淡にそう告げた。

　本名で呼ばれた相手の息が詰まる。

「これまで隠してこられたのでしょうが、私どもは貴方の来歴も、人じん狼ろうを恐れる理由も全て存じ上げております。壊れた人形たちを玩もてあそび、己をジャケ・ドローなどと嘯うそぶいても、せいぜい貴方は機械仕掛けの道化師パリアッチだったということです」

「君が調べたのか。あの役立たずが余計なことを喋しゃべったせいだと言うのだな」

「貴方あなたの部下が口を滑らさなくても、早晩、道化師パリアッチの正体は炙あぶり出されたことでしょう」

　言葉を紡ぐたびに、円筒シリンダの奥底で愉ゆ悦えつの音が弾ける。

「カリオストロの遺い稿こうが本物であることを認めます。貴方の会社には骨こつ董とう品ひんや美術品を取り扱う部署がありました。ルイ王朝の没ぼつ落らくとともに流出した何らかの文書がそこに紛れ込んだとしても、いっこうに不思議はありません」

「そうだとも。カリオストロの遺稿に基づいて作られたノヴェラとフォーラの存在こそが、実在の証あかしなのだよ。そして、その中身

は全て私の頭の中だ」

「その言葉が確かなら、遺稿の回収を断念しなくてはなりません」

「どういうことだね」

「貴方は何があってもその内容を打ち明けはしないでしょう。ならば、貴方の死をもってその秘密が封印されるだけでも次善とみなします」

「それは君の主人の決定かね」

「そう受け取っていただいて結構です」

「……私にはもう利用価値がないのかね」

　仮面の男マスケリーノの声がみるみる萎しぼんでいった。

　これが人間だ。いくら銀の装飾で己を飾り立てようと、生命の危機を前にすればその仮面は脆もろくも剝はがれ落ちる。しばらくの沈黙の後、仮面の男マスケリーノは別の戦術に出始めた。

「ペルラ、なぜ分かってくれない、私はただ君に会いたいのだ」

「なぜでしょうか」

「愛しているからさ、可愛かわいいペルラをね」

　今度こそ声に出して笑った。人形を笑わせるのだから、この男は大した道化師だ。

「惨みじめですね、ペトルチアーニ。今の貴方は汚お穢わいに溺おぼれた蛆うじ虫むしのように滑こつ稽けいです」

「君が私のことをどう思おうと構わんよ。それでも私はペルラを愛している。これだけはどうやっても曲げられない真実というやつだ」

「仮面の男マスケリーノに真実などありません。貴方の全てが仮面の嘘なのですから、最後には何も残らないのです。信頼に足る部下も、愛すべき家族も、恋人のように慈いつくしんだ人形ですら……」

「ならばそうして、私のフォーラが壊されるのを見ているがいい！」

　ペトルチアーニの声が激するのを、ペルラは黙って聞いた。

「君の言うとおりだよ、私は失った娘の面影をフォーラに求めた。さながら、君が失った誰かの面影をフォーラに求めているようにね！」

「なにを言っているのです」

「ペルラ、君は私のフォーラを使って、こっそりと自分の欲望を満たそうとしていたのだよ。まるで泥棒猫のようにね。主人の意のままにしか動けない人形のくせに、なかなか大胆じゃないか」

「なぜそう思うのです。答えなさい、ペトルチアーニ」

「君はここに来る、必ずね。私が見ている映像を取り返しに来るのだよ」

　音の広がりが変わる。ペトルチアーニが受話器の向きを変えたのだ。スピーカーから流れてくるのはペルラとフォーラの会話だった。

「君の調律は全て映像に記録してある。それを一つずつ検証していくのが私の楽しみだったのさ。おや、怒っているのかね、黙ってしまったようだが」

　仮面の男マスケリーノの声はもう怯おびえていなかった。ペルラを嘲あざけるように笑っていた。そうやって挑発して、銀の城に誘い込もうというのだろう。

「誰かね、君の姉君というのは？　それも銀貨アルジエントの一人かね？」

「…………」

「まったく冗談ではないよ、私のフォーラをそんな風に変えさせたりはしない。楽譜スコアは私が元に戻していたのさ。ああ、早くこの記録を見せてやりたいよ、フォーラに手を握られたときの君の狼ろう狽ばいを。あんなに頬を染めて、まるで恋人を前にした生き娘むすめのようだ」

　受話器を握ったままペルラは下腹部を押さえた。

　そこに収まった円筒シリンダには瞳石ジエンマの命令が書き込まれている。ペルラは主人パドローネから命じられているのだ、仮面の男マスケリーノを殺害してはならないと。

　ただひとつの例外を除いて──。

「どうだね、下腹部が熱くなってきただろう？　それは仕方のないからくりだ。前にも言った通り、人形の円筒シリンダは子宮の上についている。だから君が興奮を覚えると発熱した円筒シリンダが子宮を疼うずかせるという寸法なのさ。まったく官能的な製品だよ、君たち自動機械人形オートマタは……」

　黙って受話器を置いたペルラは、薄い唇を噛かんで呼吸を整えた。

　ペトルチアーニの言葉どおり、回転を早めた円筒シリンダの発熱が下腹部を熱く疼かせている。

「ただ一つの例外──」

　円筒シリンダに刻まれた命令を口の中で呟いた。

「──銀貨アルジエントについての秘密が仮面の男マスケリーノの口から漏ろう洩えいする危険がある場合に限り、殺害もやむを得ないものとする」

　じゃらり。

　銀の鎖が腕から垂たれ落ちる。

　無意識のうちに、ペルラは銀の懐中時計サポネツタを手の中に収めていた。

iv

　ショーケースに入った人形を描くように言われて、俺はまずケースの枠わくを描いてしまった。これでは人形の大きさが制限されてしまう。

　子供の頃の話だ。今でも、どうして人形から描かなかったのかと思うことがある。

　夜までには、まだ少しだけ時間がある。

　M84の弾だん倉そうに.380ACP弾をこめながら、アレッシオはドレッサーで髪を梳とかすフォーラを眺めていた。

　こっちの視線に気づかないふりをしているフォーラだが、髪の手入れはいつもよりも念入りだ。黒服の殺し屋は頭の中に酸素を行き渡らせようと大きく息をついた。

　まったくどうかしていた。

　拳銃はアレッシオの命いのち綱づなだ。いつでも使えるようにしておかなければならない。なのに昨日は、そんな当たり前のことすら忘れていたのだ。

　フォーラの腕の中で目を覚ましたとき、窓の外は薄はく暮ぼのオレンジに染まっていた。

銃じゆう帯たいを吊つるしたまま眠りに落ちたというのに、寝覚めは悪くなかった。時計を見ると、六時間はたっぷり眠ったことになる。虚きよ脱だつから我に返ったアレッシオは、真っ先にホテルの逃走経路を確認することにした。

部屋を出て、非常階段と内階段を使って地上と屋上を二往復する。北向きに建てられたホテルの屋上から地上を見下ろすと、その高さに軽い眩暈めまいを覚えた。

高いところは苦手だ。

胸の底から嫌なものがこみ上げてくる。姉のことなど思い出すのではなかった。アレッシオの高所恐怖症がひどくなったのは、あのときからだ。

東西に長い屋上を往復して隣のビルとの間隔を確かめた。どちらも距離がある。路地を挟んだ西側のアパートメントはホテルよりも一階低く、突端から七メートルほども跳躍すれば向こうの屋上に飛び移れるだろう。しかしアレッシオがそれを試すのは転落死と同じことだ。

あの殺人人形どもならばどうだろうか。七メートルの路地を軽々と跳び越えたフィアーバが、屋上から襲い掛かってきても全く不思議ではない。

逃げるなら下だ。そう決めて部屋に戻ると、フォーラが抱きついてきた。

「おかえりなさい、王子様」

昨夜の寝物語のせいか、すっかり蛙かえる姫ひめになりきっている。キスをせがまれたアレッシオは軽く唇を重ね、舌を入れる代わりに頭を撫なでてやった。

「もう、子供じゃないのに」

頰を膨ふくらませたフォーラは、それでも彼女なりに満足したのか、アレッシオの首に回した両腕を解とくと、ドレッサーに向かって上機嫌に髪を梳とかしはじめた。

窓の外、空の赤色が深みを増してゆく。

また夜がやってくるのだ。

金髪に櫛くしを通すフォーラの隣で、アレッシオは弾薬を補充する作業に取り掛かった。

食堂トラットリアから運び出した弾倉と銃弾が鞄かばんの中に詰

まっている。ざっと思い返しても、アレッシオは昨夜だけで一年分以上の鉛なまり弾だまをばら撒まいていた。できれば分解して手入れをしたいところだが、次にいつ敵が襲い掛かってくるか分からない。

　愛用のＭ84には.380ACP弾を十三発、ルーカの遺のこしたＭ９には９ミリパラベラムを十五発。サイズの違う弾だん倉そうにサイズの違う弾を詰め終わると、アレッシオは拳銃を銃帯から抜いたり戻したりして、安全装置と引き金の感触を手に馴な染じませた。

　まるで分解整備をした後のように、念入りに手応えを確認する。今け朝さは右手の怪物をコントロールできなかった。無様にも怒りに心を乱され、フォーラの助けがなければ殺人人形どもの餌え食じきになるところだった。

　銃を握った右手を見つめる。

　もう散弾銃スパスの弾は撃ち尽くしている。さっきフィアーバに浴びせたのが最後の一発だった。次の戦いで右手こいつが目を覚まさなければ、アレッシオを待っているのは野良犬のような死、それだけだ。

　指先でスライドの刻印をなぞってから、拳銃を戻して息をついた。

　力を抜け。思いつめるのは禁きん物もつだ──どちらもさんざんルーカに説教したことだ。

　ドレッサーのフォーラはまだ髪を梳とかしている。

　アレッシオは戯たわむれにペンを走らせ、ホテルのメモ帳にフォーラの絵を描いてみた。絵画の心得などないから、子供の頃に学校で描いたのを真ま似ねるだけだ。

　それは、ショーケースの中の自動機械人形オートマタ。いまだ仮面の男マスケリーノの作り出した迷宮を彷徨さまよっているフォーラの絵だ。

　まず人形を描き、あとからケースの枠わくをつける。

　最初からこうしていれば、アレッシオにも違う人生が待っていたかもしれない。

　描き損じの線を太らせて形のつじつまを合わせる。見たままを写し描くだけだというのに難しいものだ。黄金色の巻き毛をくるくると描き足していると、近くに視線を感じた。

　顔を上げると、フォーラが不思議そうな顔でアレッシオを見てい

た。

「王子様は、どうしてマフィアなのかしら？」

　フォーラはまだ蛙かえる姫ひめの世界にいるようだ。現実と御お伽とぎ話ばなしをごっちゃにしながら、そう聞いてきた。

「憧れていたからさ。ガキどもにとっちゃマフィアはヒーローだ」

「なら、幸せなんですね」

「憧れてるうちはそうだったよ」

　初めて人を撃ったのは八歳だ。つるんでいた少年グループの年長者たちが対立グループといさかいを起こし、アレッシオにも銃を渡されたのだ。でたらめな撃ち合いのなかで、アレッシオだけが人を殺した。

　あの時分は、頭の中に思い描いたマフィアのようなものに無邪気に憧れていた。自分でこしらえたマフィアという枠の中に入り込もうと躍やつ起きだった。

　しかし、それはアレッシオの物語ではない。ガキの頃に映画で見た、つくりもののマフィオーゾに自分をなぞらえていただけだ。

　その四年後、最愛の姉を憧あこがれのヒーローに殺された。

　アパートに火をつけたマフィアどもは、アレッシオが復ふく讐しゅうを思い立つよりも先に、対立する組織によって壊滅させられていた―。

　今の俺はそうして生まれたのだ。アレッシオは尻のポケットから携帯酒瓶ヒツプフラスクを抜いて、極ごく上じようのアルコールを口こう腔こうに満たした。潮とピートの香りが鼻に抜ける。俺は銃の腕ひとつで裏社会を駆け上がり、奪われたものの落とし前をつけようと思っていた。

　しかし現実はどうだ。

　弾丸パロツトラの仇かたきを討うつどころか、右手の怪物を失ったアレッシオは逃げ回ることしかできない。

「ということは、王子様はマフィアではないのかしら」

　声のするほうを向くと、緑柱石アクアマリーナの瞳がアレッシオの正体を見透かすように光っている。

　この携帯酒瓶ヒツプフラスクも、黒ずくめの格好も、形からマフィアを真ま似ねていただけのことだ。人殺しの技術で一目置かれるようになっても、アレッシオはつくりもののマフィオーゾの枠に収まって格好ばかりつけてきた。

「似てませんね」

　描きかけのメモを覗のぞき込んで、フォーラが眉まゆを寄せた。

「絵を描くのは、絵描きの仕事だ」

「王子様のお仕事は？」

「人殺しさ」

「それなら私のお仕事はお裁さい縫ほうです。ほら、王子様が寝ているうちに繕つくろっておいたの」

　いそいそとフォーラが取り出したのは、アレッシオの黒いジャケットだった。

「やりやがったな……」

　服の左腹、石いし畳だたみで擦すり切れたところに、リッカルドと同じ蛙かえるのアップリケが縫い付けられていた。

「お守りですよ。私が王子様についていれば、狼なんてイチコロです」

　フォーラは笑いながらジャケットに袖を通させようとする。

「いまは、狼よりも妹のほうが厄やつ介かいな相手だ」

「妹？」

「路地で襲ってきたあの赤毛だ、まだ壊れていないだろう」

「ふーむ、フィアーバですね」

　もっともらしい顔をしたフォーラは、腕を組んでうんうんと頷いた。

「どんな奴か知っているか？」

「彼女はがらくたです」

　少し考えてからフォーラは明快な口調でそう答えた。

　緑柱石アクアマリーナの瞳は、赤く染まったベルモントのさらに先を見据えている。その横顔は、とても狂った人形には見えなかった。

「フォーラ、お前は円筒シリンダがいかれているのか、それとも正気なのか……いや」

　アレッシオは言い差した言葉を打ち切った。その質問はおそらく適切でないだろう。彼女の目を見て、別の言葉で問いかけた。

「いったい、どのフォーラが本物なんだ」

「いまの私が本物ですよ」

　歌うような声が返ってきた。

「だからきっと明日もこう言うわ。今の私が本物です、って」

　当たり前のようにフォーラが笑う。

　彼女はきっと、ひとつの連続した『自己』というものを持っていないのだ。そのときそのときに応じて、別々のフォーラが奔ほん放ぽうに姿を現しては消えてゆく。ノヴェラならきっとこう言うだろう――だからフォーラは自分の物語を持っていないのだ、と。

「ありがとう、いいデザインだ」

　アレッシオがジャケットを身につけると、ソファーに腰掛けたフォーラがもたれかかってきた。怪物の宿らない右手を伸ばして、指と指をからめる。緑柱石アクアマリーナの瞳がいたずらっぽく光るのを見ていると、波立っていた気持ちが不思議と鎮しずまるのを感じた。

「俺がお前を守ってやる……」

「え？」

「そんなつもりでいたんだが、どうやら逆だったのかもしれないな」

「…………そんなこと、ないです」

　恥ずかしそうに下を向いたフォーラが、足元に置かれた鞄かばんのジッパーを開けたり閉めたりする。そのたびに、ジッパーの隙すき間まからノヴェラの円筒シリンダが白銀の姿を覗のぞかせた。

　「王子なんて柄がらじゃないが、フォーラのことは離さんよ」

　アレッシオはフォーラを見つめてそう言った。あるいは鞄の中のノ

ヴェラに向けたものかもしれない。言葉とともに自分の魂が長い虚脱から立ち直りつつあるのを感じた。

　夜が迫っている。

　ホテルのメモ帳をめくって思いつくことをメモしていった。

　最大の選択は、いまベルモントを離れるか否いなかだ。

　離れるのなら、すぐにでも車を調達してローマかジェノバへ向かうべきだろう。そこから飛行機で国外へ脱出する。

　生き残りたければ、それに賭かけることだ。

　ベルモント市警察は仮面の男マスケリーノの影響下にある。スラムに身を潜ひそめても同じことだ。しかもフィアーバを完全に破壊したわけではない。あるいは満月を背に猛たけりくるっていた狼の怪物が、いつ襲ってくるかも分からない。

「行こう」

　アレッシオは立ち上がった。決めたことはすぐに実行するのが生き残るための秘ひ訣けつだ。

「どちらへ？」

「外だ。日が暮れる前にベルモントから脱出しよう」

　鞄かばんを肩に背負うアレッシオのあとを、フォーラがぱたぱたと着いてくる。

「そのあとは？」

「サルディーニャにでも行くさ」

「本当？」

　ぱっと笑顔を咲かせるフォーラの手を引いて、足早に外へ出ようとしたところで部屋の電話が鳴った。

「アレッシオ、そこにいるのか？」

　受話器の向こうからガエターノの声がする。背筋がピリッと痺しびれた。

「いったいお前は何をやらかした、ボスがえらく興奮しているぞ」

「お前と長話をしている暇はない」

「訳を話せ。俺も面くらってる、昨夜なにがあった？」

「決けつ裂れつしたのさ。もうあの男は俺のボスじゃねえ」

「そう自や棄けを起こすな。冷たい水でも飲んで大人しく銀の城まで来るんだ。ボスはお前を許すと言っている」

　仮面の男マスケリーノの魔法物語フイアーバとは無縁のガエターノが、のんきな説得を始めようとする。

「ミラノが待っているんだぞ。向こうでお前は幹部として幅を利かすことができる。何年も待ったお前のための舞台だ。こんな美う味まい話を反ほ故ごにする馬鹿がどこにいるっていうんだ」

　実力で仮面の男マスケリーノに重ちよう用ようされるようになり、裏社会で相応の地位と金をつかむ。確かにそれは、アレッシオがかつて描いていた夢の話だ。

　ガエターノの言葉を聞きながら、アレッシオは血の海から拾い上げた円筒シリンダの重さを思い出していた。ここには、アレッシオに残された僅わずかなもの──ノヴェラの円筒シリンダとフォーラがいる。仮面の男マスケリーノは復ふく讐しゆうを果たすために、喉のどから手が出るほどこいつを欲しがっている。

　ここで現実と手を打てば、アレッシオはまた独ひとりになるのだ。そしてフォーラもまた化け物になるのだろう。あのフィアーバのような、あるいは『アクタイオンの猟犬』のような。

「終わった話だ、切るぞ」

「俺は、お前の死体と会いたいわけじゃねえ、聞き分けてくれ」

「仮面の男マスケリーノには、お前からよろしく言ってくれ」

「……残念だよアレッシオ」

　電話が切れた途端、部屋のドアが蹴破られた。

　給仕姿の自動機械人形オートマタどもだ。だらりと下げた手に銀の短剣や鉈なたを持った人形が、猫のように背を丸めた格好で室内になだれ込んできた。

「ガエターノめ！」

　受話器を捨てて銃を抜いた。見える範囲で十体、廊ろう下かにもま

だ敵はいるだろう。虚ろな表情のなか、ガラスの瞳だけがぎらぎらと赤い。どいつもこいつも電気式イミテーシヨンの殺人人形だ。

「きゃああ！」

　人形の手に光る銀の武器を見てフォーラが悲鳴をあげた。「王子様！」と叫んで身体を寄せてくる。いまのフォーラは、今け朝さがた驚くべき敏びん捷しよう性を発はつ揮きしたフォーラとは別人だ。

　その腰を抱いて自分の後ろに隠した。

　喜劇ラツコントどもが狙っているのはフォーラではなくこの俺だ。

　手前の一体に向けて至近距離から引き金を絞しぼる。相手の斧おのが振り下ろされる前に円筒シリンダを撃ち抜いた。まだ手の中の怪物は目を覚まさない、しかし射撃の勘かんは戻っている。

　猫のように研ぎ澄まされた感覚が新たな危険を報せた。奥の喜劇ラツコントが銃を持っているのだ。そいつに向けてさらに三発撃ち込んだ。まだ動いている、続けて二発。手前の人形が邪魔だ。蹴り飛ばして、さらに引き金を絞る。

「王様の兵隊なのね？」

　フォーラがジャケットの裾すそをぎゅっと握ったのが背中に伝わってきた。確かに、喜劇ラツコントどもは狂った王の軍隊だ。

　左右から、表情のない電気式イミテーシヨンの喜劇ラツコントが凶器を振り上げて突っ込んでくる。この距離なら狙う必要はない。左手でルーカのＭ９を抜いて、人形の下腹部めがけてぶっ放した。

　炸さく裂れつ音おんがして、床の上を薬やつ莢きようが躍る。

　二体の喜劇ラツコントが腰から水銀を噴き出して崩れ落ちた。

　フォーラに鞄かばんを押し付けたアレッシオは、壊した人形の襟首をつかんで持ち上げた。だらりと手足を垂らした人形の残ざん骸がいを盾たてにする。

　散弾銃スパスの弾を補充できなかったのは痛いが、悔いている暇はない。銃口を奴らの円筒シリンダに向けたまま、バルコニーに向けてじりじりと後退した。

　このまま、隣室のバルコニーへ飛び移る──それは、姉を失った夜の再現だ。

　高さを想像しただけで、心臓が激しい拍はくを打ちはじめる。

「王子様、退さがるのはだめ」

「王子はやめてくれ。走るぞ、フォーラ！」

　アレッシオはバルコニーを諦あきらめて前に突進した。包囲の中央に壊れた人形を叩きつけ、両手の銃を乱射しながら踏み越えた。

　廊ろう下かに出た。背後からは人形どもが追いすがってくる。向かうべき内階段からも新あら手ての喜劇ラツコントが姿を現した。舌打ちしたアレッシオは非常階段を目指して全力で走った。フォーラはぴったりと身を寄せてついてくる。

「来るわ、怖い！」

「平気だ、まっすぐ走れ」

　ドレスの背中を押してやると、べそをかいたフォーラがこっくりと頷いて走りだした。続いて走りながらＭ84の弾だん倉そうを交換し、追いすがる喜劇ラツコントの腹を狙ってぶっ放す。

　自動機械人形オートマタの軽い軀く体たいが弾き飛ばされ、後続を巻き込んで転倒した。

　非常階段のドアをフォーラが開ける。外階段だ。アルノ川を吹き渡る夕風が水の匂いを運んでくる。

「上はだめだ、降りるぞ」

　鉄製のステップを踏み鳴らして非常階段を駆け降りた、その矢先―。

「ココココココ……」

　あの忌いまわしい声が聞こえた。

　一度聞けば忘れようもない、乾いた木材を打ち付けるような喉のどの音。

　声の主は六階と七階の踊り場にいた。

　奴だ、フィアーバが生きていたのだ。

　モデルのように均整の取れた肉体が、両足のピンヒールで鉄の床を踏みしめたまま、じっと俯うつむいている。ベルモントの夕日を浴びた赤毛の長髪はまるで血の色だ。

「気をつけろ、フォーラ！」

アレッシオはM84の銃口を相手に向けて間に割り込んだ。

フィアーバが顔を上げたのはそのときだ。

そこには銀の仮面マスケラがあった。ノヴェラの持っていた、そして仮面の男マスケリーノの着けていたのと同じ形の━すなわち復讐ふくしゆうの仮面がそこにあった。

仮面で顔を隠したフィアーバがゆっくりと動きだす。奴の運動能力は、このような不安定な場所でこそ最大限に発はつ揮きされるだろう。

「ココココココ……」

喉が鳴る、そして言葉が続いた。

「コココココココワコワコワス壊す壊す壊す壊す！」

しわがれた呪じゆ詛その叫びは、明確にフォーラに向けられたものだった。

「上だ、逃げろ」

叫んでフォーラを押し上げた。七階の廊下から喜劇ラツコントどもの迫る足音が聞こえる。

アレッシオは直感した。フィアーバはフォーラへの嫉妬しつとに狂っている。仮面の男マスケリーノの実験で円筒シリンダの楽譜スコアを滅め茶ちや苦く茶ちやにされたフィアーバは、自分よりも主人パドローネに愛されているノヴェラやフォーラが許せないのだ。

こいつは仮面の女マスケリーナだ！

仮面の女マスケリーナの円筒シリンダは、暴走した憎しみに満ちている。

仮面の男マスケリーノが生み出すものは偽にせ物ものばかりだ。偽物のマフィア、偽物の魔法物語フイアーバ、偽物の約束、偽物の愛情━そんなゴミみたいな陰いん謀ぼうの中で、弾丸パロツトラのガキどもは無残に殺された。

ガン、と床を踏み鳴らして仮面の女マスケリーナが跳躍した。銃弾を浴びせたが、やはり胴部は防弾のコルセットに守られている。それが地に足をつけず、手すりから手すりへと飛び移って追ってくるのだ。八階に昇る踊り場で呪いの叫びが頭上を越えた。

「壊す！」

　広げた両手に二丁斧おのを煌きらめかせ、仮面の女マスケリーナがフォーラに狙いを定めた。

「ふざけるな、偽物が！」

　怒りに任せて引き金を絞しぼった。

　銃声が轟とどろき、弾は外れた。

　二丁斧のフィアーバは両足を階段の支柱にからめると、鉄棒の大回転のように身体を回して斬きりつけてくる。すんでのところで躱かわして、さらに銃撃を浴びせた。

　怒りと焦しよう燥そうでM84が狂い踊る。落ち着け、仮面の女マスケリーナの運動能力に翻ほん弄ろうされるな。

「ご主人様！」

　風が唸うなる。

　アレッシオの鼻先を、斧の斬ざん撃げきがかすめた。

　着地したフィアーバの背後から、無数の喜劇ラツコントがわらわらと姿を現す。ぎらぎらと輝くガラスの瞳、その全てがアレッシオの命を奪おうとしているのだ。

　死ぬ、こんな偽物に殺される──。

　ルーカの、ガキどもの無念を晴らすことも出来ずに、こんなところで！

　ここで恐怖に囚われたら、確実にそうなる。

「先に上がっていろ」

　フォーラに命令して、銃じゆう帯たいのＭ９を握り締めた。

「そこをどけ！」

　叫んだアレッシオは、抜き放ったＭ９を仮面の女マスケリーナに向けてぶっ放した。斧で弾かれるあいだに、弾のない散弾銃スパスに持ち替える。

　仮面の眉み間けんに狙いを定めた。これは賭かけだ、怖おじ気けづけ！

　赤毛がなびいた。

　仮面の女マスケリーナは後方宙返りで七階まで飛び降りると、横っ飛びで廊ろう下かに姿を消した。豆スープリボリータのように茹ゆだった円筒シリンダでも散弾のダメージは覚えていたようだ。建物の中から宿泊客と思われる女の金切り声が聞こえてきた。

　いまだ。階段の喜劇ラツコントどもに向けて拳銃をぶっ放したアレッシオは、先頭の一体を跳ね飛ばすと、屋上を目指して全速力で駆け上った。

　夕日を浴びたベルモントが朱あかく染まっている。

　ドゥオーモ・スプレンディドは十階建ての古いホテルだ。がらんとした屋上は東西に長く、非常階段は東側にある。中央には十階に下りる内階段の扉がつけられていた。

　喜劇ラツコントどもを振り切って非常階段を駆け上がる。屋上に入ると、内階段の扉を必死で押さえているフォーラの姿が目に飛び込んできた。

「フォーラ！」

　叫んでアレッシオは駆け出した。

　中から人形どもが扉をこじ開けようとしているのだ。フォーラの力ではじきに破られてしまうだろう。鉄製の扉に飛びついたアレッシオは、全体重をかけてドアを押し込んだ。

「中に兵隊がいるの！」

「分かっている」

　鉄板の向こうから、ガツン、ガツンと硬質の衝撃が伝わってくる。こっちの身体を跳ね飛ばしかねない勢いだ。

「よく支えられたな」

「でももうだめ、蛙かえるにされちゃうかも」

「弱気になるな、テレジーナのように胸を張れ」

　ドアの鉄板を挟んだ向こうで、何体かの喜劇ラツコントが銀の武器を叩きつけているのだろう。後ろを振り返ると、非常階段で振り切った人形たちが姿を現している。連中の足は速い。

「ここは駄目だ、走れ」

　拳銃を抜く。フォーラを先に逃がしたアレッシオは、扉をこっちか

ら開けて中の人形どもに銃弾をぶち込んだ。下腹部を集中的に狙って引き金を何度も引く。中には五体からの喜劇ラツコントがひしめいていた。

　弾が足りない。舌打ちしたアレッシオは、扉を開け放したままフォーラのあとを追った。フォーラは屋上の西側に到達している。しかし隣のビルまでは、路地を挟んで七メートル近い隔へだたりがあるのだ。

　ここで凌しのぐしかない。覚悟を決めて弾倉を交換する。

「こいつを使え」

　フォーラに追いついてルーカのＭ９を渡した。背後からは四つん這ばいで追いすがってくる殺人人形どもが四体。さらに後方にいる何体かは、アレッシオの銃弾によるダメージで動作がぎこちない。

「いいの？」

「撃てるか」

「これさえあれば百人力です」

　銃を受け取ったフォーラの口もとに笑みがこぼれた。両手でぎこちなく構えて、一番近くの喜劇ラツコントめがけてぶっ放す。

「あん、外れた！」

「いいから連射しろ」

　アレッシオも手近な人形めがけて引き金を引いた。意識して狙った弾が三発で円筒シリンダを砕く。

そいつが崩れるのを確かめる前に、次の標的を銃撃した。

「だめ、全然当たらない！」

　隣で炸さく裂れつ音おんをさせていたフォーラが泣き声をあげる。こんなことなら、せめて弾たまの込め方くらい教えておくのだった。

「遠くの敵はいい、近づいてくる奴だけを狙うんだ」

「でも……！」

　苦しそうなフォーラの声がする。弾だん倉そうを交換するついでにそっちを見ると、銀の短剣を持った黒髪の喜劇ラツコントとフォーラが揉もみ合っていた。力は喜劇ラツコントのほうがあるようだ。ドレ

ス姿のそいつが圧力をかけるのに従って、フォーラの身体がのけぞってくる。

　援護しようにも、アレッシオは二体の喜劇ラツコントに囲まれている。そいつらの斬ざん撃げきを躱かわしながら、腹に向けて引き金を引いた。

　水銀が噴き上がる。

　しかしまだ倒れない。奴らは口も利きかずに銀の武器を振り回してくる。転がるように間合いの外へ逃れ、さらに二発。それでようやく一体が崩くずれ落ちた。

　いったい昨夜から何体の人形を破壊したのだろう。自動機械人形オートマタは電気式イミテーシヨンでも百万ヴィンチは下らない高級品だというのに、金銭感覚はとうに麻ま痺ひしている。

「大丈夫か」

「平気……私のことは気にしないで」

　フォーラはまださっきの人形ともみ合っている。

　黒髪の喜劇ラツコントがフォーラの足を払った。くるりと宙を回ったフォーラが俯うつ伏ぶせに転倒する。その頭を踏みにじった黒髪がこっちを振り向いた。

「どいて！」

　ヒステリックに叫んだフォーラが足首をつかむ。どけた足でそいつはフォーラの頭を蹴り飛ばした。悲鳴を上げて屋上の隅まで飛ばされたフォーラが、顔から石の床に激突する。

　アレッシオはその場で引き金を絞った。

　轟ごう音おんが響き、背後から円筒シリンダにダメージを受けた黒髪の喜劇ラツコントが痙けい攣れんする。今度は手近な喜劇ラツコントの胴体に向けて引き金を二回引いた。ひるんだ隙に腹を蹴り飛ばす。ばりんと陶器の割れるような音がして、そいつは仰向けに転倒した。

　後方にはまだ五体の人形がいる。そいつらはアレッシオの銃撃でどこかしら軀く体たいを損傷していたが、戦意は失っていないようだ。

「もう怒ったわ」

　銃を構えたフォーラが黒髪の喜劇ラツコントを狙う。射線上にいた

アレッシオは慌あわてて飛びのいた。足あし蹴げにされ、顔じゅう埃ほこりまみれになったフォーラは、完全に腹あたまにきているようだ。

　銃声とともに黒髪がフォーラにつかみかかった。また標的を外したのだ。しかしフォーラは二発目で相手の膝を撃ち抜くと、バランスを崩した黒髪の腕を肩に背負い、勢いに任せて放り投げた。

　夕空を舞った黒髪は、建物の外側に取り付けてある排気用のダクトにぶつかって、ビルの外へ落下していった。

　アレッシオは残りの喜劇ラツコントどもに銃を向けながらフォーラのところへ駆け寄った。弾倉に残された弾を数えれば、とても五体を相手になどできそうにない。

「絶体絶命だな」

「ううん、そんなこと……」

「俺が突っ込んで囲みに穴を空ける。あとからついて来るんだ」

「待って……そうだわ！」

　急に目をきらきらさせたフォーラは、屋上の隅にある段差に飛び乗ると、上空に伸びた排気ダクトを思いきり蹴りつけた。

　派手な衝撃音に続き、めりっと壁から留め具の外れる音がした。

　老ろう朽きゅう化したダクトは、さっき黒髪の喜劇ラツコントが激突したはずみで螺ね子じでも緩ゆるんだのか、キックの衝撃にゆらゆらと揺れている。

「もう一発」

　ふたたび細い足でダクトを蹴りつける。

　一辺が六十センチもある長方形のダクトからボルトが外れた。すぐに上部がめりめりと音を立てて壁から剝はく離りする。三度目のキックでスチールのダクトがひしゃげ、十階の天井あたりでゆっくりと折れ曲がった。

「まさか……」

　折れたダクトの先は、七メートル先に建つアパートメントの屋上に到達していた。

　フォーラが自信たっぷりの笑みでこっちを振り返る。

「この橋を渡れば、王様の兵隊から逃げられます」

　無茶だ。十階建ての屋上といえば地上三十メートル近い高さがある。幅六十センチのダクトといえども、強度になんの保証もないのだ。

「自殺行為だ」

「ご主人様ならできますから」

「無茶を言うな」

　手を引こうとするフォーラを振り払った。やはり、人形を引き付けてから内階段に走るべきではないか。おそらくはその向こうにいるであろうフィアーバをやりすごして……。

　考えを巡らすより先に、内階段からさらに三体の人形が姿を現した。貴族風のドレスを着たそいつらの手には、銀色のサーベルが夕日を照り返している。

　アレッシオの拳銃にはもう八発しか弾がない。フォーラのＭ９と合わせても十発そこそこだろう。

　それに対して喜劇ラツコントは八体！

　相手が人間ならばどうにでもなる数だが、円筒シリンダ以外に急所のない人形では手の打ちようがない。

「ご主人様、こっちです！」

　ダクトを振り返る。空中に何の支えもなく渡された鉄の橋の上に、フォーラがひらりと飛び移った。カツンカツンと鉄の上を跳ねるように渡り、あっと言う間に対岸に近づく。

「早く！」

　促されて段差に飛び乗った。

　突とつ端たんから下を覗くとたちまち目が眩くらみ、足が勝手に竦すくんだ。しかしここはフォーラの言うことが正しい、活路は背後にしか残されていないのだ。

　暴れる心臓を抑えつけて段差の端に立った。これほど高所恐怖症を忌いま々いましく思ったことは一度もない。しかし今が夕暮れでよかった。地上がはっきりと見えないことが恐怖心を和らげている。

「ご主人様はご存知ないと思うけど、下にはクッションがあるの」

　内緒話をするように口に手を添えて、ダクトの上のフォーラがウインクをしてみせる。

「そいつは気が利きいてるな」

　無理に言い聞かせて、片足を宙に浮かせた。

　たちまち汗が吹き出してきた。

　銃を持った手でそれを拭ぬぐう。迷っている時間はない、背後に人形の姿をした火の手が迫っているのだ。

　息を止めて、体重をダクト側に移そうとしたとき……。

「よけて、ご主人様！」

　フォーラの悲鳴があがった。とっさに足場を蹴けり、横っ飛びに身を屈かがめる。ジャケットの肩口を銀色に輝く物体が切り裂いた。

　銀の斧おのだ！

　そう思うより早く、次の斧が縦回転で風を切る。甲かん高だかい激突音とともにダクト上のフォーラが弾き飛ばされた。風になびいた巻き髪がダクトの陰に消える。

「フォーラ！」

　叫んで、薄暗い地の底を覗のぞきに身を乗り出した。

　夜の帳とばりが下りようとしている。見渡した暗がりのどこにも、黄金色の煌きらめきは見つからなかった。

　そんなはずはない、フォーラが俺を助けて落ちるなど。

　背後にいるのが仮面の女マスケリーナだろうがそうでなかろうが、そんなことは後でいい。ダクトの上に目を凝らす。どこにもフォーラの姿はない。

「フォーラ！」

　いない。薄闇に包まれたベルモントの町並みが、ただ広がっているだけだ。

　なぜいない。

　目も眩くらみそうな高さから、遥か下の路地を見下ろした。

　あの夜、火の手はアレッシオの背後に迫っていた。

　バルコニーの欄らん干かんにからみついた姉の白い手は、アレッシオの脳にいまも刻み付けられている。

　振り返るとそれが見えなくなっている、無くなっている。

　残ったのは鉄の欄干の冷たい手触り。

　額から零こぼれ落ちる汗の珠たま。

　これは、あの夜と同じだ。

　アレッシオが子守唄と御お伽とぎ話ばなしをいっぺんに失った、あの夜と！

　嘔おう吐と感をともなった恐怖が胸の奥に衝つき上げてきた。

　──違う！

　探せ、フォーラはまだ落ちていない。あのときと同じように生きている。

「フォーラ！」

　三み度たび名前を呼ぶ。その声に反応するようにダクトが悲鳴をあげた。

　ばかでかいダクトの反対側を覗き込む。果たしてフォーラは、右手一本で虚空にぶら下がっていた。

　しかし安あん堵どの息をつくことは許されない。機敏なはずのフォーラが橋によじ登れないということは、さっきの斧おのでどこか損傷したということだ。

　目を擦こすると、十八世紀風のドレスの背中が裂けているのが見えた。そこに銀の斧が突き立っている。

　アレッシオは自分の背後に仮面の女マスケリーナの気配を感じた。

「寄るんじゃねえ」

　振り向きざまに弾のない散弾銃スパスを構える。奴の顔に狙いをつけるより早く、銀色の物体が風を切った。

　衝撃！

　それとともに長い銃身が飴あめのようにひしゃげた。フィアーバの投げ斧おのが散弾銃スパスを途中からへし折ったのだ。

　もう時間がない。

　殺すなら殺せ、居直ったアレッシオはフィアーバに背を向けた。

　もたもたしていたら欄らん干かんの白い手が消えてしまう。宙に浮いたダクトに片足をかけた。

　この向こうにフォーラがいる。

　あの日失ったものが、この向こうにある。

　それは一瞬の葛かつ藤とうだっただろう。アレッシオは息を止めてダクトに体重を預けた。

　がくん、足が沈む。わずかな落差だったが、このまま落ちてしまうのではないかと思った。しかし戻ることはできない。猫のように神経を尖とがらせ、慎重に、だが急いでダクトに乗せた足を前に運んだ。

　幅六十センチの鉄板──そこには手すりも支柱もないのだ。

　脂あぶら汗あせが目に入る。地上からの高さを思えば目が眩くらみそうだ。遥か下の暗闇にガス灯の光がぽつぽつと見える。いや、見るのはフォーラだけでいい。

「フォーラ！」

　足を乗せるたびに大きく波打つ橋の上を、フォーラのところまでたどり着いた。ダクトのビスにかろうじて指をかけた状態で、フォーラは歯を食いしばっている。

「王子様……」

「いいから握れ！」

　膝をつき、手を伸ばした。

　細い手首をつかむ。フォーラもアレッシオの手首にしがみ付いてきた。フィアーバがダクトに飛び乗ったのはそのときだ。

　ぐらり、動いた足場にアレッシオの心臓が早はや鐘がねを打つ。フォーラを支えながら、アレッシオはこちらに向かって歩く仮面の女マスケリーナを振り返った。ピンヒールでダクトの鉄板を踏みしめながら、仮面の女マスケリーナはだらりと垂らした両手に銀の斧を携えている。

　両手に二丁、腰に予備が一丁、あと三丁の斧を奴は投げられるのだ。

　仮面の女マスケリーナの背後からサーベルを手にした新あら手ての殺人人形どもが現れ、ダクトに足をかける。フォーラを支えたまま、アレッシオの身体が激しく上下に揺れた。

　脳裏をよぎったのは、姉を失ったあの日の光景だ。喜劇ラツコントという名の火の手が、アレッシオとフォーラの足元まで迫っている。

「逃げて、兵隊が来る」

「いいからお前は笑っていろ」

　おぞましい喜劇ラツコントどもが、ガラスの瞳石ジエンマを光らせて炎のように迫ってくる。

　アレッシオはあたりを見回した。御お伽とぎの街の夕暮れ、赤い屋根の連なり、その中にフォーラの姿が浮いている。

　失った姉のような微ほほ笑えみで。

　そして、彼女の胸もとで光っているのは弾丸パロツトラのネックレスだ。

　みしっと嫌な振動が伝わってきた。橋は負ふ荷かに耐えかねている。ダクトの上を駆けてくるサーベルの人形に銃口を向けた。

　炸さく裂れつ音おんが響く直前に、ドレスの喜劇ラツコントどもが四つん這ばいになる。

「畜生カツツオ！」

　ダクトの上にドレスの喜劇ラツコントが三体、その向こうに腕を組んだフィアーバの姿、そしてさらに奥、屋上の突とつ端たんから顔を覗のぞかせた壊れかけの人形が、アレッシオめがけて短剣を投げつけてきた。左の肩口にそいつが突き刺さる。浅手だが呻うめきが洩もれた。そこへ四つん這いの喜劇ラツコントが駆け寄ってくる。

　──パン！

　銃声が虚しく夕空に響く。

　左手の重さに銃の狙いが定まらない。これがフォーラの重さだ。



　緑柱石アクアマリーナの瞳を見た。

　失った姉への憧どう憬けいと、若かりし日々の欲望。アレッシオの青臭い過去が、ぐちゃぐちゃにとっ散らかって彼女の中にある。

　不意にその顔が隠れた。うなだれたフォーラの手首から力が抜ける。

「もう逃げて……」

「手を離すんじゃねえ」

　離すものか。

　同じことは二度と繰り返さない。たとえここで殺されようとだ。

「上を向け、フォーラ！」

　肩から滴したたった血が白い頬を濡らす。喜劇ラツコントがサーベルを振り上げる。

　ふいにフォーラが呟いた。

　それは、寝物語に聞いた蛙かえる姫ひめの台詞せりふだった。

「……私を呼ぶのはだあれ？」

「お前を愛する王子だ！」

　叫ぶ。

　そのとたん、がくんとフォーラの身体が重さを増した。

　アレッシオはダクトの上で必死に踏みこらえた。重くなったのではない、フォーラはアレッシオの袖そでを握ると反動をつけて宙返りをしたのだ。

　黄金の巻き毛が夕空に広がる。軽かろやかに宙を舞ったフォーラは爪つま先さきからダクトに着地した。息つく暇もなく、アレッシオに向かってサーベルを振り下ろそうとしていた喜劇ラツコントの腹を蹴ける。さらにダクトを蹴って跳躍すると、よろけたそいつの首を両足で挟みこんで、側転とともに夕空に投げ飛ばした。

　ホテルの石壁にぶつかった人形がまっ逆さまに落ちてゆく。

「駆け落ちの邪魔はさせないわ」

フォーラが笑った。黄金の巻き毛の下で緑柱石アクアマリーナの瞳がきらきらと輝いている。

ダクトに転がった短剣を拾い上げたフォーラは、仮面の女マスケリーナめがけてそいつを投げつけた。二丁斧おのがそれを弾き返す。跳ね上がった短剣が隣の人形の頭部に突き立った。

「コ……壊す……！」

仮面の女マスケリーナが足を踏み出す。背後の喜劇ラツコントどもも飛び移ってきた。

アレッシオはダクトにしがみついたまま銃を構えた。M84□□その ＡＣＰ弾を、跳躍する人形の腹部にぶち込んだ。

「一気に片付けちゃいましょう」

「無茶をするな」

「平気よアレッシオ、ブリキの兵士はお呼びじゃないわ」

フォーラの表情は自信と歓喜に満ちていた。ようやく取り戻した自分自身を喜ぶように、声を弾ませる。次に迫ってきた喜劇ラツコントのサーベルを軽々と跳び越えると、そいつの手首を踏み台にして顔面に蹴りを叩き込んだ。

一撃。

吹っ飛ばされたドレスの人形が、銀のサーベルごと路地に吸い込まれる。同じ方向に飛び出しそうになったフォーラは、隣の人形の髪を両手でつかむと、反動をつけてそいつも放り捨てた。橋の脆もろさを知っているのか、フォーラの足はまるで地についていない。

それは息を呑のむような早はや業わざだった。

仮面の男マスケリーノが欲していたのは、この力なのだろうか。フィアーバやフォーラのような人間離れした格闘技能があれば、人じん狼ろうに対抗できるのだろうか。

逆立ちで着地したフォーラめがけて、仮面の女マスケリーナが斧おのを振りかぶる。右手が動いた。防弾のコルセットに守られた腹部に銃弾を浴びせる。

軽くよろめいた仮面の女マスケリーナは、怒りの雄お叫たけびをあげた。屋上の突端に戻ると、周りにいた人形どもの腕を取っては振り回し、ダクトの上に放り投げてきた。

「走って！」

　フォーラが叫んだ。放り投げられた最初の一体を蹴り飛ばす。

　もう橋の強度は限界だ。わずか数メートル先のアパートメントを目指して、アレッシオは虚空の橋きよう梁りようを全力で駆けた。

　━ドン！

　上下の激しい振動が足場を危うくする。それでも走った。頭の中の霧きりが晴れたのはフォーラだけではない、アレッシオの四し肢しはもう竦すくんでいなかった。

　次の瞬間、激しい揺れがアレッシオを襲った。ダクトが折れたのだと分かったのは、踏みしめるべき足場を失ってからだった。

　身体が宙に浮き、天地が傾いた。

　空中に放り出されたアレッシオは、まっすぐ前に手を伸ばした。アパートメントの屋上は正面だ。その手が虚しく空を掻かく。建物までは一メートル近く足りなかった。

　黒ずくめの身体が大地の重力に囚われた。闇の底が迫ってくる。

　これで終わるのか━。

　まだだ、まだ早い。落下の風圧を感じながら、それでもどこかにつかまろうともがいた腕に、なにかが絡みついた。

　身体が浮く。一瞬、紐ひものようなもので引っぱられた感覚がした。そのまま、ウインチで巻き取られるようなすごい力で引き上げられる。

　我に返ったとき、アレッシオはフォーラと手をつないでいた。アパートメントの屋上から身を乗り出したフォーラが、片手でアレッシオの命を支えている。

　後ろでビスの外れる音がした。

　大きく傾いたダクトから虚空に放り出された人形たちが落ちてゆく。フォーラが手を差し伸べなければ、自分もああなるところだったのだ。彼女はきっと、アレッシオの頭上を跳び越してこっち岸へ降りたのだろう。握った白い手のひらに、命の感触が伝わってくる。

「ノヴェラの夢を見たの」

　緑柱石アクアマリーナの瞳を潤うるませたフォーラが夕日に溶けて

いる。その声は静かだった。

「どんな夢だ」

　フォーラの手を借りて屋上に這はい上がる。夕日を背にすると、ドゥオーモ・スプレンディドの屋上が目線よりも高い位置に見えた。

　七メートルを隔へだてた屋上の突とつ端たんにフィアーバの姿がある。

　奴は仮面を着けていなかった。かわりに斧おのを顔の前に交差して、表情を隠していた。

「夢の中でノヴェラが言っていたわ。人は、自分の物語を完成させるために生きるんだって」

「僕は、僕の物語を完成させるために来ました──それがあいつと交わした最後の会話だ」

「ノヴェラらしいわね」

　微ほほ笑えむフォーラにうなずいてみせた。

　確かにノヴェラらしい言葉だ。そして、その言葉には殉じゅんじる価値がある。

　アレッシオは拳銃をフィアーバのほうへ向けた。弾はまだ二発残っている。

　斧おのを持った敵を見据えながら、俺の物語はどんな筋書きだろうかと考えた。

　銃口の向こうにいる敵──こいつは本当に倒すべき相手じゃない。弾丸パロツトラと食堂トラツトリアを俺から奪ったのは、フィアーバではない。

「怒ってるわ」

　斧で顔を隠したフィアーバは、アレッシオではなくフォーラだけを見ている。奴の敵もまた、俺ではないのだ。

「お前は仮面の男マスケリーノから、豆スープリボリータを顔にぶつけられたことがあるか？」

「一度もないわ」

「奴がフォーラを憎む理由はそれだろうよ」

「そう……」

　小さく呟いたフォーラは、一呼吸を置いてからフィアーバを睨にらみ返した。

「私にも、あの子の気持ちは分かるわ」

　緑柱石アクアマリーナの瞳に炎が宿っている。アレッシオはセントポール教会で仮面の男マスケリーノに聞かされた話を思い出した。いかにしてフォーラが化け物にされ、恨みという名の魂たましいを手に入れたのかを。

「これが欲しいの、がらくたさん？」

　フォーラがゆっくりと右手を上げた。

「！」

　フィアーバの動きが止まる。

　フォーラの右手には、彼女の着けていた銀の仮面マスケラが、夕日の残ざん滓しを浴びて黄き金ん色に煌きらめいていた。仮面の女マスケリーナは、仮面を落としたのではなく奪われていたのだ。

　唸うなりをあげたフィアーバが、顔の前に交差した二丁斧おのを振り上げた。風が吹き、長髪が夕闇になびく。そこには、白い頬のあちこちに黒い孔あなを穿うがたれた女の顔があった。人造の皮ひ膚ふがめくれ、砕けた外がい殻かくからは頭部の機構が露出している。

　フィアーバの美び貌ぼうは散弾によって破壊されていた。その中央で、朱あけに染まった緑柱石ヘリオドールだけがらんらんと光っている。

「ギギギギギ！」

　フィアーバは生木を裂くような音を喉のどから搾しぼり出した。憎しみだけを植えつけられた人形は、凄すさまじい怒りに身を焦こがしている。

「その顔が恥ずかしければ取りにきなさい。それともお姉さまと遊ぶのが怖いのかしら、出来損ないの魔法物語フイアーバには！」

　挑発の声が響いた。

　再び吼ほえたフィアーバは、屋上を蹴って夕暮れのベルモントにその身を躍らせた。

恐るべき跳躍力だ。正面からの夕日を浴びて、炎の塊かたまりになった赤毛がなびく。両手の斧を振り上げて、銀の仮面マスケラめがけて突っ込んできた。

「あの子を楽にしてあげて」

「了解だ」

フォーラを退がらせたアレッシオは、飛来する紅ぐ蓮れんの塊に銃口を向けた。フィアーバが斧おのを振りかぶる。奴の円筒シリンダは防弾だ！

右手が動く──銃声が二発、大気を揺るがせた。

一発目は奴の左ひだり鎖さ骨こつに命中し、二発目が無防備に晒さらされた顎あごを下から撃ち抜いた。空中でのけぞったフィアーバが失速する。

仰あお向むけになった赤毛の人形は、それでもフォーラを睨にらみつけていた。破壊された顔の中央で、緑柱石ヘリオドールの瞳が憎悪を込めて見開かれる。おぞましい黄金の光をたぎらせたまま、彼女は路地の暗がりへと落下していった。

懐ふところに銃を戻す。わずかに遅れて、陶器の粉ふん砕さいされるような音が下から響いてきた。

大きく息をついたアレッシオはフォーラの腰を抱き寄せた。

生きている。彼女の首に光る弾丸パロツトラのネックレスを指先で玩もてあそんだ。俺の首にも、これと同じものが巻かれているのだ。

「ありがとう」

「そいつは俺の台詞せりふだ」

ようやく世界が晴れたような気がする。それはフォーラも同じことなのだろう。

「悪いがサルディーニャ行きは日延べになりそうだ」

「アレッシオがいればそれでいいわ」

いたずらそうに笑ったフォーラが首をかしげる。

「なら、どこに行くのかしら？」

「銀の城だ」

　ガキどもを守ることはできなかった。フォーラを取り戻した今も、そのことを思えば臓ぞう腑ふを焦こがすような感情が押し寄せてくる。

　マフィアならば身内の復ふく讐しゆうを必ず果たさなければならない。アレッシオが子供のころ頭に思い描いていた『マフィアのようなもの』が本物であるならば、弾丸パロツトラの復讐を遂とげぬままに物語は完結しえないはずだ。

　九オンスの携帯酒瓶ヒツプフラスクは尻のポケットから落ちていなかった。アレッシオはそいつを開けて、三十年物のシングルモルトを口の中に抛ほうりこんだ。

　アルコールの刺激が食道を焼いて、五感を覚かく醒せいさせる。恐怖が抜け落ちたあとには、燃え上がるような激情だけが残されていた。

　ショーケースを枠から描くのはもうごめんだ。

　この怒りこそがアレッシオの魂たましいならば、復讐は果たされなければならない。

「次は人じん狼ろうだ」

「そうね、あの人の復讐を手伝ってあげるのも悪くないわ」

　同じ酒を口にしたフォーラが、支配者である主人パドローネを他人のように語る。それは、彼女が自分の物語を取り戻したことの証あかしなのだろうか。

「君は誰だ？」

　ふと、ノヴェラのように聞いてみた。

「私はフォーラよ。前に会ったときはテレジーナと名乗っていたわ」

　夕日の残ざん滓しを頰に受けたフォーラが微ほほ笑えむ。

　それは充分すぎる答えだった。緑柱石アクアマリーナの瞳はアレッシオを見つめている。向こう気の強そうな面差しの中で、二つの物語はひとつに結ばれたのだ。

「よろしく頼む、フォーラ」

「いまさら握手なんて恥ずかしいけど」

　殺し屋の右手を握って、フォーラが照れくさそうに笑う。

アレッシオは彼女が白い歯を見せてはにかむのを初めて見た。

V

紅ぐ蓮れんに燃えさかる夕日がアルノ川の向こうに沈んで、ずいぶんと経つ。

静寂を取り戻したベルモントの夜景をカーテン越しに眺めながら、フランチェスコはソファーから投げ出した足を組み替えた。テーブルの上にはルームサービスの安いワインが置かれている。

ボトルから直接アルコールを流し込み、それから握り慣れた武器の柄に手を伸ばす。

鋼鉄の鉈ベイダナ。

長年、ともに死線をかい潜くぐってきた相棒だ。血の曇りもなければ、刃こぼれひとつしていない。まっすぐに掲げると、電灯を白く照り返した鋼鉄はがねの刃が、フランチェスコの瞳に光の欠片かけらを落としてくる。

この局面で鋼鉄の鉈ベイダナが手の内にあることが、フランチェスコは嬉うれしかった。

これを運んできたのは、あの若いちんぴらだ。葡萄ぶどうの香りを口の中で転がしながらホテルのソファーに背中を預ける。ずきりと突き上げてきたのは、脇腹と顔に受けた傷の痛みだった。

昨夜はずいぶんと手傷を負った。何十発という鉛なまり弾だまを喰らったが、そっちの傷はとうに塞がっている。しかし銀の武器による攻撃は、人じん狼ろうの驚異的な再生能力を阻むのだ。

いまだに疼うずいているのは銀の痛みだ。簡単に癒いえるものではない。

顔の銃じゆう創そう──こいつは食堂トラツトリアで人形に撃たれたものだ。

そいつを指でなぞる。鉛の弾丸にはわずかに水銀が付着していた。あの人形は自分の首を撃ち抜いて、噴き出した水銀を武器に利用したのだ。

そして鉈なたのようなもので切り裂かれた痛みが、ずきずきと脇腹の感覚を濁にごらせている。こっちは人間の子供にやられたものだ。

だが、それが何ほどのものだろうか。

口を歪ゆがませてフランチェスコは笑った。

血が流れるのは俺が生きている証あかしだ。

快感も苦痛も、大地より与えられた生の手触りだ。

戦いの感覚は鈍っていない。つまりは、相手がそれだけの好敵手だったということだ。

ワインを流し込む。苦痛をともなった心地よい興奮が、フランチェスコの耳奥にロマの旋せん律りつを蘇よみがえらせる。

それは殺さつ戮りくと破壊の旋律、狼の本能が奏でる音おん曲ぎょくだ。

そうだ、もっと鳴り響くがいい。

この陶とう酔すいは、死線をくぐった者にのみ許される特権なのだから。

──かき鳴らすラスゲアート！

スチール弦の音を頭の中に響かせながら、狼と化したフランチェスコは丸太のような両腕を振り回し、安っぽい人形どもをなぎ倒していた。

スラムから路地裏をくぐり抜け、赤い屋根の連なりを飛び越える。そうして旧市街の裏通りへ降り立ったところで、自動機械人形オートマタどもに襲われたのだ。フランチェスコを取り囲んだそいつらは、それぞれが銀の武器を携たずさえていた。

フランチェスコにしてみれば格好の獲物だった。人形どもは固有の匂いを持たないのだ。その身体に主人パドローネの匂いが残っていれば、すぐにそれを嗅ぎ取ることができる。おまけに今こ宵よいは満月だ。

狼とロマの血が沸ふつ騰とうした。

人形どもをなぎ倒し、月光照らすベルモントを我が物顔で踊りくるう。

口の周りに子供の血と臓ぞう物もつをこびりつかせたフランチェスコは、人間どもの作り出した小こ賢ざかしいからくり細ざい工くどもをなぎ倒し、へし折り、粉々にしてやった。

この記念すべき夜、ベルモントは大地の摂せつ理りに屈したのだ。

　ただひとつの誤算は人形の数だった。奴らは刺し客かくではなく軍隊だったのだ。

　旧市街の路地から路地へ、断続的に襲い掛かってくる人形を壊しているうちに朝がやってきた。無敵の肉体が、猛たけりくるう本能が、照りつける朝日に溶け落ちてゆく。それと同時に、脇腹を切り裂いた鉈なたの傷が痛み出した。

　それでも人形の攻撃は激しさを増す一方だ。やがて拳銃を持った人形が現れ、フランチェスコは戦闘の継続を断念した。屋根伝いに旧市街から北の丘きゆう陵りよう部ぶまで逃れ、そこでついに人形たちに囲まれたのだ。

「木で偶くどもが」

　武器がほしかった。

　手近な煉れん瓦がで人形どもを殴なぐりつける。得え物ものを奪おうにも、奴らの振り回すおぞましい銀の武器は、とても人じん狼ろうが扱えるような代しろ物ものではない。やがてフランチェスコは防戦一方になった。

　人形の攻撃を受け流しながら逃げ道を探す。車の音がしたのは、その時だった。

「なにをしてやがんだ！」

　若い男の声だ。人形の包囲が崩くずれ、黒い車がフランチェスコの前で急停車した。ドアが開き、運転席から鋼はがねの肉体が跳躍する。

　新しい駆く動どう音おんが鳴り響き、そいつのチェーンソーが人形の一体を割り砕いた。

　フランチェスコはその男を知っていた。オルマ・ロッサの下っ端、そう、カルメロとかいうちんぴらだ。荒れくるうチェーンソーを振り回したカルメロは、当たるを幸い人形どもをなぎ倒してゆく。

「なんだ、その間の抜けた面つらァよ？」

「どうしてそんな武器を持っている」

「爺じいさんには分からねーセンスだろ」

　発動機の音を轟とどろかせ、鋸のこぎりの刃先が高速の回転を繰り返す。突っ込んできた人形は、そいつで腹部を貫かれてがくがくと痙けい攣れんを起こした。

「なぜここにいる」

「兄貴が行けって言ったんだ」

　吐き捨てるように言ったカルメロは、腰に吊つるした鋼鉄の鉈ベイダナをフランチェスコに手渡した。

「こいつは伝言だ。切り札はがらくた人形だけじゃねえ、貴様もカードの一枚だ……ってな」

　耳を疑うような言葉だった。

　副頭領ヴイーチエ・カーポシルヴィオの計画では、フランチェスコは捨て石だったはずだ。

「あの男がそう言ったのか、オルマ・ロッサの副頭領ヴイーチエ・カーポが」

「ああ、俺にはよく分からねーが、命を粗末にすんじゃねえってことだぜ」

「光栄なことだ」

　そうか、ならばフランチェスコはここで死ぬわけにはいかない。

　愛用の鉈なたを手にフランチェスコは跳躍した。ずっしりとした鋼鉄の重みが手の中に心地良い。まっすぐ正面の人形を横よこ薙なぎに粉砕する。そのまま当たるを幸いになぎ倒した。

「こういうパーティも嫌いじゃねェぜ」

「カルメロ、人を喰ってきたな」

「あんたもそうだろーが」

　歓声をあげたカルメロが人形の一角に突っ込んでいく。いつしか周囲を囲んだ人形は三十体を超えていた。そのどれもが、狼に致命傷を与えうる銀の武器を持っているのだ。

　鋼鉄の鉈ベイダナが闘争本能に火をつける。

　やるべきことは簡単だ。相手よりも早く動き、攻撃を喰らう前に破壊する。目障りな人形が姿を消すまで、それを繰り返すだけのことだ。

　銃声が響いた。避けたところに銀の斬ざん撃げき、そいつを打ち落として人形を叩き割る。

「畜生、ままならねぇ！」

　叫んだカルメロがチェーンソーを振り回した。拳銃を構えた人形は、決して包囲の内側に入ってこようとしない厄介な相手だ。人形をなぎ倒しながら、フランチェスコはカルメロと背中合わせになった。

「跳ぶぞ」

　銃撃を武器で受け流す。そのまま屋根に飛び乗って、人形たちを見下ろした。

「カルメロ、君は人形と戦うためにベルモントに来たのではない。私の様子を見るついでに人喰いの欲望を晴らしにきただけだ」

「それがどーした」

「飢うえを満たしたのなら森へ帰れ。ここは私の役割だ」

「よく喋しやべる爺じいさんだな」

「口数が多くなるのは、そこにつながりを求めているからだ。君も同じではないのか」

「……そーゆーこと言うかね」

　若いカルメロが困ったような顔で首をかしげる。なにか不適当なことを言ったのかもしれないが、フランチェスコは気にせず先を続けた。下からは人形が銃撃をしてくる。正確に発射された銃弾は、全て銀の弾丸だ。

「分かったら、これを受け取ってくれ」

　カルメロの手に大玉の緑柱石スメラルドを握らせた。食堂トラットリアにいた自動機械人形オートマタの眼がん窩かからくり抜いたものだ。

「人形どもは私が引きつける。車に戻り、兄のほうは出来損ないだったと副頭領ヴイーチエ・カーポにお伝えしろ」

「多勢に無勢って言葉を知らねーのか」

「派手に暴れていいという意味だろう？」

「つくづく面白ェよ、あんたは」

　白い牙を見せたカルメロは、腰のポケットから取り出した小さなケースをフランチェスコに手渡した。

「こいつは餞せん別べつだ」

　開くと中には黄金のカプセルが入っている。

「特製ブレンドだぜ。小便ちびりそうになったら使うんだな」

「麻薬ドウローガか」



「あんたにゃ沈黙の掟オメルタも通用しそーにねェからな。誰にもチクんじゃねーぞ」

　カルメロはすぐに踵きびすを返して隣の屋根に飛び移った。

　フランチェスコは鉈なたを手に屋根から跳躍した。もっとも人形の密集しているところに飛び込んで、鋼鉄の鉈ベイダナを草刈り鎌がまのように振るう。すぐに包囲が崩くずれ、拳銃を構えた人形の姿が視界に入ってきた。

「忘れるな、人を喰うのが狼だ！」

　カルメロか、あるいは自分に向けて叫びながら、フランチェスコは鋼鉄の鉈ベイダナでそいつらの取り澄ました顔を叩き割った──。

　そうして、フランチェスコは全てをうまくやった。

　わずかに欠けた月が虚空の中に浮かんでいる。そちらに向けて、ワインのボトルを掲げた。

「光栄なことだ」

　カルメロにそう言ったときは皮肉のつもりだったが、案外そうでもないようだ。

　オルマ・ロッサの副頭領ヴイーチエ・カーポが、はぐれ狼のフランチェスコに言こと伝づてしたというのだ。

　生き残れ、と。

　全てを疑うことには慣れている。しかしたとえ偽りだったとしても、フランチェスコにそのような言葉を投げてきた奴はいなかった。

　これまでは、誰ひとり。

　音を立てながら、ワインを口の中で転がす。これはロマの母親のしていた悪い癖くせだ。あの女もまた、フランチェスコにそんな言葉をかけはしなかった。あるいは、あのままロマとして生きていれば聞くこともあっただろうか。

「いずれにしろ、全てはこれからだ」

　満月の夜は過ぎた。

　しかし狼の宴うたげはここから始まるのだ。

　ワインボトルにかちりと指輪が触れる。

　心地よい疲労感を覚えながら、フランチェスコは左手の薬指にはめた切り札を見つめていた。

vi

　夕空は赤から黒へと色彩を変えている。

　路地を覗のぞくと、スクラップと化した自動機械人形オートマタの成れの果てを野次馬が囲んでいた。何人かが屋上を指差し、興奮気味にわめいている。警官の姿はどこにもなかった。

　人垣を掻かき分けたフォーラは、がらくたの中から何かを拾い上げた。

　小走りで引き返してきた彼女と共にホテルへ戻り、昇降機エレベーターで最上階を目指す。ノヴェラの円筒シリンダと銀のバンドネオンを詰め込んだ鞄かばんはホテルの屋上に残したままだった。

「なにを拾ったんだ」

「戦利品よ」

　首をかしげたフォーラが右手を開く。そこには、黄金色に輝く緑柱石ヘリオドールの大玉が二つあった。それは最後までフォーラを睨にらみ据えていたフィアーバの瞳石ジエンマ──憎悪の結晶だ。

　太陽の賜たま物ものという意味を持つこの石は、ノヴェラの緑柱石スメラルドほど高価なものではない。しかし五十カラット近い瞳石ジエンマとなれば百万ヴィンチは下らないだろう。

「フィアーバは死んだのか」

「円筒シリンダは粉々になっていたわ」

　フォーラが手の中の輝きを見つめる。妹と呼ばれた人形の瞳石ジエンマだ。黄金色の輝きを見ながら、彼女はなにを思っているのだろうか。

　十階の客室が騒がしくなっている。内階段を昇った二人は、夜の帳とばりの下りた屋上で鞄を回収した。

　見渡せば、赤く染まっていた景色が宝石のような夜景に変わっている。

　すぐに市警察が姿を現すだろう。アレッシオはフォーラの手を引

き、急いで地上に降りた。

「いよいよ銀の城ね」

「ああ、仮面の男マスケリーノに会いに行く」

　タクシーをドゥオーモ広場につけ、徒歩でモンテ・オレーリアの建物を目指した。

　旧市街のメインストリートは観光客でごった返している。若いカップルが、家族連れが、自動機械人形オートマタの楽団に目を輝かしている。これがベルモントの夜だ。古い遺跡の数々と、わずか二千体にも満たぬ自動機械人形オートマタたちが、御お伽とぎの国の観光を支えているのだ。

　散弾銃スパスを捨ててきてよかった。フォーラと手を繋つないだアレッシオは、観光客の視線を集めながらそこを通り過ぎた。マフィアと娼婦人形プッターナの取り合わせは、彼らの旅の思い出に刻まれることだろう。

「アレッシオは仮面の男マスケリーノと喧けん嘩かしたの？」

「些さ細さいな行き違いさ」

　肩を竦すくめて道を急ぐと、十分でモンテ・オレーリアに着いた。

　地上の営業は終わっているようで、建物に灯あかりはなかった。あるいは、地上部に会社など存在していないのかもしれない。ガエターノに聞けば分かることだ。

　アレッシオは前に逃げた経路を逆にたどり、地下駐車場へ回った。

「どうしてここに来たの？」

「円筒こいつを何とかするためさ」

　肩から下げた鞄かばんを叩く。仮面の男マスケリーノは復ふく讐しゅうの相手ではない。しかし壊れかけたノヴェラの円筒シリンダを直せるのは、あの男を置いて他にないような気がする。

「俺たちの敵はあの化け物だ。仮面の男マスケリーノにもいろいろ言い分はあるだろうが、奴が共きよう闘とうを拒むのなら殺すまでだ」

　ため息をついたフォーラが、鞄のジッパーを開けて白銀の円筒シリンダを覗のぞき込んだ。

「アレッシオは、ノヴェラと私のどっちが好きなの？」

「……聞きたいか？」

「やめておくわ。ノヴェラがかわいそうだもの」

　地下駐車場には内から鍵かぎがかけられていた。仕方なく地上に戻り、闇の中を裏口に回る。

「鍵が壊れているわ」

　夜よ目めがきくのか、フォーラがそんなことを言った。果たして分厚い鉄てつ扉ぴの錠じよう部分が、鉄板ごと見事にひしゃげていた。

　唾つばを飲んだアレッシオは、静かに扉を開いて中に身体を滑り込ませた。猫のように物音を立てず、神経を研ぎ澄ませる。身軽なフォーラも足音をまるで立てずについてくる。

　昇降機エレベーターは動いていた。ボタンの並んだパネルの下、メンテナンス用の蓋ふたが開いたままになっている。アレッシオは隠された地下室へ通じる銀色のボタンを押した。

　銀の城の入り口は円柱の回かい廊ろうだ。

　灯あかりは消え、そこは真の闇だった。微かに血の匂いがする。昇降機エレベーターが止まっても、アレッシオはしばらく箱から身体を出さずに回廊の様子を窺うかがった。

　昨夜はそこに、円筒シリンダを壊された人形たちが女像柱カリアテイードのように鎖でつながれていたが、いまは何の気配も感じられなかった。仮面の男マスケリーノの命令を受けた人形たちはみな、喜劇ラツコントとなってアレッシオを殺しにきたのだろう。

「アレッシオ、もしも……」

　フォーラがジャケットの裾すそを引いた。

「もしも私があの人の指輪に逆らえなかったら、そのときはここを撃って」

　細いウエストを包んだドレスを指して、フォーラが囁ささやく。

「撃つとしたら奴の脳みそだ」

　アレッシオは回廊に足を踏み出した。

　鼻の奥にどこかで嗅かいだ匂いを感じる。回廊の隅にあるパネルを開け、手探りで明かりをつけた。

「こいつは……」

　言葉が続かなかった。そこにあったのは凄せい惨さんな破壊の爪つめ痕あとだった。回廊のあちこちに大破した自動機械人形オートマタが転がっている。腕をもぎ取られ、胴体をへし折られ、あるいは踏み潰つぶされた人形の残ざん骸がいと銀の武器が、無造作に放置されている。

　ごろごろと転がる破壊された人形──まるでトラットリア・カプレットだ。心臓が早はや鐘がねを打ち、よろめいたアレッシオは円柱に身をもたせて息をついた。

　ほんの一瞬、頭に血が上っただけだ。そう簡単に激情を割り切れるのであれば、人は誰も苦労しない。早くなった鼓こ動どうを抑え込み、あらためて周囲を見渡した。

　回かい廊ろうに敵の姿はないようだ。全てが静寂に包まれている。石の廊ろう下かをまっすぐに進んだフォーラは、壊れた人形の傍かたわらに屈みこむと黙って銀の斧おのを拾い上げた。

「お守りよ」

　二丁あるうちの片方をアレッシオに手渡してくる。この先に、あの狼の化け物が潜ひそんでいてもおかしくはないのだ。

「奴がいるのか」

「そこまでは分からないの」

　申し訳なさそうに首を振る。

「昨夜の投げ斧は見事だった。どこでそんなことを覚えたんだ」

「習ったの、姉様に」

「まだ姉がいるのか」

「そうじゃないわ。姉様は従い姉と妹こなの」

　話しているうちに突き当たりの扉に着いた。ここに動ける喜劇ラツコントはいないようだ。扉を開けると中は前室になっている。奥へ通じる扉は開いたままで、銀で飾り立てられた仮面の男マスケリーノの部屋から明かりが洩もれていた。

　アレッシオは、仮面の男マスケリーノと決裂した大広間に足を踏み入れた。

ふたたび、強い匂いを感じた。

これは、トラットリア・カプレットで嗅いだのと同じ匂いだ！

「下がっていろ、フォーラ」

銃を抜いた。残弾はほどんどない。だが、引き返すつもりはなかった。

五感がぴりぴりと研ぎ澄まされるのが分かる。

そのまま、銀の絨じゆう毯たんを踏んで先へ進んだ。

まず目に入ったのは、部屋中に飛び散った食器類と料理だった。そのなかに自動機械人形オートマタの残ざん骸がいも混じっている。カーテンは破れ、燭しよく台だいはひしゃげ、窓のガラスは割られていた。贅ぜいをこらした銀の城は何者かによって蹂じゆう躙りんされたのだ。

部屋の中ほどに備え付けられた大きな暖だん炉ろには、まだ火が残っている。ここで数時間以内に戦闘が繰り広げられたと思ってよさそうだ。

「……！」

ふいにフォーラが息を呑のんだ。凍りついた視線の先に巨大な肉の塊かたまりが転がっている。アレッシオは銃を構えたままそっちへ駆け出した。

仮面の男マスケリーノだ──ペトルチアーニはそこで息絶えていた。

どこにも敵の姿はない。アレッシオは足元の死体を見下ろした。

ペトルチアーニの身体には手足がなかった。『半分機械人形ハーフマタ』と自分自身を揶や揄ゆしていた機械仕掛けの四し肢しは、全てがもぎ取られ、部屋のあちこちに転がされていた。ペトルチアーニを仮面の男マスケリーノたらしめていた銀の仮面マスケラすらも奪われ、そこには素顔を晒さらした初老の肉にく塊かいが転がっているだけだった。

それはまるで『ニュクスの卵』だ。

ターバンで隠してた頭部は禿はげ散らかしており、枯れ芝のようにひょろ長い僅わずかな毛髪がへばりついているだけだ。ベルモントの闇社会に憎しみと混乱を振りまいたその肉塊は、歯を食いしばり、両目を見開いたまま絶命していた。

怒りと憎悪と絶望と、ありとあらゆる呪じゆ詛そがその両眼にこめられている。

手足のない丸い肉塊を見下ろして、アレッシオはゆっくり拳銃をしまった。ペトルチアーニの死因は明らかだった。腹部と左の胸部に、至近距離からライフル弾でもぶち込まれたような大穴が開いていたのだ。そこから流れ出た大量の血液が、どす黒く変色して絨じゆう毯たんの毛足をばりばりに強こわばらせている。

「死んでいるわ」

フォーラが分かりきったことを呟いた。その声は頼りなく震えている。

「うろたえるな」

ドレスの肩を抱き寄せ、耳元でこう言った。

「こいつはお前の失った過去だ、現在でも未来でもねえ」

銀の照明を見上げたペトルチアーニは、凄すさまじい形相のまま硬直している。

アラビアンナイトの衣装のあちこちに、引き裂かれたような傷がついていた。そして死体の周りに点々と残る、赤い足跡オルマ・ロッサ!

「終わったのさ、この男の復ふく讐しゆう物語は未完に終わったんだ」

「わかってる……分かってるわ」

言葉を切ったフォーラは死体から視線を外した。

「この人の驚く顔が見られなかったのが残念なだけよ」

フォーラを銀の椅い子すに座らせたアレッシオは、肉塊から離れ、部屋の隅に転がった作り物の腕を取り上げた。左手の薬指に緑柱石アクアマリーナの指輪は—ない。

舌打ちして右手も確かめる。フォーラの主人パドローネであることを証明する瞳石ジエンマの指輪はどこにもなかった。他の指輪なら山ほどある。フィアーバの瞳石ジエンマとそっくりな緑柱石ヘリオドールの指輪は、右手の薬指にはまっていた。

「あの子の指輪のほうが綺き麗れいだったのかしら」

　フォーラの言葉を聞きながら、アレッシオは部屋の中を探索した。

　トラットリア・カプレットほどではないが、ここもひどく荒らされている。転倒した調度を押しのけると、奥の破れ落ちたカーテンの陰でなにかが動くのが分かった。

　その場を飛びのいたアレッシオは、銃を構え、ゆっくりと近づいた。

　新しい血の臭いがむっと鼻び腔こうをくすぐる。カーテンをめくると、その下でガエターノが仰あお向むけになっていた。

　高級ブランドのスーツを着こなしたガエターノは、鋭利な刃物で腹部を左右に切り裂かれていた。そこからあふれ出した内臓が、まるで食い荒らされたように千ち切ぎれている。

　しかし、ガエターノにはまだ息があった。

「お前もやられたのか」

　ひゅうひゅうとか細い呼吸を洩もらしたガエターノは、仰向けのまま目だけ動かしてアレッシオを見た。

　もう虫の息だ。腹から噴き出した血は凝固を始めている。

「誰がやった、化け物か」

「そうだ」

　微かな声が洩れる。ガエターノは虚うつろに宙を見上げてそう言った。

「どんな奴だ、毛むくじゃらの狼人間か？」

「男だ……若い、フラン……チェスコと言った」

　フランチェスコ──それが敵の名前だった。

　頭の中に刻み付ける。ありふれた名前だ、それが正体を探る手がかりにはならないだろう。

　それからガエターノは、ゆっくり首を回してフォーラのほうを見た。

「そいつは直ったのか」

　フォーラのことだろう。アレッシオは黙って頷いた。

「よかったな、こいつを……」

　ガエターノの手が背中に回される。

　言葉の途中で仮面の男マスケリーノの秘書は意識を失った。それでも呼吸は続いている。

「いつだガエターノ、いつ襲われた」

「わからねえ……頼む、楽にしてくれ」

　視線が泳ぐ。もう、この男には何も見えていないようだ。アレッシオは懐ふところの銃じゆう帯たいから拳銃を抜いて、ガエターノの眉み間けんに当てた。

「目を瞑つむれ」

　こいつとはヴェネツィアからの長い付き合いだった。引き金を絞しぼる。乾いた音が銀の壁に反響し、ガエターノの身体が小さく跳ねた。

「綺き麗れいさっぱりだな」

　吐き捨ててアレッシオは立ち上がった。

　胸がむかつく。吐き気ではなく、純度の高いアルコールを流し込まれたように胸の奥が灼やけている。

　昨日の夜、この銀の城で地獄の扉を開いてから、どこもかしこも死体だらけだ。

　人じん狼ろう、人狼、人狼──！

　御お伽とぎ話ばなしの怪物が、アレッシオの世界を次々に食い荒らしてゆく。

　ただひとつ残されたフォーラが、じっとこっちを見ている。その瞳がなにを訴えているのかは分からないが、フォーラの表情はどこか儚はかなげだ。

　こんなとき、ノヴェラがいたらきっとグレゴリオ聖歌を奏かなでただろう。

　鞄かばんを背負いなおすと、円筒シリンダとバンドネオンの重さがずっしりと肩に食い込んだ。

　銀の城は、巨大な大広間の先に二つの部屋があり、そこからさらに奥へと続いているようだった。どこにも敵がいないことを確認したアレッシオは、奥の書しよ斎さいでフォーラの指輪を探すことにした。

　仮面の男マスケリーノは喜劇ラツコントに守られた銀の城を安全だと決め付けていたのか、書斎の中は無用心もいいところだ。機密を隠す金庫のようなものはどこにもなく、大型の書類棚が置かれているだけだった。しかも机の引き出しの中にその鍵かぎが無造作に放り込まれていたのだ。

　あちこち開けて探したが、どこにも緑柱石アクアマリーナの指輪はなかった。あるいは部屋のどこかに、もっと精せい巧こうに隠された金庫があるのかもしれない。

　他に手がかりはないものかと、部屋の書類やらＶＴＲテープやらを引っ張り出した。

　ガエターノの遺言によれば、銀の城を襲ったのはフランチェスコという若い男だ。しかし、昨夜タクシーから目撃した化け物は、毛むくじゃらの猛獣にしか見えなかった。

　その二つにどんなつながりがあるというのか。御伽話のように、人狼は満月を見ると怪物に変身するのだろうか。いずれにしろ、そいつがガキどもの食堂トラツトリアを襲ったことに違いはない。

　引き出しを開ける。書類棚の一番下にチーク材のケースが二つ入っていた。

　片方を開くと、そこには弾薬がびっしりと詰められていた。ルーカのＭ９に使える９ミリパラベラムだ。国内では非合法にあたる弾薬なので、ここで補充できるのはありがたい。

　カートリッジを摘つまみ上げると、なにか違和感があった。重さが違うのだ。先端をよく見ると、その弾頭は鉛なまりでなく銀色に輝く金属でできていた。

「銀の弾丸だと？」

　さすがは銀の城だ、ますます御お伽とぎ話ばなしじみてきた。人狼に対する一種の護ご符ふとも思えたが、それにしては数が多すぎる。ケースの中身はどれも銀の弾丸だった。

　縁えん起ぎを担かついだだけなのか、それとも実効があるのかは分からないが、仮面の男マスケリーノが人狼との戦いを想定して用意したものに間違いなさそうだ。

　残ったケースを開く。

　こっちに入っていたのは拳銃だった。大きさと形状から銃のケースだと分かっていたが、それを見たアレッシオは息を呑のんだ。

　その銃は、銃じゆう把はを除いた全体に銀メッキが施されていた。レリーフの彫られたスライドの下部からは、折り畳み式グリップの突起が張り出している。長い銃身ロングバレルと銃把より長い弾だん倉そう──これはＭ93Ｒだ。チーク材のケースに収まっていたのは、三点射の可能な機関拳銃マシンピストルだった。

　治安当局の要請で作られたこの拳銃は、その優れた火力から一般はもとより裏社会でも滅めつ多たに見ることはない。限られた公的機関の人間のみに使用が許されているものだ。

　仮面の男マスケリーノの人脈と財力をもってすれば、ここにこの拳銃があることは少しも不思議ではない。しかしあの狂王は、この銃を誰に持たせるつもりだったのだろうか。

　二十発の９ミリパラベラムを弾倉に詰めたアレッシオは、雑誌でしか見たことのない拳銃にそいつを装そう塡てんした。銃把を握る。さすがにずっしりと重かったが右手に伝わる感覚はＭ９に近いようだ。ケースに収まっていた予備の弾倉にも銀のパラベラムを詰め込んで、ベルトの隙間にそいつを挿さし込んだ。

　資料を集めて大広間に戻ると、フォーラの姿が消えていた。

「どうした、どこにいる」

「こっちにいるわ」

　声のするほうへ行くと、フォーラは倒れた銀色のキャビネットを持ち上げようとしているところだった。

「なにか見つかったのか」

「探しものをする前には、片づけをするものよ」

　大真面目な顔でそんなことを言いながら、体重をかけてキャビネットを起こす。それから散乱したガラスを掃除機で吸い込みはじめた。

「そんなもの、どこにあったんだ」

「そっちの部屋の用具入れにあったわ」

　ガエターノの使っていた前室を指差してから、フォーラは上機嫌に掃除機をかけはじめた。

「お掃除なら任せておいて。こう見えても鍛えられたんだから」

「仮面の男マスケリーノにか」

「その他もろもろによ」

　好きにさせておいたほうがよさそうだ。アレッシオは肩をすくめて、持ち出した書類に目を通すことにした。生みの親であり主人パドローネでもある仮面の男マスケリーノが死んだのだ。フォーラがいつかのように虚脱状態に入らなかっただけでもありがたい。

「指輪を吸い込むなよ」

「そこまでドジじゃないわ、失礼ね」

　口を尖とがらせるフォーラを置いて、アレッシオは手当たり次第にファイルや書類を開いて中身を確かめた。

　生きた仮面の男マスケリーノと会えなかった以上、人じん狼ろうの情報はここにある書類から得るしかない。ページをめくる、出てくるのはファッション雑誌や、人形の記事の切り抜きばかりだ。いったいどうすれば、あの圧倒的な人狼に太た刀ち打うちができるのだろう。

「フォーラは人狼について知っているのか」

「よくは知らないの。倒すべき敵だって言われてたわ」

　掃除機をかけながらフォーラが答える。

「どうやって倒す？」

「それも……分からないわ。私にはできるって、そこの人も姉様も言っていたけれど」

　そこの人というのは絨じゆう毯たんに転がったペトルチアーニのことだ。フォーラはペトルチアーニの手によって戦闘用に作られたのだ。

　ならば、こんな書類よりもフォーラの記憶を探ったほうが早いのかもしれない。

「人形どもをやっつけた格闘技も、ここで習ったのか？」

「姉様が教えてくれたの」

「また姉様か……」

フォーラは絨毯の上に散らばった宝石や装飾品を拾い集めている。

姉様というのは誰だ。フォーラにその能力があるのなら、なんとかして彼女を……。

ふと、そこで我に返った。

俺にとってフォーラは兵器なのか？　答えはノーだ。

「フォーラには人狼と戦う理由があるのか？」

「あるわよ」

「それは、なんだ」

フォーラを支配していた仮面の男マスケリーノはここで骸むくろになった。もはや彼女を縛しばるものは何もないはずだ。

割れた壷つぼの破片を拾っていたフォーラが、ふいに手を止めた。

「橋を渡ったときに決めたの」

いったん言葉を切り、アレッシオの顔を正面から見る。

「ほんの一瞬だったけど、この人をなんて呼べばいいかすごく迷ったわ。ご主人様、それともアレッシオ？　殺し屋さんとか王子様も素敵な呼び名だって思ったし……けれど私はアレッシオって呼んだの。それで良かったと思っているわ」

そこまで言ってから、フォーラは困ったように首をかしげた。

「答えになってなかったかしら？」

「いや、充分だ」

彼女の胸もとで弾丸パロツトラのネックレスが揺れている。それだけで充分だった。

大広間の奥、仮面の男マスケリーノの席の斜め後方に大型のテレビモニターが吊つるされており、そこから延びた配線が壁際に備え付けられた再生装置につながっている。アレッシオは持ち出したＶＴＲテープの中から、フォーラの名前が書かれたものを選んでそこに挿そう入にゅうした。

「お前のことが記録されたテープがあった」

「見るの？」

「ああ。人じん狼ろうを倒すために少しでも情報が欲しい。フォーラに隠された能力を知ることができれば、相手の弱点も分かると思うからだ」

「そうね、なら一緒に見てもいい？」

　山のように詰まれた銀の装飾品を放り出したフォーラが、椅い子すにちょこんと腰掛ける。彼女が飽あきっぽいのは円筒シリンダの異常ではなく、もとからの性格なのだろう。

　再生のスイッチを入れると大型のモニターが像を結び、作業台のようなところに寝かされているフォーラが映し出された。

「あ！」

　フォーラが口元に手を当てる。モニターの中のフォーラは一いつ糸しまとわぬ姿で、カメラのほうを見上げた瞳を落ち着きなく動かしている。部屋の中は薄暗いが、殺風景な地下室のような場所だというのは分かった。

「覚えているか」

「うん、このテープは失敗だったかも……」

「見られたくないものがあったら言ってくれ」

「裸よりも？」

　フォーラが恥ずかしそうに頬を膨ふくらませる。付き合ってやりたかったが、仮面の男マスケリーノとガエターノの死体が転がっている部屋で冗談を交わす気にもなれなかった。

　少し早送りするとすぐに人影が現れた。カメラの死角になる無む影えい灯とうの陰で、ごそごそとフォーラの身体に触れている。よくは見えないが女のようだ。手にした指揮棒バツケツタが銀色に光っている。その女は、フォーラの腹部にあるハッチを開けて円筒シリンダを調律しているように見えた。

「姉様だわ」

　フォーラの声が弾む。

「姉様というのは何者なんだ。そいつも仮面の男マスケリーノの作った人形なのか？」

「違います」

　ふと、時間を捻ねじ曲げられたような、不思議な感覚がした。

　抑よく揚ようのない声が背後で響く。椅子を蹴ってテーブルに飛び乗ったアレッシオは、声のしたほうに銃口を向けた。

　そこには暖炉があり、その傍かたわらに真珠の瞳を持ったあの自動機械人形オートマタがいた。

「ペルラ姉様！」

　フォーラが目をきらきらさせてそっちを振り向く。給仕服で肌を隠したその骨董人形アンティークは、教きよう煌こう庁ちようの使者なのだ。アレッシオは仮面の男マスケリーノの説明を思い出しながら、ペルラに向けた銃口を下ろした。

「あんたがフォーラに戦い方を教えたのか」

「……」

　ペルラはこっちを向いていなかった。アレッシオが持ち出してきた書類に目を通しては、次々と暖炉にくべている。

「おい、何をする」

　あれは仮面の男マスケリーノの手記だ。たいした情報はないだろうが、燃やされては困る。駆け寄ったアレッシオはペルラの腕を取ろうとして──刹せつ那な、気配を感じた。

　こいつは、まともじゃない！

　殺し屋の本能がそう告げたのだ。気がつけば、銃口はペルラの下腹部に向いていた。

「どうしたの、ペルラ姉様は敵じゃないわ」

「フォーラにとってはそうかもしれんがな」

「どういうこと」

「そいつをこれから聞いていこうじゃないか。その前に、それを燃やされると困るんだが」

　ペルラはまだ顔を上げない。新しい手帳をぱらぱらとめくり、暖炉の中に放り込んだ。

「読書はそこまでだ。書類を下に置いてもらおうか」

「……ここに書いてあるものは、仮面の男マスケリーノの汚お物ぶつのような脳内に湧いた蛆うじ虫むしの夢想に過ぎません。貴方あなたの欲している情報とは無縁の代しろ物ものです」

「あんたは何を知ってる？　なにもかも知っているって顔をしているな。あの映像はなんだ、教煌庁と仮面の男マスケリーノが結けつ託たくしてフォーラを操ろうとしていたのか」

　この骨董人形アンティークは、御お伽とぎの国の深しん淵えん部ぶの住人だ。

　アレッシオは昨日ここで見聞きしたものを整理しようとした。

「あんたは仮面の男マスケリーノと何らかの交こう渉しようをしようと、ここに現れた。しかし昨日は決けつ裂れつし、今日は交渉相手が死んでいたというわけだ」

「それは正確ではありません。私は仮面の男マスケリーノに乞われて来たのです。一足遅かったようですが」

　ペルラは立ち上がり、遠くに転がったペトルチアーニの亡なき骸がらを見下ろした。目の色を変えぬまま、口の端だけをにっと持ち上げる。

「フォーラさん、良かったですね……記憶が戻られて」

「ありがとう、姉様のおかげよ」

「私のですか」

「ええ、仮面の男マスケリーノから守ってくれていたわ」

「……昔の話です。むしろ力が及ばなかったと反省しております」

　フォーラとペルラの間には、アレッシオよりも古い歴史がある。そしてどうやら二人とも互いを悪くは思っていないようだ。

「あんたとフォーラの関係も知りたいが、それよりもどうして書類を燃やす？」

「私は教きよう煌こう庁ちようの命を受けて、仮面の男マスケリーノの動向を監かん視しする役割を与えられていました。機密保持のために余分な書類は破は棄きします」

「その機密が昨日から御お伽とぎの国のあちこちで暴れ回っているんじゃないのか」

「仮面の男マスケリーノがなぜ暴走したのか、それを知りたいものです」

　話しながらも、アレッシオはペルラの挙動に細心の注意を払っていた。いま、この人形が喜劇ラツコントのように襲いかかってきてもおかしくはない。恐らくペルラは、フィアーバ以上の難物だろう。殺し屋の直感がそう告げている。

「ペルラ姉様！」

　張り詰めた空気に耐えかねたのか、フォーラが困ったような声をあげた。

「私も知りたいわ、どうして私が作られたのかを」

「フォーラさん」

「いつか姉様は言ったわ。生まれてしまったからには、死ぬまで生きなくてはならないって。だから、どうして生まれたのかを知りたいの」

「仮面の男マスケリーノは、人じん狼ろうを退治するために貴女あなたを作りました」

「それは知ってるわ。私が知りたいのは、なぜあの人は人狼を退治したがっていたのかよ」

　ペルラは黙っていた。黙ってフォーラとアレッシオの顔を見て、それから懐中時計サポネツタを取り上げた。

「私どももそれを探っているところです」

「姉様は嘘をつけないわ」

　ペルラとフォーラが見つめ合った。表情のない真珠の瞳は、なにか精密な計算をしているかのように見える。やがて諦あきらめたようにペルラが瞳を閉じた。

「分かりました。貴女がそれを望むのならお話しましょう」

「アレッシオにも聞いてもらいたいの、それでいい？」

「……貴女がそう考えるのなら、結構です」

　モニターを見上げると、ペルラの指先が指揮棒バツケツタを小刻みに動かしているのが窺うかがえた。仮面の男マスケリーノだけではなく、彼女もフォーラの円筒シリンダを調律していたのだ。

「仮面の男マスケリーノ、正体不明の謎なぞのマフィア──貴女から彼の名前を聞くまでは、我々にとってもそれは変わりませんでした」

　昨夜、アレッシオが口を滑らせてしまったことを彼女は言っている。

「ペトルチアーニという姓を知りえたのは、昨日の訪問における最大の収穫でした。おかげで仮面の男マスケリーノの正体に、深く踏み込むことができたのですから」

「ペトルチアーニ……」

「聞いたことはあったか」

「ええ、あるわ……そう、どうして思い出せなかったのかしら」

　フォーラが首をかしげる。おそらくは瞳石ジエンマの命令で忘れさせられていたのだろう。

「モンテ・オレーリアという隠かくれ蓑みのの会社を持ち、金に飽あかせて買い集めた人形を次々に改造しては壊してしまう。偽ぎ名めいさえ暴あばくことができれば、そのように目立つ人間を調査するのは容易です。果たしてすぐに、ひとりの実業家にたどり着きました」

　抑よく揚ようのない声でペルラが語りはじめる。それはガエターノですら知らなかったであろう、仮面の男マスケリーノの来歴であった。

「仮面の男マスケリーノ──本名アレサンドロ・ペトルチアーニは、五十二年と三百二十五日前にヴェネツィアに生まれました。幼少期の記録はありませんが、ローマのヴィスコンティ高校を主席卒業後、国立音楽院コンセルヴアトーリオへ進学し、三年で自主退学しています。その後の記録は途切れ、次に彼が社会に現れるのは五年後、『パリアッチ』という宝石商の社長としてです」

「経歴からして変人だな」

「ネーミングセンスはあるのよね。道化師パリアツチだなんて、あの人らしいわ」

　手足をもがれた道化師の死体は、天井を睨にらんだままペルラの話を聞いている。

「ペトルチアーニは社長業とデザイナーを兼任しており、パリアッチのデザインした宝石類は上流階層を中心に評価され、彼の会社も次第に成長していきました。このモンテ・オレーリアも、もともとはパリ

アッチの取引相手のひとつだったのです。そのような中、彼はスタッフの女性と結婚し、一男一女をもうけます」

　一冊のファイルを手にしたペルラが、それをアレッシオの前で広げた。

「この時期が、ペトルチアーニにとって最も充実していた時代だったのでしょう」

　中に挟まっていたのは、絵に描いたような幸せな一家のモノクロ写真だった。広い邸宅の前で、優しそうな赤毛の夫人と二人の子供に囲まれた柔にゅう和わな表情の男。痩やせ型で線が細く、写真を照れているようでもある。子供たちはまだ幼かったが、どこかノヴェラとフォーラに似て見えた。

「この写真の三年後、パリアッチの経営陣が一新されます。新経営陣のリストに並んだのは、モンテ・オレーリアの役員をはじめ、全てがシカーリの構成員でした」

　シカーリというのは、ローマを中心に勢力を持つ犯罪組織の名前だ。

　今では犯罪組織をひとくくりに『マフィア』と呼ぶこともあるが、正確な意味でのマフィアとは、コーザ・ノストラとも言われるシチリア島の犯罪組織を指す言葉だ。ほかにも半島の南部には『ヌドランゲダ』、西のプーリアには『サクラ・クローネ・ウニータ』、アレッシオが若き日々を過ごしたナポリには『カモッラ』という組織がマフィアと同じように存在し、それらがこの国の南部を完全に掌しよう握あくしていた。

「ペトルチアーニはどうなった？」

「死にました」

　顔色を変えずにペルラが伝える。

「記録上はそうなっています。静養地にしていたロンバルディア州コモ湖こ畔はんのヴィラでボイラーの爆発事故に巻き込まれ、家族全員がそこで死亡しています」

　仮面の男マスケリーノがマフィアを毛嫌いしていたのは、そういうわけだった。ペトルチアーニの会社は何らかの事情でマフィアに狙われたのだ。

　そういった連中に、ペトルチアーニは会社と家族を奪われたのだ。

「その後、パリアッチはモンテ・オレーリア傘さん下かの商社へと方針を転換しましたが、過か剰じよう融ゆう資しの負債を抱えたまま三年後に倒産しています」

　手に取るように分かる。ペトルチアーニの死後に会社は乗っ取られ、マフィアに食い荒らされたのだ。

「その実行犯がオルマ・ロッサというわけか」

　うなずいたペルラは、ペトルチアーニとその家族の写真が収められたファイルを、暖炉の中に放り込んだ。家族の肖しよう像ぞうが炎の中に溶けてゆく。銀の城の地下に潜ひそみながら、ペトルチアーニはどのような思いでその写真を眺めていたのだろうか。

「アレサンドロ・ペトルチアーニの物語はここで終わりです。仮面の男マスケリーノはその十五年後、ヴェネツィアに現れ、我々に交渉を持ちかけて参りました」

「交渉だと」

「はい。錬れん金きん術じゆつで動く骨董人形アンティークを開発しているので、活動を庇ひ護ごしてほしいと」

「私が姉様に会ったのは、そのときね」

　ペルラがうなずいた。フォーラを見る彼女の瞳には、時おり穏やかな光が宿る。

「会社も手足も無くした男が、どうやって教きよう煌こう庁ちようとつながったんだ」

「当時、仮面の男マスケリーノの資金源は株式市場にありました。そこで財力を得た仮面の男マスケリーノはモンテ・オレーリアを買収し、商社の代表という肩書きを得たのです」

　話しながらも、ペルラは次々に仮面の男マスケリーノが残した書類やテープを暖炉にくべてゆく。

　仮面の男マスケリーノは、復ふく讐しゆうの入り口に立つまでに十五年かかったのだ。

「ともあれ教煌庁は彼を支援することに決めました。失われた錬金術の秘ひ儀ぎを用いた全く新しい骨董人形アンティーク、それが事実ならば、その開発は教煌庁の管理下で行われるべきです」

「待ってくれ、ペトルチアーニはどうやって錬金術の秘儀とやらを習得したんだ？　いくら国立高校の主席だったとしても、錬金術までは

教わらんだろう」

「カリオストロの遺い稿こう──仮面の男マスケリーノはそう言っていました。十八世紀のフランスで記された古こ文もん書じよが、モンテ・オレーリアの傘さん下かにある骨こつ董とう商しようへ流れてきたのだと」

「そこに、錬れん金きん術じゆつで動く自動機械人形オートマタの製法が？」

「載っていた、と私どもは考えています。仮面の男マスケリーノは自身の命を守るために、その全て脳に記憶させ、原本を焼き捨てました。このように……」

　またファイルの束が炎をゆらめかせた。不完全燃焼の濁った煙が、次々と排気ダクトに吸い込まれてゆく。

「骨董人形アンテイークの製法も、錬金術の秘ひ儀ぎも、全ての秘密はここにありました」

　ペトルチアーニの死体の頭部を、ペルラの靴くつ先さきが軽く蹴り飛ばした。

「この書類の中に写本でもあればよいのですが、おそらくは処分されているでしょう」

　真珠の瞳が揺らめく炎を見つめている。いったいこの骨董人形アンテイークは、なぜここまで話すのだろうか。教きよう煌こう庁ちようの、それもおそらくは一部の関係者しか知らぬであろう秘中の秘を、アレッシオのような野良犬に話すというのは……。

　拳銃はいつでも抜けるようになっている。アレッシオはペルラの動きを警戒しながら、彼女の紡つむぎだす仮面の男マスケリーノの物語を聞き続けた。

　その後の仮面の男マスケリーノの行動は、凄すざまじい復ふく讐しゆうへの執念ともいうべきものだった。

　株取引で復讐の足がかりを作った仮面の男マスケリーノは、まず商社であるモンテ・オレーリアを買収すると、その肩書きを利用して教煌庁のバックアップを取りつけ、カリオストロの遺稿に従って骨董人形アンテイークを本格的に作り始めた。

　拠点をヴェネツィアに移したペトルチアーニは、自らの四し肢しを骨董人形アンテイークの部品で再生させ、半分機械人形ハーフマタとなって蘇よみがえった。電気式イミテーションの自動機械人形オート

マタを手足のように使い、何人もの時計技師を誘ゆう拐かいし、買い集めた骨董人形アンテイークを解体しては実験を繰り返した。時計技師の誘拐事件は何度か報道されたが、無事に生還した者はひとりもいなかったはずだ。

　宝飾デザイナーとしてのキャリアや、音楽院で学んだ知識も役に立ったのだろう。結果として彼は、骨董人形アンテイークと同じ機構を持った双ふた子ごの自動機械人形オートマタ──ノヴェラとフォーラを生みだすことに成功したのだ。

「けれど、私もノヴェラも、銀貨アルジエントにはなれなかったわ」

「銀貨アルジエント？」

「いちばん最初に作られた自動機械人形オートマタのことよ」

　話すうちに、フォーラの記憶の糸が次々とつながり始めたようだ。自分自身の言葉を、自分で確かめるように口にする。

「銀貨アルジエントは、人じん狼ろうのような怪物をやっつけるために作られたの。彼女たちは、普通の骨董人形アンテイークにはない戦うための機構と、それを制御できる魂を持っているのよ」

「人形に自我を持たせるって話は、そこから始まったわけか」

　その先はセントポール教会で聞かされた話と変わりがなかった。

　人形に魂たましいを求めた仮面の男マスケリーノは、フォーラとノヴェラに異なる待遇を与えて嫉しつ妬と心を煽あおり立てることを思いついた。そのためにフォーラは肉体を改造され、見み世せ物もの小屋で晒さらされることになったのだ。

　あらかたの資料を焼き捨てたペルラは、ペトルチアーニの亡なき骸がらへ歩み寄った。

「あんたは、教きよう煌こう庁ちようの使者であると同時に、フォーラとノヴェラの監かん視し役でもあったわけか」

「はい、ノヴェラの円筒シリンダを持っているのは貴方あなたたちですか？」

　いまさら隠しても仕方のないことだ。円筒シリンダの入ったバッグをテーブルに乗せる。

「その通りだが、こいつを渡すわけにはいかない。あんたが仮面の男マスケリーノの記録をこっちに渡せないのと同じことだ」

「しかし、ノヴェラを修理しなくてはなりません」

「あんたなら直せるとでもいうのか」

「無理よ、ペルラ姉様は調律はできても円筒シリンダの修理はできないって言っていたもの」

「よく覚えていますね、記憶の霧きりは晴れましたか？」

「まだ全部じゃないけれど、姉様のことは思い出した気がするわ。私はヴェネツィアのお屋敷で姉様と会っていたつもりだったけど……ちょっとがっかりね」

　モニターの中、殺風景な地下室でペルラと思われる人影が黙々と指揮棒バツケツタを動かしている。

「ああやって、姉様は私とお話をしていたのね」

「場合によりけりです。話を戻しましょう、確かに私に壊れた円筒シリンダは直せません。それをできる人を知ってはいましたが……」

　そこでいったん言葉を切ったペルラは、なにを思ったかペトルチアーニの顔面を足で踏みつけた。

「……私は、フォーラをその人のようにしたかった」

　視線を落とす、まるで踏みつけたペトルチアーニの骸むくろに話しかけるように、ペルラは言葉を続けた。

「その人は聡明で慈じ愛あいに満ち溢あふれていました。美しく、高貴でもありました。ですが彼女はおてんばで、まるで違う性格になりました。私は少なからず失望していたのです」

「だって、私はフォーラだもの」

　アレッシオはモニターを見上げた。

　ペルラの指揮棒バツケツタがフォーラの円筒シリンダをなぞっている。指先の動きは、まるで愛あい撫ぶをしているようだ。

　ペルラだけではない、皆が自分の失った誰かをフォーラに押し付けていたのだろう。アレッシオは失った姉の、そしてペトルチアーニは失った娘の面影を。

　そうしてこしらえたショーケースの中に、フォーラを押し込めようとしていた。

「終わりの時間です」

　ペトルチアーニの顔を見下ろして、ペルラが続ける。

「復ふく讐しゆうの時間は過ぎました。もはや貴方あなたは半分機械人形ハーフマタでもない、ただの人間にすぎません」

　手足をもがれてペトルチアーニは人間になった。

「どんなに苦しくても、いつかは死ねます。死は解放です。ならば悪あがきなどせずに、すぐに死んでしまえばよかったのでしょう」

　ペルラが顔を上げた。その言葉はペトルチアーニに手た向むけられたものであると同時に、アレッシオにも向けられていた。

「俺はそうは思わねえ。生きるってことは、なにがしかの落とし前をつけるってことだ」

　いつでも銃を抜けるように、彼女に向き直る。

「理り不ふ尽じんなんてものは、生まれ落ちたときから山ほど襲い掛かってくるもんだ。そいつらに落とし前をつけているうちに年老いて死んじまう。それが人間だ」

「生きるとは復讐であると？」

「そう考えることもできるってことさ。いずれにしろ、終わったのはあんたが踏みつけてる仮面の男マスケリーノの復讐物語だ。俺のじゃねえ」

「それが無む謀ぼうな挑戦であってもですか」

「相手が誰だろうと、家族ファミリーの落とし前は付けさせてもらう、本物のマフィアはそういうもんだ」

「もはや家族などいないのに？」

「ひとりいる」

　アレッシオが視線を送るとフォーラが目をぱちくりさせた。

「家族……ファミリーね」

　呟つぶやいて、頰を赤く染める。その胸もとには、ノヴェラの着けていた弾丸パロットラのネックレスが光っている。

「──同じひとりぼっちなんだから、家族になればいいのよ」

　それはテレジーナの口癖だった。テーブルに肘をついたフォーラが声を弾ませる。家族という響きを確かめるように、それからこう付け加えた。

「けれど、妹なんて言ったら承知しないから」

　無表情にその様子を見ていたペルラは、死体の顔を一度強く踏みつけると、テーブルを回ってペトルチアーニの座っていた椅い子すに近づいた。

　絨じゆう毯たんに転がった銀のフォークを拾い上げる。

「なにをするの？」

　テーブルの反対側に座ったフォーラの表情がこわばった。

「いくら姉様でも、もし……」

「ご安心ください、私から先にこの人を攻撃することはありません。それは約束いたしましょう。レディが肘ひじなどついてはいけませんよ。背筋を伸ばして座るのです」

　穏やかな声にフォーラが表情を和やわらげる。突然、ペルラはそのフォークをテーブルに突き立てた。

　足元で、歯ギ車アの回転音がした！

　アレッシオが銃を構えるのと、フォーラの小さな悲鳴が同時だった。椅子に座ったまま、彼女の両目が驚きに見開かれている。

「なにをした」

　銃口をペルラに向けたまま、フォーラを窺うかがう。

「動けないのか、フォーラ」

「背中に何かが……力が入らないの」

「壊れるようなことはありませんから、ご安心ください」

　ペルラは構わずに一本のＶＴＲテープを拾い上げた。

「貴方あなたの知りたかった秘密がここにあります」

　再生装置に入っていたテープを取り出し、そいつに入れ替える。いままで再生されていたフォーラの調律記録は、すぐに暖炉に放り込まれた。

「これを見ても、まだ彼女を家族と言えるでしょうか？」

　ボタンが押され、新しいテープが回りはじめた。

「姉様！」

　身動きの取れないフォーラが叫ぶ。

　場所はこの部屋だ。まだ整然と調度が並んでおり、長い食卓の上には様々な料理が並んでいる。銀で彩いろどられた明るい部屋の、その中央にフォーラが立っていた。

「これは、彼女の戦闘能力をテストしたときの記録です」

「やめて！」

　フォーラの声は悲鳴に近かった。

「八か月前の映像です。彼女が現在の身体になって、まだ数日しか経っていません」

　ペルラの言葉が、ノヴェラに見せられたフォーラの写真を思い起こさせた。アクタイオンの猟犬やガイアの蠍さそり、ニュクスの卵──そんな畸き型けいにさせられたフォーラが、この身体を手に入れてすぐの映像だということだ。

「当時、彼女の主人パドローネは古こ物ぶつ商しようのベルッチでしたが、彼は夜よ伽とぎに向いた新しい肉体を望んでいました。そこで仮面の男マスケリーノは裏社会に手を回し、自らの身み元もとを伏せたまま、新しい軀く体たいの製作を引き受けたのです」

　映像のアングルが切り替わり、フォーラをあらゆる角度から切り取っていく。どうやら、部屋のあちこちに仕掛けたカメラで記録した映像を編集したもののようだ。

「もうやめて、姉様」

「この人は貴女あなたの能力を知りたがっているのですよ」

「でも……でも」

「恥ずかしがる必要はありません。写真ではありますが、彼はすでにガイアの蠍さそりも、ニュクスの卵も見ているのですから」

　椅い子すに縛しばり付けられたまま、フォーラは顔を真っ赤にして唇を噛かんだ。

　アレッシオは「大丈夫だ」とうなずいてからモニターに視線を戻した。もう一度、それでもフォーラが見るなと言うのなら、目を逸そらすべきだと思いながら。

　モニターの映像が、フォーラを取り囲んだ人間たちを映し出した。そこにいたのは高そうな背広を着込んだ男たちだ。着飾った女の姿も見える。皆が好奇の目でフォーラを見つめ、思い思いに言葉を交わし合っていた。

「ここに集められたのは著名な人形技師ばかりです。ヴェンヴェヌーティ兄弟やスフォーリ女史の名前を耳にしたことがあるでしょうか。ここにいる彼らが、あの写真の芸術作品を生み出したのです。そして、フォーラはそのことをまだ知りません」

　画面に映るフォーラの面おも差ざしからは感情が読み取れない。まるでペルラのように、いや、食堂トラツトリアで無意識に動き出したときのように、彼女の顔には表情がなかった。

　しばらくして、仮面の男マスケリーノの声が響いた。

『さあフォーラ、集まった皆に挨あい拶さつをしたまえ。彼らのことを忘れてしまったのかね、そう調律されたのだから無理もない。彼らは、君を傑けつ作さくな姿に作り上げた芸術家たちなのだよ。端から紹介していこう……』

　仮面の男マスケリーノが朗ろう々ろうとした声で客の名前と作品名を読み上げる。そのたびにアレッシオは吐き気のするようなフォーラの写真を思い出した。この連中が、芸術などという詭き弁べんと独善でフォーラを苦しめたのだ。紹介を受けた連中は恥じ入るどころか得意げな顔をしている。

「誰も、人形が歯向かうなどとは思っていないのです。このときまでは……」

　アングルが切り替わる。フォーラの表情は驚きよう愕がくに満ちていた。彼女の円筒シリンダの中を嵐が吹き荒れているのだ。

『それでは、君のなすべきことをしたまえ』

　同時に音楽が流れ出した。忘れもしない、正確無比なこの音色は、ノヴェラが奏でる銀のバンドネオンの哀調だ。

　胸が詰まる。しかしそれは一瞬だった。

　モニターに大写しになったフォーラの首が外れたのだ。

取れたのではない、喉のどから首の前半分がぱっくりと開き、頭が後ろ向きに垂たれ下がる。まるで喉を頚けい骨こつまで切り裂かれたかのように、フォーラの首が開いたのだ。

「いやだ！」

フォーラの悲鳴。だがアレッシオはモニターから目が離せなかった。

『やったぞ、やった！』

スピーカーから仮面の男マスケリーノの歓声があがる。恍こう惚こつに満ちた絶叫だ。テーブルの向こうではフォーラがぐすぐすとべそをかいている。

「ここで、彼女の機構が発動します」

モニターに視線を戻す。フォーラの首の中から銀色に光る細管が這はい出してきた。それも一本ではない、うねうねとミミズのように何十本と！

首だけではない、肘ひじ、肩、手首、そしてスカートの中からも、ありとあらゆる関節部から銀色の細管が這い出して、イソギンチャクのようにフォーラをとり包んだ。まるでフォーラの体内に巣食っていた長虫が、皮ひ膚ふを喰い破って這い出してきたかのようだ。

客の女が悲鳴をあげた。

転瞬、イソギンチャクになったフォーラが絨じゆう毯たんを蹴けって跳躍した。たちまち、うねうねと蠢うごめいていた細管が絡みあい、槍の穂先のように鋭くなる。一本一本の細管の先端には、鋭く尖った銀の針がついているのだ。

それが鞭むちのようにしなって女に襲いかかった。股またの下から貫いて、口から天井まで垂直に突き抜ける。串くし刺ざしになった女の顔が天井に激突した。おびただしい量の血を失禁しながら、痙けい攣れんした女体がピンと張った細管のロープをゆっくり滑り落ちてくる。

それまで言葉を失っていた客どもが、悲鳴を上げて出口に殺到した。

しかし、逃げられるはずがない。

何十本という細管が、シャンデリアの明かりを反射してきらきらと輝いた。それが一いつ斉せいに、目にも留まらぬスピードと軌道で襲

い掛かってくるのだ。

　殺さつ戮りくが始まった。ある者は細管の束に首をねじ切られた。ある者は両目を針で串刺しにされ、その先端は胸を食い破って出てきた。生きたまま壁に縫い付けられる者もいたし、粉々の肉片にされた者もいた。交こう錯さくする断だん末まつ魔まの中、哀あい愁しゆうを帯びたノヴェラのバンドネオンだけが静かに奏でられている。

「これが、人じん狼ろうと戦うために作られたフォーラの性能です」

　ペルラの声は誇らしげだ。

「針のついた細管は彼女の思うままに動き、触手のように敵に襲い掛かります。それを相手の肉体に突き刺し、心臓に直接水銀を流し込みます」

　細管から送り込まれた水銀で血管を破裂させせられた犠牲者が、全身血だるまのようになって床の上に転がった。

「人間ごときでは相手になりません。これが人じん狼ろうと戦うということです。銀の武器と聖せい別べつされた水銀のみが、あの糞くそ虫むしのような人狼を葬ほうむり去ることができるのです」

　フォーラの復ふく讐しゆうは一分もかからなかった。

　二十人近くいた人間が瞬時に殺害され、銀色の大広間は血の赤に染まった。その中心で、首の取れかかったフォーラが、蠢うごめくのをやめない銀の触手をまとって立ち尽くしている。

　アレッシオは両手が小刻みに震えるのを感じていた。

　喜劇ラツコントどもを撃破した格闘技などとは桁けたが違う。これがフォーラの華きや奢しやな身体に隠された戦闘能力なのだ。

「いかがですか？」

　ペルラの声がわずかな艶つやを帯びている。テーブルの向こうでは、身動きのとれないフォーラが泣きべそをかいていた。

「よく分かった、充分すぎるほどだ」

「アレッシオ……」

「あんたの警告は承知した。この先、夫婦喧げん嘩かをするときはせいぜい気を付けるさ」

　フォーラがきょとんとした顔で目をぱちくりさせる。ペルラの白い

頬がわずかに引きつるのが分かった。

「なかなか過激なスナッフムービーだが、あいにく俺も無事平穏な一市民じゃねえ。びびらせようって言うのならお門かど違ちがいだな」

「それならば結構です。この先のことをお話ししますので、もう少しお付き合いください」

　声の抑よく揚ようがなくなっている。ＶＴＲを停止してペルラは先を続けた。

「これは彼女も知らないことですが、このとき、フォーラはひとりの人形職人を討ち損じていました。集められた人形技師のひとり、ガイアの蠍さそりの製作者が銀の城を脱出しました」

　アレッシオはもうフォーラの顔を見なかった。その動どう揺ようを思うと、見るだけ残ざん酷こくな気がしたからだ。

「ご安心ください、その職人はもう生きてはいません。ここを逃れた九十日後に人じん狼ろうによって殺されました」

「なぜ人狼が？」

　ペルラはその質問には答えずに先を続けた。

「ガイアの蠍の製作者と接触することで、人狼たちは兄妹人形についての知識を得たのです。したたかな彼らは、教きよう煌こう庁ちようの管理下にない人形を奪い取り、自分たちの欲望のために使し役えきしようと考えました」

「俺たちはそれに巻き込まれたというんだな」

「その一方で、復ふく讐しゆうを果たしたフォーラは、ふたたび円筒シリンダに変調をきたしました。さきほどの殺さつ戮りくに関する一切の記憶を封印し、それどころか自分の過去についても思い出そうとしなくなったのです」

　またペルラはアレッシオの言葉を受け流した。

「このままではフォーラの機構が覚かく醒せいすることはない。危き惧ぐを募らせた仮面の男マスケリーノは、所有者のベルッチから彼女を奪い取り、ふたたび心を蘇よみがえらせることを考えました」

「仮面の男マスケリーノは、人じん狼ろうがフォーラを狙っていると知っていたのか」

「いいえ、その情報は伏せておきました。そうと知れば、あの男は必

ずフォーラをどこかへ隠したでしょうから」

「そうされては教きよう煌こう庁ちようは困るということか」

「教煌庁も、貴方あなたと同じようにフォーラの真価を知りたがっています。たとえば人狼と戦うことで、彼女自身が封印してしまった機構が覚かく醒せいするかもしれない。そのような考えもありました。もし最後まで覚醒しなければ、それは円筒シリンダに根本的な欠けつ陥かんがあったということです。いずれにしろ、フォーラという銀貨アルジエント候補の真しん贋がんを問うことができます」

　つまり、教煌庁もフォーラの味方ではないということだ。

　いや、それだけじゃない。ペルラの言葉をそのまま受け止めるのならば、フォーラを奪いにきた人狼がベルモントのスラムを襲い、弾丸パロツトラのガキどもを皆殺しにしたことを、教煌庁の連中は喜んでいることになる。

「そうまでするのは、人狼に対抗できる戦力を必要としているからか？」

「いいえ、銀貨アルジエントのためです」

　真珠の瞳が光る。フォーラの説明によれば、銀貨アルジエントというのは化け物と戦うために作られた最古の自動機械人形オートマタのことだ。

「それはどういう理屈だ」

「これ以上は答えられません、それよりも……」

「私は知っているわ」

　椅い子すに縛られたフォーラが割り込んできた。

「フォーラさん？」

「あの人がベッドの上で話してくれたのよ。銀貨アルジエントの円筒シリンダにはスペアの部品がない。だから教煌庁は、銀貨アルジエントによく似た機構を持つ私とノヴェラの円筒シリンダを、予備の部品として使えるように管理したがっているって。あの頃はとても信じられなかったけれど」

「今はどうですか」

「今は……そうかもしれないって思ってる。ペルラ姉様は優しいけれど、私じゃ銀貨アルジエントの代わりにはなれないんでしょ？」

「いえ、そうとも限りません。貴方あなたが期待通りの性能を発はつ揮きすることができるのなら、新しい銀貨アルジエントとして迎え入れることも検けん討とうされていました」

　優しい声でフォーラに語りかけながら、ペルラはペトルチアーニの死体を蹴りつけた。

「でも……」

「いえ、仮定の話はやめましょう。私たちが本当に欲していたのは、仮面の男マスケリーノの脳細胞に刻まれていた失われた錬れん金きん術じゆつの秘ひ儀ぎでした。それさえ手に入れば、部品のスペアなどいくらでも作ることができたでしょう」

「しかし、その機会は永遠に失われたわけだ」

　アレッシオはノヴェラの円筒シリンダの入った鞄かばんを両手で抱えた。

「だから、こいつが欲しいんだろう」

　ペルラは瞳石ジエンマだけを動かしてアレッシオを見た。

「人じん狼ろうを倒すために、部品のスペアを大人しく譲ゆずれと言いたいわけだ」

「そうではありません。私は犬の糞くそほども役に立たない人間風ふ情ぜいが、薄汚い首を突っ込むべきではないと申し上げているのです」

「姉様！」

　気配が変わった。アレッシオは懐ふところの拳銃に手を伸ばした。

「私がどうして錬金術の秘密を話して聞かせたか、お分かりになりますか」

「フォーラの前だから、ってだけじゃなさそうだな」

「はい。実はもうひとつ、貴方あなたにとって最も大事な情報をお伝えする必要があったからです」

　ペルラが懐中時計サポネツタを取り上げた。銀の鎖が揺れて、それからゆっくりこう言った。

「銀の城から職人を逃がし、彼にフォーラとノヴェラの秘密を教え、そして人狼のもとへ送り込んだのはこの私です」

　真珠の瞳をすっと細めてペルラが笑う。アレッシオの体内の血が沸わいた。

「お分かりになりましたか？　ベルモントにあの化け物を引き込んだのは、この私なのです」

　椅い子すを蹴けって立ち上がった。

　同時に炸さく裂れつ音おんが響く。

　アレッシオの脳がそれを認識するよりも早く、M84の銃口はペルラの腹部に向けて初しよ弾だんを発射していた。

　　　viii

　轟ごう音おんの中、ペルラの身体がふわりと宙に浮いた。

　仮面の男マスケリーノの豪ごう奢しやな椅子の背に足をひっかけ、一瞬にして背もたれの陰に姿を消す。

　──外したのか。

　舌打ちしたアレッシオは、テーブルの上に飛び乗った。

　ペルラが椅子の陰から姿を現す。こいつのせいで、ルーカもノヴェラも死んだのだ。銃口を向けるのと、ペルラが懐中時計サポネツタをぱちりと閉じ合わせるのが同時だった。

「気を付けて！」

　フォーラが叫んだ。あの懐中時計サポネツタが武器なのだ！

　一瞬でそれを認識したアレッシオは、テーブルの上に身を屈かがめた。瞬間、さっきまで顔のあったところを、銀の鎖につながれた何かが銃弾のようにかすめていく。フォーラの声がなければ、死んでいたかもしれない。

「お前が銀貨アルジエントか！」

「人間風ふ情ぜいがでしゃばるところではありません」

　テーブルから転げ落ちるようにして、戻りの攻撃を逃れた。鎖くさりにつながれた懐中時計サポネツタの文字盤から鋭利な銀の刃が飛び出し、そいつが高速で回転しているのだ。行きだけでなく、戻りにも気を配らねばならない。

　絨じゆう毯たんに転がっていたペルシア猫の像を手に立ち上がっ

た。三十センチくらいの置物だが、盾たてにはなるだろう。空気を切り裂き、刃のついた懐中時計サポネツタが飛んでくる。今度は直線でなく、大きくカーブを描きながら！

　猫の像でそいつを払い、銃口を標的に向けた。駄目だ。銀の像を巻き取ったまま、懐中時計サポネツタがアレッシオの頭を横よこ薙なぎにしようとする。ぎりぎりのところで躲かわして、今度は柱を盾たてにした。

「黒ウサギの血は何色でしょう」

「化け物が！」

　こいつは喜劇ラツコントなどとは比較にならぬ程の化け物だ。あの懐中時計サポネツタは、一撃で俺を野良犬のように殺すだろう。

　唾つばを飲む間に、顔のすぐ横を懐中時計サポネツタが飛び去っていく。そのチェーンは大きな円を描き、柱を回ってペルラの手元に戻ろうとしている。柱ごとアレッシオを絡め取ろうというのだ。



　慌あわてて身を伏せる。跳躍したペルラが空中で巻き取った懐中時計サポネツタをさらに打ち込んでくる。銃口を向けるが、引き金を絞しぼる前にペルラが身をひねる。

　そのまま転がってテーブルの中に逃れた。ここは檻おりの中だ。慌あわてて這はい出すと、懐中時計サポネツタがテーブルの中から頬をかすめて飛び出してくる。

　本体はどこだ。

　見つけた、ペルラは天井に吊るされたモニターにぶら下がっていた。伸びきった鎖を巻き取る隙に銃口を向けるが、相手は部屋を立体的に使って狙いを絞しぼらせない。テーブルの上を跳ね、キャビネットを蹴ってアレッシオの背後に回りこんでくる。

　振り向きざまに銃を向けた瞬間、ペルラの靴くつ底ぞこに顎あごを襲われた。

　鈍い衝撃が脳天を揺らし、アレッシオは宙を舞って尻しり餅もちをついた。ペルラの蹴りをまともに喰らったのだ。目が眩くらむ。スカートを翻ひるがえした銀貨アルジエントが距離をとる。真珠色の瞳はまだ笑ったままだ。

「ふざけるな！」

　叫びとは裏腹に、頭の芯しんが冷えてゆくのを感じた。椅い子すにつかまったアレッシオは、その背もたれを盾たてにした。

　口の中に鉄の味が広がる。蹴りの衝撃でどこかが切れただけだ。挑発に踊らされてくたばるものか。銃口をペルラに向けながら、反撃の方法を考えた。

「終わりの時間です」

　そしてふたたび、懐中時計サポネツタが光の筋となって襲い掛かってくる。今度は螺ら旋せんを描きながら椅子を巻き取るつもりだ。またテーブルの下に潜もぐりこむ。ウサギというよりもこれでは鼠ねずみだ。テーブルクロスが裂け、銀の絨じゆう毯たんを刈り取りながら懐中時計サポネツタが迫ってくる。

「畜生カツツオ！」

　銃を構えた。

　目を閉じるな、鎖の軌き道どうを読め。

　言い聞かせているあいだに銃口は火を吹いた。

　炸さく裂れつ音おんとともに懐中時計サポネツタが跳ね上がる。同時に机の下から転げだした。銀の軌跡を描きながら、懐中時計サポネツタがペルラの手に戻る。再び椅子を盾にしようとしたとき、アレッシオは違和感を覚えた。

　椅子の背から鋼鉄の鉤かぎ爪づめが三本突き出していたのだ。おそらくフォーラが座った椅子にも、これと同じ仕掛けがあったのだろう。危うく背中を串くし刺ざしにされるところだった。

　瞬間、脳裏に電光が走った。

「化け物め！」

　アレッシオはペルラに向けて滅茶苦茶に引き金を絞しぼった。

　一発、二発、肩口に命中はしたが、ペルラは構わずに踏み込んできた。三発目、弾を撃ち尽くしたM84のスライドがホールドオープンする。

　ここぞとばかりに懐中時計サポネツタが飛んできた。地を這はうような銀の軌き跡せきが、アレッシオの手前で跳ね上がる。銃を捨てたアレッシオは銀の椅い子すを抱きかかえた。

　──ギィィッ！

　鋭い金属音とともに懐中時計サポネツタの衝撃が全身に伝わる。椅子をひねると、銀の鎖が鉤かぎ爪づめに引っかかった。そのまま鎖を絡め取り、椅子ごと絨じゆう毯たんに叩きつけた。

「無駄です」

　ペルラは冷静に鎖を巻き取ろうとする。アレッシオは椅子を乗り越えて銀の鎖を踏みつけた。同時に、鉤爪に絡まった懐中時計サポネツタが逆回転を始めた。

　早くしなければ、戻る懐中時計サポネツタの刃で足ごと持って行かれるだろう。

　なるようになれ。

　腰に差したM93Ｒを引き抜いて、伸びきった銀の鎖めがけてぶっ放した。

　掃そう射しや音おん！

フルオートマチックの三点射だ。一度引き金を引くだけで、自動的に三発の銃弾が発射される。そいつをまともに喰らった銀の鎖が粉々に砕け散った。

ペルラの瞳が見開かれる。人形も驚くのだ。足元をふらつかせた彼女の動きが、スローモーションで網もう膜まくに映りこんでくる。

絨毯を蹴けったアレッシオは、バランスを崩したペルラの下腹部に銃口を突きつけた。

「俺がいま引き金を絞ったらどうなる？」

こいつが火を吹けば人形の胴体など粉こな微み塵じんだ。しかしペルラの表情は変わらない。真珠の瞳は濁にごることなくアレッシオを見据えている。

どうした、なぜ引き金を引かない。

こいつは仇かたきだ──それなのに、引き金にかかった指はぴくりとも動かない。それは、殺し屋の本能が無駄だと伝えているからだ。

急所に銃口を突きつけている。それなのにどうしても相手を殺せるイメージが湧いてこなかった。

アレッシオは銃口を外した。殺せないのならば、そうしている必要はどこにも無い。

「よろしいのですか？」

「あいにく無駄弾を使う趣味はない。よくは分からんが、死なねえって顔をしてやがる」

銃を腰に戻す。ペルラも懐中時計サポネツタを引っ込めた。

「……ただの人間が、ここまでやれるとは予想外でした」

「俺からすれば、あんたも人じん狼ろうも正しよう真しん正しよう銘めいの化け物だ。強力な武器と不死身の肉体で、当たるを幸い薙なぎ倒す。人間風ふ情ぜいがどうあがこうと敵かなう相手じゃないというわけだ」

ペルラの顎あごをしゃくって、顔を近づけた。

「だが忘れるな、俺はフォーラのいる舞台を降りねえ。狼だろうが化け物だろうが、ガキどもを殺やった奴は必ず殺す」

「ならば私を撃たないのですか」

「あんたの指輪はやっぱり真珠なのか？」

　真珠の瞳が泳ぐ。一瞬だけペルラの目もとが引きつった。

「操り人形を敵とは思わんよ。殺るならあんたの背後にいる連中だ」

「フォーラは違うとでも？」

「分かりきったことを聞くんじゃねえ」

　ペルラは口元だけをほころばせ、どこか寂しげに微ほほ笑えんだ。

「貴方あなたにそう思われている限り、彼女は人形ではないのでしょう」

　アレッシオの手をやんわりと除けたペルラは、テーブルに突き立っていたフォークを引き抜いた。歯車が回る音がして、フォーラの背中に突き刺さっていた鉤かぎ爪づめが椅い子すの背に吸い込まれる。

「姉様！」

　かんかんになったフォーラが、二人の間に割り込んできた。

「もうアレッシオに手を出させないわ」

「お約束した通り、私からは攻撃をしていませんよ」

「屁へ理り屈くつだわ」

　頬を膨ふくらませたフォーラは、人差し指の拳銃を作ってペルラに向けた。その仕草はまさにおてんばな少女そのものだ。さぞかしペルラも不本意なことだろう。

「姉様がなんて言ったって、私たちで人じん狼ろうをやっつけるから」

「分かりました。貴女あなたがそうしたいのなら、もう邪魔はいたしません」

　まるで妹をなだめるように言ったペルラは、最後の書類を暖だん炉ろにくべるとペトルチアーニの死体へと歩み寄った。

「姉様？」

　なにを思ったかその場にひざまずき、その頭部を膝の上に乗せる。

　ペトルチアーニの死に顔は醜みにくく歪ゆがんだままだ。ペルラの

靴くつ底ぞこで踏みにじられたからではない、あらゆる憎悪と無念を刻みつけたその顔は、ここで復ふく讐しゅうが絶たれたことに怒りくるっているのだ。

「先ほど申し上げたとおり……」

　ペルラの口調は静かだった。

「人狼は銀の武器を用いることで殺せます。魔法物語フイアーバにならなければならないというのは、この人間の愚かな妄もう執しゅうにすぎません」

　書しよ斎さいにあった銀の９ミリ弾も、フィアーバや喜劇ラツコントどもが銀の武器を持っていたのも、狼を殺すためだった。

「人じん狼ろうは人肉を喰らうことで若さを保つ魔物です。私たち自動機械人形オートマタも部品を交換すれば若さを保つことができる。人間だけが有限であり、だから人間の魂たましいは無限なのだと、この人は言っていました」

　ペルラはフォーラのほうを向いて、その手を取った。

「それならば、貴女あなたはいつ死ぬのでしょう？」

　両手を重ねたまま、首をかしげて問いかける。

「私だったら、一番幸せなときに死にたいわ」

「それは今ですか？」

　今度はフォーラが首をかしげた。ペルラは笑ってその手を離した。

　ペルラが立ち上がると、膝に乗せられていた仮面の男マスケリーノの死体が絨じゆう毯たんに転げ落ちた。

「終わりの時間です」

　踵きびすを返したペルラはそのまま立ち去ろうとして、しかし思い直し、奥の寝室から車くるま椅い子すを押してきた。

「手伝うわ」

　フォーラと一緒になって手足のない肉にく塊かいを引きずり、その上に乗せる。

　手足のない仮面の男マスケリーノが、ふたたび車椅子の山車となった。

「フォーラさん」

「なあに？」

「この人間の全てが仮面であり、贋がん物ぶつでした」

　憎しみに満ちたペトルチアーニの顔を見つめる。フォーラは鞄かばんからノヴェラの円筒シリンダを取り出して懐ふところに抱いた。

「ただひとつの真実が、仮面の下にあるこの憎悪の感情です」

「好きにはなれないけれど、嫌いじゃないわ」

「私も、嫌いではありません」

　ペルラが懐中時計サポネツタを取り出した。

　武器としてではない、気配でそれは分かる。文字盤を読み取って小さく頷いた。

「お別れね、姉様」

「はい……」

　ペルラが口ごもり、彫刻のような顔にかすかな表情が生まれた。

「最後に名前を呼んでいただけますか？　私は貴女あなたから姉様と呼ばれることも不本意だったのです」

　少し考えてから、フォーラは優しくペルラの手を取った。

「さようなら、ペルラ」

　真珠の瞳を細めてペルラが笑う。アレッシオは、フォーラが自分のことをノヴェラの姉だと錯さつ覚かくしていた理由が、なんとなく分かったような気がした。

「私からもお願いがあるわ」

「なんでしょうか」

「もし、私とアレッシオが帰ってこなかったら……」

　銀の円筒シリンダをペルラの前に差し出す。

「そのときは、ノヴェラのことをお願い」

「わかりました」

車くるま椅い子すを押してペルラが去る。御お伽とぎの国に呪じゆ詛そと災さい厄やくを振りまいた男の骸むくろが、銀の城の入り口から円柱の回かい廊ろうへと姿を消してゆく。その後ろ姿を見つめるフォーラの腕の中で、ノヴェラの円筒シリンダが銀の光を受けて七色に輝いていた。

ix

食堂の奥には、仮面の男マスケリーノの書しよ斎さいと寝室があった。

書斎の中はすでに調べてある。奥の扉の向こうにはＶＴＲで人形の調律に使われていた作業室とごみ捨て場があったが、これといって目ぼしいものは見つからなかった。

寝室はベッドとナイトテーブルが置かれているだけで、やはり奥に扉があった。

「この部屋は嫌い」

話したくない思い出が詰まっているのだろう。フォーラはさっさと寝室を横切って出ようとする。奥の扉を開けると、その向こうには倉庫と地下駐車場があった。

「こんな地下に駐車場があるなんて知らなかったわ」

「まるで秘密基地だな。どうやらリフトで地下二階に運ばれるようだ」

「無用心ね、そこから狼が来るかもしれないのに」

「仮面の男マスケリーノのことだ、何らかの対策をしていたんだろうよ」

フォーラと話しながら倉庫の中を漁あさる。食料品や猥わい雑ざつな玩おも具ちやに混ざって、喜劇ラツコントどもが使っていた銀の鉈なたや銀の斧おの、それに銀のサーベル……そういった刀剣類と銀の銃弾が陳列されていた。

整然と並べられた武器の数々が、仮面の男マスケリーノの恨みの深さを物語っているようだ。アレッシオはその中から銃弾だけを選び、ジャケットのポケットに詰め込んだ。

「ここからは俺の復ふく讐しゆう物語だ」

もはや教きよう煌こう庁ちようも銀貨アルジエントも関係ない。仮

面の男マスケリーノへの遺い恨こんもどこかへ飛んでいた。

　主役は交代したのだ。

　人じん狼ろうをぶち殺すのは、弾丸パロツトラだ。

　地下駐車場に入ると、広いコンクリートの空間に真っ赤なクーペが置かれていた。

「こいつは……」

　ぽつりと置かれた車の姿を、地下の照明が明らかにする。

　そこに置かれていたのはアルファロメオ──真っ赤なジュリアスプリントだ。国産品をこよなく愛する仮面の男マスケリーノらしく、ぴかぴかに磨き上げられている。

　車の周りをぐるりと回ると、フロントのナンバープレートが外されていることに気がついた。かわりに銀色のバンパーがずいぶんと手前まで張り出している。

「尖とがっているわ」

「なんだって」

「先が尖っているの、斧みたいに」

　バンパーの前に屈みこんだフォーラが不思議そうな顔をする。隣に並んだアレッシオは、そいつを見て言葉を失った。

　フロントバンパー全体が、鋭利な銀の刃になっていたのだ。

「銀の戦車ね」

「戦車か……どこまでもいかれてるな、あの男は」

　ただでさえ、古代復興運動リナツシメント発祥の地であるベルモントには不似合いなクーペが、仮面の男マスケリーノの手によって戦闘用に改造されていたのだ。

　ジュリアスプリントは改造の過程にあったらしく、駐車場の隅には得体の知れない部品が山のように積まれている。奥には塗装を銀色にするためのスプレーガンや大型の機材も置いてあり、ちょっとした板金工場のようになっていた。

　あの人形どもに作業をさせていたのだろう。仮面の男マスケリーノのことだ、放っておいたらこいつに機関砲くらいは取り付けてしまう

だろう。

「これならドライブに使えそうね」

　車のキーは挿さしっぱなしだ。そいつを引き抜いてドアを開けた。

　ダッシュボードのメーターを確かめると、ガソリンもたっぷり詰まっているようだ。

「出かけるか」

「どこへ？」

「やり残したことを済ませておくのさ」

　フォーラを助手席に乗せ、キーを回す。太い排気音が空腹の下腹に強烈な振動を送り込んでくる。

「やり残し？」

「こいつのことさ」

　ノヴェラの円筒シリンダの入った鞄かばんを指差した。

「フォーラには悪いが、俺はペルラとかいう自動機械人形オートマタを信じることができない。こいつを託たくすのなら……」

「分かったわ、ニコロね」

「そうだ。だが病院に出向いて奴らに知られるのは困るから、間に人を立てる。教きよう皇こう庁ちようとは関係のなさそうな奴をな」

　ルーカに運転を教わったのはシトロエンだが、サイズが違うだけで大差はないだろう。フロアの中央にあるリフトに向かおうとすると、フォーラがジャケットの袖を引っ張った。

「席が違うわ、アレッシオ」

　腹の底に響くような爆音とともに、赤いジュリアスプリントが旧市街を走り抜ける。眠らない御お伽とぎの国の大通りをドゥオーモ広場へ折れると、観光客の視線が赤い車体に吸い寄せられるのが分かった。

　運転席でハンドルを握っているのはフォーラだった。

　ドレスから伸びた細い腕で、この大柄な車を堂々と転がしている。

「ノヴェラよりも上手でしょ？」

「これもペルラに教わったのか」

「そうなの、姉様が言うには私の運転は乱暴なんだって」

　ハンドルを乱暴に切り、後輪を滑らせながら角を曲がる。ペルラの不本意そうな顔が目に浮かぶようだ。

　眠らない旧市街を抜けてヴェッキオ橋に差し掛かるところで、アレッシオは馴な染じみの宝石商に車をつけさせた。まだ夜は深くない。観光客の視線を浴びながら車を降り、店に入った。

「今日はどんな御用で？」

「こいつを買ってもらいたい」

　フィアーバから奪った銀の仮面マスケラをカウンターに乗せる。目を丸くした店主はそれを手にとって虫眼鏡で眺め回し、さんざん悩みぬいてから一千万ヴィンチの札束を積み上げた。

「悪くない取引だった」

「ちょっと多すぎないかしら」

「いくらかはこっちで使わせてもらうさ、このさい都合がいい」

　車に戻ったアレッシオは、ノヴェラの円筒シリンダを鞄から出して、かわりに札束を放り込んだ。

　ノヴェラの円筒シリンダは、銀の城の倉庫で手に入れた木箱にぴったりと蔵おさめられている。それは自動機械人形オートマタの円筒シリンダを入れるために仮面の男マスケリーノがしつらえたケースだった。木箱の中には円筒シリンダのほかに、ニコロに宛てた手紙を入れておいた。

「次は市警察だ」

「お任せあれ」

　フォーラの右手が自信たっぷりにシフトノブを切り替える。

「あとで俺にも教えてくれないか」

「こういうのは、見て覚えるのよ」

　車を飛ばし、十分とかからずに警察署に着いた。バンパーの刃が目

立たぬようにジュリアスプリントを物陰につける。しばらくすると、建物の中から見覚えのある少年が姿を現した。

　クラクションを短く鳴らすと、少年が小走りに近づいてきた。

「あんた、アレッシオか」

　ぼろの上着を着たこの少年はノエルだった。弾丸パロツトラを追放された仲間たちと共に、いまはバンビーニというグループを組んでいる。

「変わりはないか」

「よく言うぜ、スラムを追い出しておいてよ」

　毒づいて、真っ赤な車を上から下までじろじろと眺め回す。バンビーニの連中はスラムを追われたおかげで人じん狼ろうに喰われずに済んだのだ。

「あれからこっちは不景気もいいところさ、今日だって……」

「ドジったのか？」

「まあね……仕方ないよ、オレたちも食ってかなきゃなんないんだから」

　ノエルはまだ、弾丸パロツトラの壊滅すら知らないのだろう。高級車に乗ったアレッシオに、羨うらやましそうな視線を投げかけてくる。

「ずいぶんと羽振りがいいんだね」

「借り物さ。それよりも頼まれてくれないか、警察署の中に麻薬捜査官のパオロという奴がいる。ヴェネツィアから出しゆつ向こうしてきた刑事だ」

　鞄かばんの札束から一万ヴィンチの紙し幣へいを十枚抜き取って、ノエルに握らせた。

「その刑事に、ヴェネツィアの友人が外で待っていると伝えてくれないか」

「これ……本物？」

　手の中の大金にノエルが目を白黒させる。

「駄だ賃ちんだ、仲間のガキどもに美う味まい飯でも食わせてやれ」

「分かったよ」

　そそくさと紙幣をポケットにねじ込むノエルに、弾丸パロツトラのガキどもが重なる。

「ねぐらに困っているのなら、スラムに戻ればいい」

「なにを言ってんだ、オレたちは……」

「弾丸パロツトラはもうスラムには戻らない、俺も同じだ」

「アレッシオ？」

「あまり目立ちたくはない、早く行くんだ」

　頷うなずいたノエルは、何度かこっちを振り返ってから警察署に戻っていった。

「もうすぐパオロが来る。それまでは……」

「うん……」

　運転席のフォーラはノヴェラの円筒シリンダを抱いていた。まるで歯車の音を聞こうとするように、銀の筒つつに当てた耳を澄ましている。

　きっと、いくつもの音がフォーラの円筒シリンダの中で弾けているのだろう。物言わぬ兄をそうやって抱きしめて、二人だけの会話を楽しんでいるようにも見える。

　ノヴェラと戯たわむれるフォーラの姿は、アレッシオにひとつの真実を告げていた。

　本質的に人間と人形の間に違いはないのだと。

　情報を認識する、記憶する、記憶の蓄積をもとに判断を生み出す――その機能を備えているのならば、それが母の胎たい内ないで作られていようと、薄暗い作業台の上で組み立てられたものであろうと違いはない。

　脳を模して作られた円筒シリンダが、脳のように機能しているのであれば、そこにはノヴェラの言う自己というものが生まれる。その自己が目指すものは、自分自身という物語を編あむことだ。

　そうやって動いている。

　アレッシオも、フォーラも、ノヴェラも、仮面の男マスケリーノも

変わりなく、ただ自分の物語を作り上げるために。

「フォーラ」

「なあに？」

「ノヴェラの物語は完成したと思うか」

「まだまだね、きっと夢の中で続いているのよ」

　フォーラの言うとおり、ノヴェラの物語に終止符は打たれていないのかもしれない。その円筒シリンダが元通りに修復されたとき、止まっていた物語が動き出すのだろう。

「なら、そいつとはお別れだ」

　その先にあるのはノヴェラの物語だ。アレッシオとフォーラの物語ではない。

　そうね──呟つぶやいたフォーラが木箱の中にノヴェラを寝かせた。宝石箱のようなクッションが白銀の円筒シリンダを包み込む。

　白い指がジッパーを閉めると、ノヴェラの木箱はゆっくりとその姿を隠していった。

　ものの十分ほどでパオロが姿を現した。

「変な小こ僧ぞうに呼ばれたんだが、お前だったとはな。なんだ、この車はどうしたんだ」

「そんなことは気にしないでくれ、酒飲み話の相手が欲しかったんだ」

　携帯酒瓶ヒツプフラスクを取り出し、自分で一口飲んでから渡す。口をつけたパオロが目を見開いた。

「こいつはラフロイグじゃないか？」

「いい舌をしているな。安月給の刑事には無縁だろう」

「馬鹿を言うな」

　さも美う味まそうに口の中で転がすパオロに、ノヴェラの円筒シリンダの入ったバッグを差し出した。

「中に四百万ヴィンチ入っている。あんたを見込んでのことだ、この袋に入った荷物を入院している小僧に届けてもらいたい」

「事情も話さずに金で動かそうっていうのか？」

「薬ヤクじゃない、頼む」

「俺が持ち逃げをするかもしれんぞ」

「死んだガキどもは、スラムのカトリック教会に仲間と一緒に葬ほうむってやってほしい」

　さらに二百万ヴィンチの札束を鞄かばんの上に乗せた。

「勝手な奴だ」

　携帯酒瓶ヒツプフラスクを取り上げたパオロがラフロイグに喉を鳴らす。

　それからアレッシオの目を覗き、怪け訝げんそうな顔をした。

「お前は、そんな顔をしていたか？」

「俺は変わらんよ」

「……子供ガキの弔とむらいか」

　凄すご腕うでの麻薬捜査官は、アレッシオの気配から何かを感じ取ったのだろう。声の調子を落としてこう言った。

「復ふく讐しゆうはなにも生まないぞ」

「当たり前だ。俺が何かを生むとしたら、それは復讐の後だ」

　携帯酒瓶ヒツプフラスクを取り上げた。フォーラが車のエンジンをかける。パオロはなにか言いたそうにシートを覗のぞき込んできたが、結局なにも言いはしなかった。

x

　つまりは、あの仮面の男マスケリーノが兄妹人形の生みの親であったということだ──。

　フランチェスコの前に、銀の仮面マスケラが二つ並んでいる。

　片方は、スラムの食堂で骨董人形アンテイークの少年が持っていたもの。

　もう片方は、銀ぴかの地下室で仮面の男マスケリーノが着けていたものだ。

フランチェスコはメモ帳に円を描き、その中に黒丸を二つつけた。この黒丸は、あの贅ぜい肉にくの塊かたまりに穿うがってやった穴を表わしている。そいつを丸めて、ごみ箱に放り込んだ。

ほんの数時間前。

モンテ・オレーリアという商社ビルに、フランチェスコは標的の匂いを嗅ぎ取った。

昇降機エレベーターをこじ開けて地下に降り、その奥に広がる地下回かい廊ろうで忌いまわしい電気式イミテーション人形どもを粉砕してやったのだ。

回廊の奥、大広間の扉を破って問答無用で突撃する。そこでフランチェスコは、肥満した仮面の男マスケリーノの腹と胸に素手で大穴を開けてやった。

内臓をわしづかみにされた仮面の男マスケリーノは怒りくるっていた。

「化け物が、貴様のような人じん狼ろうが！」

甲かん高だかい声で呪じゅ詛その言葉を吐きかけ、指輪だらけの両手でこっちの顔を引っ掻かこうとしたのだ。まるで怯おびえを見せない男の抵抗が、フランチェスコの興味をかき立てた。

顔を見てやろう。

銀の仮面マスケラを剝はぎ取ると、その下から赫かく怒どに歪んだ中年男の顔が現れた。怒りによって刻まれた顔の皺しわが、たるんだ皮ひ膚ふをも裂いてしまいそうだった。

「私の娘が、必ず貴様を地獄に引きずり落とすぞ！」

男は腹の穴など知らぬかのように呪いの言葉を吐き続けた。とどめの二撃目で心臓を握りつぶされても、その表情が変わることはなかったのだ。一片の恐怖すらも紛れることのない怒りの塊は、この仮面マスケラの持ち主にふさわしいものだった。

あれは戦士の目だ。数え切れぬ人間を喰い殺した狼だからこそ分かることだ。

なにひとつ力を持たぬぶよぶよの中年男が、猛たけりくるう戦いくさ人びとのような目でフランチェスコを睨にらみ据えたのだ。えぐり出した戦士の心臓は脂し肪ぼうで汚れていたが、その味は格別だった。

ボトルの底に残っていたワインを、喉のどを鳴らして飲み干した。

窓の外はすでに夜が深い。

宝石箱のような夜景のどこかで警察車輌ガゼツラのサイレンが響いている。か細く聞こえる高音は、さながら狼に怯えた御お伽とぎの国の悲鳴のようだ。その音を楽しみながら、仮面の男マスケリーノの心臓をぶち抜いた左右の手を見つめた。

そこには二つの宝石が輝いている。

右手の薬指には緑柱石スメラルドの瞳石ジエンマが。

左手の薬指には緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマが。

仕事は、最後の仕上げに入っているのだ。

ホテルの窓からは、モンテ・オレーリアのビルが見渡せる。ここで待てば良いのだ。フランチェスコに祝福をもたらす娘の到着を。

「愛しき御伽話フオーラか……」

瞳石ジエンマでワインボトルを叩くと、コツコツと小気味のいい音がする。

仮面の男の娘━それは主人パドローネの命令通りに殺さつ戮りくをなす強力な兵器。その存在そのものが、オルマ・ロッサを変えることのできる力となるだろう。

全て思惑通りに運んでいる。

大粒の緑柱石アクアマリーナ━美しい光だ。もしもこの力を副頭領ヴイーチエ・カーポシルヴィオではなく、フランチェスコが利用したらどうなるだろうか。

教きよう煌こう庁ちように与くみする連中は軍勢をもって大地の神々を駆く逐ちくし、そこに国を打ち建てた。その報復の嚆こう矢しを、連中の作り出した人形に担わせてやったらどうなるだろうか。

いくつかの未来図に思いを馳はせていたところで、ホテルの内線が鳴った。

フロントからで、フランチェスコ宛あてに電話が入ったとの報しらせだった。繋つながせると、聞き覚えのある低い声が耳じ朶だを打った。

「ご苦労だった、カルメロから報告は聞いている」

　副頭領ヴイーチエ・カーポシルヴィオだ。カルメロは無事に伝言を届けられたのだ。

「この緑柱石スメラルドは人形から奪ったのか？」

「そうだ、兄の骨董人形アンテイークをそれと知らずに壊してしまった」

「その程度の人形ならハナから役に立ちゃあしねえ。気にするな」

　確かに、あの少年の戦闘能力は銀貨アルジエントには程遠いものだった。シルヴィオの言うとおり、連れて帰っても役には立たなかっただろう。肝かん心じんの『銀貨アルジエントモドキ』は、アクアマリーナの妹だったということだ。

　シルヴィオが続ける。

「つかんだ情報の真しん贋がんを見極めるのも仕事のうちだ。ガセならガセで、誰の思惑がそこにあるのかを明らかにしておけ」

「ガセではない、妹は本物だ」

「なぜそう言い切れる？」

「人形師を殺した際に、奴の記録を見た」

「ほう」

「妹の戦闘能力は確かに銀貨アルジエントに比ひ肩けんするものだった。副頭領ヴイーチエ・カーポにとっても有ゆう益えきな手て駒ごまとなるだろう」

　フォーラという名の銀貨アルジエントモドキについて、どこまでシルヴィオに話すべきだろうか。胆はらの決まらぬうちは余計な言葉を慎つつしむべきだ。フランチェスコは話題を変えた。

「ただひとつ、腑ふに落ちないことがある」

「なんだ」

「なぜ、私の鉈なたをカルメロに預けられた」

「他人に武器を触られるのは嫌か？」

「そうではない。なぜ返す気になられたのか、それが知りたい」

「お前は家族になるからだ」

予想外の返答にフランチェスコはしばし言葉を失った。

「……本気で言っているのか」

「俺が決めたことだ」

家族だと？　ばかな、仕事をより確実に遂すい行こうさせるために送りつけたのではないのか。

短い沈黙ののち、フランチェスコはもう一度シルヴィオという男の胆を探ることにした。

「副頭領ヴイーチエ・カーポ、本当のことを言えば私は人形師から妹の瞳石ジエンマを手に入れている。もし私が心変わりして、この指輪を貴方あなたに渡さなかったとしたら、どうなされる？」

シルヴィオは黙っていた。相手もこちらの真意を測っているようだ。やがてゆっくりとこう答えた。

「そのときは、俺の目利ききが悪かっただけのことだ」

「貴方は鉈なたを返すのが早すぎたのだ。瞳石ジエンマと引き換えでも良かったはずだ」

「言っただろう、俺の決めたことだ」

愚直なまでに言い放つ。この男は小心ではなく単純なのだ。おかしくなってフランチェスコは笑った。笑って、副頭領ヴイーチエ・カーポにこう約束した。

「じきに指輪と妹を本部に持ち帰ることになりましょう。吉報をお待ちください」

「無茶はするなよ」

「貴方は面白い男だ」

「なんだその口のきき方は」

受話器越しに狼が笑う。

このように静かに笑ったのは久しぶりだった。

シルヴィオの言葉がどこまで本心かは分からない。それが真っ赤な偽りであったにせよ、野良犬にすぎぬフランチェスコを家族呼ばわりした酔すい狂きような男は初めてだ。

この男のために命を張るのも悪くはない。

そう思った。

「私は狼に戻りつつあるのかもしれない」

「その言葉、覚えておこう」

電話が切れた。フランチェスコはアルコールの心ここ地ちよい浸透を感じながら、ベルモントの夜景に緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマを翳かざしてみせた。

「狼の御伽話フオーラに祝福を！」

御お伽とぎの国の夜風に身を晒す。

深く澄んだ青い宝石が、フランチェスコの指の中できらきらと輝いていた。

xi

ヴィラ・ベルモントのエントランスに赤いジュリアスプリントが滑り込む。ドアボーイに車のキーを預けたアレッシオは、フォーラを連れてロビーの喧けん騒そうを横切った。

「覚えているか？」

「ええ、最上階のスイートね」

フォーラの記憶は確かだった。ここはベルッチの館を襲撃した帰りに、仮面の男マスケリーノからノヴェラとフォーラを託たくされた五つ星のホテルだ。

人の途切れぬロビーを見下ろしながら、階段を二階へと昇る。

銀の城が壊滅した今となっては、仮面の男マスケリーノを恐れてこそこそと身を潜ひそめる必要もなくなった。予約を入れておいた二階のリストランテに入り、個室に通された。

「ここの鴨かものローストは絶品だと、ガキどもが騒いでたんだ」

「食べておかないと後悔しそうね」

果物しか食べないフォーラがおかしそうに笑う。

店は閉店まぎわだったが、従業員もこちらの身元は心得ているようだ。最高級のワインだけを注文して、あとは腕によりをかけたディ

ナーを三人前と最高のフルーツを見つくろうように言いつけると、給仕は恐縮したように引っ込んでいった。

　料理が運ばれてくるまでのあいだ、アレッシオは食前酒ベルモットを舌の上で転がしながらフォーラを眺めていた。言葉を交わすことはなかったが、彼女もこうして見つめ合うのが楽しいらしく、表情をころころ変えてはこっちを笑わせようとする。

「フォーラは元気だな」

「アレッシオは元気がないの？」

「ぼちぼちだ」

「楽しまないとだめよ、早く老けるもの」

　ふざけたフォーラが黄き金んの巻き毛で髭ひげを作る。苦笑して他の話題を探した。

「ジュリアの運転は見事だったな」

「ふふっ、あの車とは相性がいいみたい」

「拳銃は難しいか？」

「さっきは失敗しちゃったけれど、次はできると思うわ」

　指鉄砲をつくったフォーラが、人差し指の銃身をアレッシオに向ける。

「アレッシオのを見てると簡単そうだもの」

「そいつは立たつ瀬せがないな」

　他愛たわいもない話をしているうちに食欲をそそる匂いが鼻先をくすぐり、料理が運ばれてきた。

　前菜の盛り合わせから始まって、ポルチーニ茸だけのパスタからメインディッシュへ。思えば丸一日以上食べてなかったのだ。アレッシオは評判の鴨かものローストにかぶりつき、鯛たいのポワレを平らげ、ひたすら栄養を腹の中に詰め込むことに専念した。

「アレッシオは、いつもよく食べるのね」

「マフィオーゾはみんなそうさ」

　弾丸パロツトラの子供たちに語りかけるのと同じ口調になりなが

ら、肉の塊かたまりを咀そ嚼しやくする。赤ワインで二皿目の鴨のローストを流し込み、ソースを残らずパンですくい取る。本物のマフィオーゾは健けん啖たん家かだ。三人前の料理を平らげるのに、さしたる時間を必要としなかった。

　ワインのボトルを二つ空けて、およそ三十時間ぶりの食事を堪能したアレッシオは、ホテルを後にすると車をドゥオーモ広場の外れにつけさせた。

「綺き麗れいな街ね」

　運転席のフォーラが呟つぶやいた。

　車の停まった暗がりから、虹にじ色いろに輝く広場の灯あかりを眺めている。遠くから、自動機械人形オートマタ楽団の演奏する音楽が風に運ばれてきた。

「水の都とどちらが綺麗だ？」

「比べられないわ、でも夜はきっとベルモントの勝ちね」

　緑柱石アクアマリーナの瞳が街の灯りを煌きら々きらと映している。その横顔を見ていると、娼しよう館かんの窓からヴェネツィアの運河を見つめていたテレジーナの姿が鮮明に思い出されてくる。

　眠らない御お伽とぎの国を眺めながら、艶つややかな黄金色の巻き髪に触れた。くすぐったがったフォーラがアレッシオの首に両腕を回してきた。

「ヴェネツィアのことを思い出した」

「覚えているわ」

「あの頃のテレジーナは、今のフォーラに似ているな」

「そうね、あの頃はなにも怖くなかったもの」

「娼館にいても？」

「そうよ、だって……」

　言葉を切ったフォーラが上目づかいの瞳を潤うるませる。

「私の場所がそこにあったから」

　柔らかい吐息にワインの香りが溶け込んでいた。フォーラが歌うように続ける。

「アレッシオと一緒にいるときは、不安になったり焦ったりしなかったわ。貴方あなたが溺おぼれているのを見ているだけで安心できたの」

「溺れていた？」

「そうでしょ」

　くすくすと笑ったフォーラが、頬をすり寄せてきた。

　ヴェネツィアにいた時分の俺は、何ひとつ満たされていなかった。日銭の荒仕事に命を張り、高級娼婦のテレジーナに入れあげては、理想と辻つじ褄つまの合わない自分自身を呪ってばかりいたものだ。しかし今になってヴェネツィアを振り返ると、それは風の凪ないだ海をゆらゆらと漂っているような、気楽で幸せな時代だったようにも思えるのだ。

　ふと、バンドネオンの治療にいそしんでいたノヴェラとフォーラを思い出した。

　堂々巡りを繰り返していた二人のやりとりは、他人の目から見れば微笑ましいものだった。ノヴェラもフォーラも互いに不安定な自我を抱えていたはずなのに、そのどちらもが調和して綺麗に補い合っているように見えたのだ。

　ヴェネツィアの俺とテレジーナも、あるいは俺と弾丸パロツトラのガキどもも、似たようなものだったかもしれない。

　それも全ては、人じん狼ろうがスラムに入り込んでくるまでの話だ。

「何を考えているの？」

「フォーラの……いや、復ふく讐しゆうの果たし方さ」

　笑ってシートの背もたれを倒した。フォーラが楽しそうに真ま似ねをする。ドゥオーモ広場を飾るガス灯がフロントガラスの向こうでオーロラのような光の層をなしている。

　白い手を握ると、フォーラがパオロの口調を真似てみせた。

「復讐は何も生まないわ」

「何か生むことは、その後で考えればいいさ」

　復讐を果たしながら同時に何かを生み出そうなんて、そんな虫のいいことはこれっぽっちも考えていない。復讐が生み出すものといえ

ば、せいぜいが新しい復讐の種くらいだろう。

　仮面の男マスケリーノと人狼の復讐劇はスラムに拡散し、アレッシオへと受け継がれた。

　復讐は復讐を生み出し、連れん鎖さしてゆくものだ。

　それが嫌ならば、誰かが自分の意思で連鎖を断ち切ればいい。武器を捨て、無念を抱えてくたばった同胞の墓前で、俺は争いに終止符を打ったのだと胸を張ればいい。

　だが、それはアレッシオの物語ではない。

「物語には可愛かわいいヒロインが必要なのよ」

「復讐物語のヒロインは、主人公を止めようと涙するものだがな」

「そんなお話じゃみんな飽あきちゃうわ。御お伽とぎ話ばなしっていうのは子供が楽しむためのものよ」

　死地を前にしても、緑柱石アクアマリーナの瞳はいたずらそうにアレッシオを映している。炎の中に亡くした姉ならば、きっと涙を流しているところだろう。

「フォーラは強いな」

「お姉さんみたいに？」

「そんなことはないさ」

　ありのままのフォーラの手を取った。

　皆が彼女に多くのものを求め、てんで勝手な衣装を着せようとしていたのだ。

　仮面の男マスケリーノと教きよう煌こう庁ちようの連中は、銀貨アルジエントと呼ばれる殺さつ戮りく兵器としての衣装を。

　ペルラは彼女にとって大切だった誰かの衣装を。

　アレッシオは亡くした姉の衣装を――。

　頬を撫なでる。フォーラが気持ちよさそうに瞳を閉じる。かつてアレッシオが溺れた少女は、着せ替えの人形などではなかった。

　マフィアは性の逸いつ脱だつをしない。

　だからアレッシオは、姉ではないフォーラを腕の中に抱き寄せた。

「いいの？」

「フォーラはフォーラだ」

「そう……少しは大人になったのかしら？」

　唇を塞ふさぐ。

　フォーラの舌先を感じ、ワインの薫かおる吐息を楽しんだ。

　じゃれついたフォーラが腰の上にまたがってくる。その細い身体を抱き寄せた。

　食欲を満たせば、次は性欲──まったく人間というのは単純にできている。それが生きているということかもしれない。生の飢えを満たすことのできる相手は、互いの腕の中にいる。

「私を見て」

　ドレスのリボンを解ほどいたフォーラが、オーロラの中に裸身を晒さらした。

　その白い肌は渇かつ望ぼうとも絶望ともつながりのない、手の届く真実だ。

　唇を重ね、肉を交える。

　ドゥオーモを飾るガス灯の光が、窓の外で七色に揺れている。

　──この話を聞いた人も聞かせた人も、地獄へ落ちることは決してないはず。

「怖いことなんて何もないわ、だって地獄には落ちないんだもの」

「今が地獄だとしたら？」

「地獄っていうのは、もっと酷ひどいところよ」

　耳元のフォーラが艶えん然ぜんと微ほほ笑えむ。

　鼓こ膜まくをくすぐる彼女の声には奇妙な説得力があった。

xii

　人じん狼ろうの所在は分からない。

　しかし遠くない未来、アレッシオはそいつの狂きよう猛もうな足音を聞くことになるだろう。

　奴の狙いがフォーラならば、こちらから敵を探す必要はない。今は残された時間を少しでも有効に使うべきだ。

　銀の城に戻ったアレッシオは、気がかりだったいくつかの用件を片付けることにした。

　まずはペルラが燃やさなかった資料類に目を通し、それらが無価値なものであることを確かめた。そのほとんどが、流行の服飾やスポーツを扱った雑誌類だった。別世界の人種だと思っていた仮面の男マスケリーノが、こんな地下でフットボールを観戦していたのかと思うと、どこか哀れに思えてくる。

　次に残された死体を始末することにした。大広間の探索はそのあとだ。どこかに緑柱石アクアマリーナの指輪か、それを隠している金庫があるはずだ。

　人形の残ざん骸がいは数が多すぎる。カーテンの一枚を外して、ガエターノの遺体をそこにくるむことにした。

「お墓はどうするの？」

「教会の前にでも放り出しておくさ」

　死体が残っただけでもマフィオーゾとしては運がいいほうだ。フォーラに足を持たせ、ハンカチをかぶせた頭部を持ち上げたとき、死体の背中から一本のカセットが転げ落ちてきた。

　手に取ると、それはＶＴＲテープだった。この部屋にある他のテープと同じ規格のもので、ラベルには走り書きで『フォーラへ』と書かれていた。

　アレッシオは、死に際のガエターノが背中に手を回そうとしていたのを思い出した。あいつはこれを渡したがっていたのかもしれない。

「私に？」

「見てもいいか」

「うん、何かしら……」フォーラが不思議そうに首をかしげる。

　仮面の男マスケリーノの遺のこした最後のテープだ。人じん狼ろうと戦うためのヒントが少しでも得られればありがたい。アレッシオはそいつを再生装置に入れてボタンを押した。

砂嵐が過ぎ、画面が像を結ぶ。

そこには、いつかバールで見かけた若い大道芸人の姿があった。

「フランチェスコ……」

言葉が洩もれたのは無意識だ。

こいつだ！

こいつだったのだ。

どこか自分に似た雰ふん囲い気きのある若い男━こいつが人狼のフランチェスコなのだと、アレッシオは直感した。

録画した場所はこの大広間だ。フランチェスコは仮面の男マスケリーノの座っていた椅い子すに足を組み、カメラのほうを見て薄笑いを浮かべている。この長テーブルに固定のカメラを置いて撮影されたものだとすぐに分かった。

おそらくは仮面の男マスケリーノを殺害した後に、手近な機材を使って録画したのだろう。

「ようこそフォーラ」

足を組んだまま男が話し始めた。カメラは鮮明にその容姿をとらえている。

「できることなら君を迎えてやりたかったのだが、この銀ピカの部屋は悪趣味すぎる。こんな形で君に挨あい拶さつすることを許してほしい」

モニターに映った人狼は、どこか朴ぼく訥とつな口調で淡々とフォーラに語りかけている。

「仮面の主人パドローネにも大変な失礼をしてしまった。だが、落ち着いてここからの話を聞いてほしい、君にとって大事な話なのだから」

画面の中のフランチェスコが顔の前で左手を広げる。

その瞬間、フォーラの呼吸が止まった。

人じん狼ろうフランチェスコの薬指━そこに、緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマが輝いていたのだ！

「我が名はフランチェスコ。覚えておくがいい、君の主人の名を！」

銀の広間に誇らしげな声が響く。

瞳石ジエンマは奪われていたのだ。フォーラの新しい主人は人狼になった。

「聞くな、フォーラ」

アレッシオは小刻みに震えるフォーラの身体を抱き寄せた。

指輪を翳かざした男が声を張り上げる。

「新たなる主人としてフォーラに最初の命令をしよう！　共にいる偽りの主人を殺し、我が許もとへ来い。直ただちにだ！」

フォーラの気配が変わった。

「嫌よ！」

身をよじり、声を張り上げる。主人の命令に背いた自動機械人形オートマタは、瞳石ジエンマと同じ宝石で作られた円筒シリンダの軸受けが砕け散り、自壊してしまうのだ。

「フォーラ」

「平気よ、私のご主人様は私が選ぶわ」

フォーラが気丈に微笑む。ぎりっ……歯車の軋きしむ音が聞こえた。

ＶＴＲのフランチェスコが立ち上がって耳みみ栓せんをする。同時にスピーカーから物悲しい旋律が流れだした。心を揺さぶるバンドネオンの音色━これはグレゴリオ聖歌だ！

がちゃり！

音楽に乗せて重い歯車の音が動きだした。フォーラの身体に仕組まれた殺さつ戮りくの機構が発動しようとしている。

そしてアレッシオは理解することになった。

ノヴェラが何のためにいたのかを。

xiii

━扉が開いたときのことは、はっきりと覚えている。

夕暮れの吊り橋だった。

千せん尋じんの谷底は闇に溶け、私はダクトの吊り橋にぶらさがっていた。

あのとき、私を閉じ込めていた部屋の扉が開かれたのだ。

いまの私はそうして生まれたのだと思う。

それは、円筒シリンダの楽譜スコアに刻まれた新しい御お伽とぎ話ばなし。

私は、どぶの中で白い矢を咥くわえた醜みにくい蟇ひき蛙がえるだった。

どぶから這はい出すと、そこは路地裏にかかる吊り橋の上だった。

白い馬車はどこにもなかったけれど、私の手を王子様が握っていた。

黒ずくめの王子様が、王様の呪いを解いたのだ。

やがて御伽の部屋の扉が開かれ、私は識しることになる。

私の手を引いていたのは、アレッシオだった。

私は恋おもう。

アレッシオのこと、ご主人様ペトルチアーニのこと、それからノヴェラのことも少しだけ。

恋の始まりがいつだったか、それはよく分からない。

けど、きっとヴェネツィアの娼しよう館かんだ。

そこで私はアレッシオに会ったのだから。

あのころ彼はとても傷ついていて、なによりも私を必要としていた。

だから私は彼を助けることにしたのだ。

ご主人様の作り出した、私の姉妹たちを壊して。

ご主人様の瞳石ジエンマの言うことに、なにひとつ耳を傾けず。

銀の円筒シリンダに耳を澄ませば、ノヴェラのバンドネオンが聞こえる。

それは、私が生まれたときから聞いていた聖歌の旋律。

吊り橋の上で生まれた私の魂たましいは、ノヴェラの音色を聞きながら記憶を手た繰ぐり寄せる。

作業台のこと、娼しよう館かんのこと、ペルラ姉様とヴェネツィアのお屋敷。

狭い食堂トラットリアで暮らしたこと。

かわいそうなフィアーバのこと──。

ひとつひとつ、自分を確かめながら私は歩いてゆく。

扉を開けるまで、私の魂は暗あん渠きよの中を泳いでいるようだった。

暗く凪ないだ水銀の海で、円筒に刻まれたヴェネツィアの思い出だけを見て過ごしていた。

そこに見える景色はどれも温かく、花の香が薫かおるようで、けれども薄い色彩だった。

それはどぶの中から見上げた空の色。

暗い水面に浮かんだ私は、言葉をなくした醜い蟇ひき蛙がえるだった。

「円筒シリンダは不滅の脳みそだ」

それは、頭のどこかにひっかかっている不快な言葉。

私と人間を分かつ言葉だ。

そう言っていたのは、どのご主人様だったかしら。

バンドネオンの音がする。

幾人ものご主人様が私の身体を通り過ぎた。

人形師も老人も、みんなが指輪を掲げ、瞳石ジエンマの光を翳かざしていた。

ただひとり、アレッシオだけが瞳石ジェンマを持っていなかった。

みんなが持っていた宝石のかわりに、彼だけは鈍にび色のネックレスを下げていた。

私の胸にも同じネックレスが光っている。

　そう、ノヴェラみたいに。

　──さよなら。

　ノヴェラの声が円筒シリンダの内側で響いている。

　私の知らないうちに、家族はみんな殺されてしまった。

　役立たずの私はなにもできなかった。

　けれどそんな蟇蛙の手を、アレッシオはずっと握っていた。

　ペルラ姉様は、私に隠された力とみんなの仇かたきを教えてくれた。

　アレッシオの前には復ふく讐しゆうという広い荒野が広がっている。

　私の瞳も同じものを映している。

　なぜって、私も家族になったから。

　アレッシオに握られた私の手のひらには、狼を倒す力がきっとあるから──。

　さよならノヴェラ、あなたは前を向いて行くといいわ。

　私はノヴェラみたいに独りで歩くことはできない。

　誰かに寄り添って、その人の瞳に映る私を確かめることで、私は私になれるのだから。

　私はそういう風に作られている。そういう風に調律されている。

　誰が仕組んだかなんてどうでもいい。

　それが私の物語なのだから。

「蛙よ、蛙」

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前をちっとも愛していない王子だよ」

　瞳石ジエンマの奥から、通り過ぎたご主人様の声が聞こえる。

　私を呼ぶのは仮面の魔王、あるいは上流階級の老人たち。

それとも……あなた？

緑柱石アクアマリーナの指輪を翳かざす、あなたがご主人様かしら。

頬ほおと鼻び梁りように大きな傷を刻んだ復讐の化身──。

あなたの瞳はあの人に、ペトルチアーニによく似ているわ。

復讐に濁にごった瞳は嫌いじゃない。

私の泳いでいた海もまた、同じ色をしていたから。

ごめんね、あなたと一緒には行けないわ。

もう扉を開いてしまったから。

私が誰と一緒にいるか、それを選ぶのは私だから。

私は恋おもう。

私の手を離さなかった人の名を。

その人の肌の暖かさを。

無ぶ精しようひげのちくちくした感じや、煙草たばことアルコールに濁った息を。

何よりも、少し眩しそうに私を見るその瞳の色を。

もう、私の魂たましいは誰にも触れない。

夕暮れの吊り橋で、王様の呪いは解かれたのだから。

私の手を取ったあの人が言ったのだから。

「わたしを呼ぶのはだあれ？」

「お前を愛する王子だよ」

xiv

「愛しいアレッシオ……」

瞳を開けると、フォーラは車の助手席に座っていた。

目の前の窓を、夜の景色が飛び去ってゆく。隣ではアレッシオがハンドルを握っていた。

　きっと悪い夢を見ていたのだ。手足が蛙かえるのものでないことを確かめたフォーラは、ほっと胸をなでおろした。

　でも、どうしてアレッシオが運転をしているのかしら？

　そこにいるのはアレッシオ？

　それとも王子様？

　まだ、夢の水面を漂っているみたいだ。生まれてからずっとそうだったような気もする。ぷかぷかと意識の漂う感覚が、いまは不思議と気持ちが悪かった。

　首を振って身体を起こす。今度こそ目が覚めそうだ。

　隣の様子を窺うかがうと、アレッシオの面差しに焦あせりの色が浮かんでいた。

「どうしたの？」

「気が付いたか」

「危ないわ、運転は私のほうが上手いわよ」

　こっちを振り向いたアレッシオの瞳に、今度は戸惑いが滲にじみだす。

「どっちだ」

「どっち？」

「お前は俺のなんだ？」

「アレッシオの……」

　顔がぽっと熱くなった。急に差し迫ったことを聞いてくるからだ。

　未婚の恋人って、家族に例えたらなんて言うんだろう。そんな言葉は仮面の男マスケリーノにもペルラ姉様にも教わったことがない。

「恋人……だとだめ？」

　恐る恐るそう聞くと、アレッシオは安あん堵どした顔になった。

　正解だわ━安心して事情を聞こうと思ったそのとき、運転席の向こうに赤い車が見えた。

　どこかで見たことのある、丸いフォルムの車体。その助手席にあい

つが座っていたのだ。銀の城のＶＴＲに映っていた、あのフランチェスコという人じん狼ろうが。

「アレッシオ……まさか！」

　夢じゃなかった。夢なんかじゃなかった。

　いくら拒絶したくても、緑柱石アクアマリーナの瞳があいつの指輪に吸い込まれてしまう。

　アレッシオは銃じゆう帯たいに吊るした拳銃を抜いて、隣の車めがけて発砲した。

　車体が横滑りしそうになる。フォーラは助手席から慌あわてててハンドルに飛びついた。

「運転を代わるわ」

「ありがたいな」

　速度計は一二○キロをつけていた。ハンドルを握ったまま、助手席と運転席を隔へだてるトンネルをまたいでブレーキを踏む。スカートがめくれてしまうけれど、そんなことを気にしている場合じゃないのは分かってる。

「アレッシオは拳銃に集中して！」

「了解だ」

「七○キロまで落とすわ」

　速度が落ちる。フォーラは赤い車のほうを見ないように、目の前の景色とダッシュボードのメーターに意識を集めた。

　あの男の手に自分の瞳石ジエンマがあるなんて、考えたくもなかった。

「私、なにがあったの？」

「気絶したんだ。いつかみたいにな」

　いつかっていうのは、きっとあのときだ。魂たましいの抜ぬけ殻がらになった自分のことをアレッシオから聞いた覚えがある。円筒シリンダが外部からの情報を拒絶するとそうなるのだって、これは仮面の男マスケリーノが言っていたことだ。

　いまも瞳石ジエンマの命令を拒絶しようと、円筒シリンダが必死の

防ぼう御ぎょ策さくに出たのだろう。おかげでアレッシオは無事だった。

　けれど、またここで同じことが起きたら、今度は二人ともあいつにやられてしまう！

　赤い車が横に並んできた。もうあいつを見るのも、言葉を聞くのもいやだ。

「ノヴェラ！」

　ふいにノヴェラの声が聞こえたような気がした。声は外からではなく円筒シリンダの中を響いている。それはいつかバンドネオンの音色に乗せて聞いたアウトードロモの話だった。それが円筒シリンダの楽譜スコアから引き出されているのだと、すぐに分かった。

　車がコーナーに入る。

「つかまって！」

　フォーラは訳も分からずにハンドルを逆方向に回し、サイドブレーキを引いた。

　車の後輪が横滑りを起こして、カーブを曲がったところでいったん停止する。追い越した赤い車のテールランプが遠ざかっていくのが見えた。

「今よ、アレッシオ」

　ノヴェラがついている──もう運転は大丈夫だ。狭い車内で運転席と助手席を入れ替わろうとしたとき、前の車が急停車した。

「だめだわ、クラッチをつないで！」

　人じん狼ろうの命令が聞こえる前に、すぐにでも車を出さないといけない。センタートンネルをまたいだまま、アレッシオの足をどかしてクラッチを踏み込んだ。股こ間かんの前に突き出したシフトノブをがちゃがちゃと動かして、停車した赤い車の横を全速力で通過する。

「失敗しちゃった、ごめんなさい」

「いや、助かった。そのままステアリングを頼む」

「いつから追われているの？」

「銀の城を出たところからだ」

　銃を抜いたアレッシオが背後を窺うかがう。狙いを定めやすくするために、フォーラはフロントガラスからの景色に集中した。

　暗い街だった。街灯に照らされた建物はどれも古く、灯あかりのないものばかりだ。道にはごみがたくさん落ちている。どこかで見た景色だと思ったら、ここはスラムだった。

「フォーラ」

「なあに？」

　アレッシオの声がすると、少しだけ瞳石ジエンマのことを忘れられる。

「俺はこれからお前の主人パドローネを殺す。主人あるじ殺しの片棒をかつぐ覚悟はできているな」

「ええ、ゾクゾクするわ」

　私の瞳は、この人の姿を映したいと思っている。

　ハンドルを握りながら笑ってみた。緑柱石アクアマリーナの軸じく受うけが悲鳴を上げるたびに、円筒シリンダの中の余計な歯車がみんな外れて落ちていくようだった。

　　　＊

　二台の赤い車がスラムの中を走り抜ける。

　意図があってスラムに誘い込んだのではない。夢中で車を走らせているうちに、見知ったコースを選んでしまったのだ。道幅の狭いスラムでは走行できる道も限定される。決してアレッシオにとって有利な状況とはいえなかった。

　ジュリアスプリントの隣を走る赤い車はシトロエンだ。そのハンドルは人狼のフランチェスコが握っている。奴は銀の城にＶＴＲの罠わなを張った上で、モンテ・オレーリアの建物をどこかから監かん視していたのだ。旧市街からぴったりとこっちの車に張りついている。

　アレッシオは奴の車をよく知っている。それは、ルーカとノヴェラがアウトードロモで死闘を繰り広げたときに使った、あの赤い合成獣キメラだった。

　おそらく奴は、食堂トラツトリアを襲ったときに奪った車を勝手に乗り回しているのだろう。その冒ぼう瀆とくは、命をもって贖あがなわれるべきだ。

　行く手にＴ字路が見えてきた。

「右は行き止まりだ」

　アクセルを緩ゆるめたフォーラが左へハンドルを切る。続けてコーナーを曲がろうとする合成獣キメラのフロントガラスめがけて、ルーカのＭ９を発砲した。

　シトロエンの薄い車体に銃じゆう痕こんが穿うがたれる。しかし奴はまるで動じた風がない。できるなら前輪をバーストさせてやりたかったが、石いし畳だたみの揺れがひどく狙いがつけられそうになかった。

　果たして人じん狼ろうの戦闘能力とはどれほどのものか。食堂トラットリアや銀の城に残された破壊の痕跡を見るに、それが常じよう軌きを逸いつしたものであることは分かる。

　スラムの間を車が走り抜ける。

　相手は飛び道具を持っていないようだ。おそらくは肉体が凶器そのものなのだろう。赤い合キ成メ獣ラがスピードを上げてジュリアスプリントの左側に並んできた。ハンドルを握ったフォーラが頭を伏せる。奴の言葉を聞かないためだ。

「そこを右だ！」

　古びた煉れん瓦がのビルを曲がる。石畳を噛んだタイヤが悲鳴を上げ、急に景色が開けた。

　道幅が広がる。雑然と並んでいた建物が途切れ、わずかに欠けた月が星の海に浮かんでいるのが見えた。その下に、真っ黒く巨大な地域ホールの廃はい墟きよがある。

　ここは、リッカルドの死んだアウトードロモだ。

　スラムとは思えぬほど広い車道が暗闇の廃墟を囲んでいる。並走した二台の赤い自動車は、かつての地域ホールを取り巻く周回コースへと入っていった。

　廃墟のアウトードロモには街灯ひとつ点いていない。ヘッドライトに切り取られた外側は闇の世界だ。アレッシオはコースの俯ふ瞰かん図ずを思い出しながら、フォーラに耳打ちした。

「最初のコーナーを曲がれば長い直線だ、そこで勝負をかける」

「わかったわ」

ハンドルをフォーラに任せて、窓から顔を出した。

赤い合成獣キメラの運転席から、あの男がこっちを見ている。ラ・ヴィオラで会った若い大道芸人、どこか自分を鏡で覗のぞき込むような気にさせるあの男だ。ヘッドライトを点けていないのは、おそらく夜よ目めが利くのだろう。指輪をはめた手でハンドルを握りながら、その瞳はアレッシオの動きを観察している。

車が最初のコーナーを曲がり、スピードが落ちた。

「フランチェスコだな」

銃口を向けて声を張り上げると、奴が微かに笑った。

「そうだ」

「一匹狼の貴様が、なぜフォーラを狙う」

「今はもう違う」

奴が左手でハンドルを切る。合成獣キメラの車体が眼前に迫ってきた。シートの上に降ろされ右手には、細工の施ほどこされた鉈なたのような武器が握られている。

「ならば貴様は何者だ」

「私は──オルマ・ロッサだ」

フランチェスコは誇らしげに言い放った。

その横顔めがけてアレッシオは発砲した。瞬時に動いた奴の鉈が銃弾を弾き返す。

オルマ・ロッサ！

殺し屋の魂たましいが刻まれた畏い敬けいを羨せん望ぼうの響き──それを奴が名乗ったのだ。

ならば、ここが俺の求めていた場所だ。

アレッシオはルーカのＭ９を連射した。頭の中をうねっていたどろどろの感情が、ひとつ残らず銃口から噴き出していくようだ。銀の弾丸が合成獣キメラのドアに面白いように大穴を穿うがつ。しかし人じん狼ろうの鉈がそいつを全て弾き返した。

凄すさまじい反射神経だ。二つめのコーナーに差し掛かると、合成獣キメラがさらに幅を寄せてきた。アクセルを緩ゆるめたフォーラが

ハンドルを切って奴の体当たりを避ける。

　人狼め、あんなシトロエンでアルファロメオに体当たりをしようというのだ。

　舐なめるな。

　前方で奴の車が右側に車線を移した。助手席のフォーラの間近に合成獣キメラの運転席が迫る。

「スピードを上げろ」

「だめ、こっちに近づけたくない」

　フォーラは瞳石ジエンマの命令を恐れているのだ。

「次のカーブを曲がったら運転を代われ」

　ルーカのＭ９を手渡した。

「横に並ぶ前に、そいつで前輪をバーストさせるんだ。できるか」

「や……やってみる」

「銃なんてのはだいたいでいい、一発で決めようと思うな」

　うねうねと蛇だ行こうしたコースを抜けて最後の直線に入る。ごくりと唾つばを飲むフォーラからハンドルを受け取った。合成獣キメラの左側にコースを取ってアクセルを思いきり踏み込んだ。

　助手席の窓から身を乗り出したフォーラが、片手で銃を構えた。

　華きゃ奢しゃな腕が伸びる先、白く細い指がＭ９の銃じゆう把はを握り締めている。

　荒れたアスファルトから送り込まれる振動が、わずかに和やわらいだ。

　炸さく裂れつ音おん！

　車の音にかき消されながら、そいつが立て続けに二発、三発──。

「当たったわ！」

　フォーラの弾んだ声とともに斜め前の赤い車が少しずつ右へ離れはじめた。前輪駆動の合成獣キメラが制せい御ぎょを失ったのだ。窓から首を出したフォーラが歓声をあげた。

「上手になったと思わない？」

「三発で当てりゃ上出来だ、俺より上う手まい」

　ふふっ、と笑ったフォーラが、硝しよう煙えんの匂いを立ち昇らせる銃口に鼻を近づける。

「火薬の匂いがするわ」

「その銃は持っていろ、あいつを殺すために必要だ」

「わかったわ、もう銀貨アルジエントにはなれそうにないものね」

　ドレスの胸もとに拳銃を差し込んだフォーラが、息を弾ませてハンドルを握る。行ぎよう儀ぎ悪くセンターを跨またいだ姿もさまになってきた。人じん狼ろうに瞳石ジエンマを奪われたこの状況ですら、彼女は楽しもうとしている。

「どうしたの？」

「怖くないのか」

「怖くなんてないわ、これがあればあいつをやっつけられるんだもの」

　アクセルを踏みながらルーカのＭ９を得意げに構えてみせる。

「アレッシオも笑って。悪魔デイアボロツォッポみたいに陽気に笑うのよ。そのほうが素敵だもの」

　緑柱石アクアマリーナの瞳が煌きらめく。地を這はうアレッシオには眩しすぎる輝きだった。

　もしもフォーラの背中に翼が生えていたら、きっとどこまでも飛んで行けるに違いない。それを大地に縛しばり付けているのは、仮面の男マスケリーノが生み出した瞳石ジエンマの指輪だ。

　口だけで笑ったアレッシオは、銃じゆう帯たいに吊つるしたM93Ｒの銃じゆう把はを握り締めた。

　俺が彼女を解き放つのだ。

　復ふく讐しゆうという名のショーケースを撃ち砕いて。

XV

　車の制せい御ぎよができなくなった。

あの骨董人形アンティークの銃弾をどこかに喰らったのだ。

「やむをえんな」

視界の先にはしばらく直線のコースが続いている。鋼鉄の鉈ベイダナを手に、フランチェスコは運転席のドアを蹴り飛ばした。

あっけなく外れたそれが、凄すさまじい勢いで後方へ飛び去っていく。衝撃音がしたのは連中の車に激突したからだ。

アクセルから足を離して、フランチェスコは赤い屋根によじ登った。弧こを描いたその上から背後を見渡す。わずかに後方をフォーラの車が走っている。助手席側のフロントガラスにひびが入り、窓枠ピラーが歪ゆがんでいるのが見えた。

次はどう出てくるだろうか。あの黒服は人間にしてはなかなか肝きもが据すわっている。こんなことならば、名前を聞いておくのだった。

「いや、たかが人間だ」

鼻で笑った。よしんば名乗りを受けたとしても、夜が明ける頃には忘れているだろう。

それよりもフォーラだ。

男を殺すように命じたにもかかわらず、フォーラはそれを果たさないばかりかフランチェスコに立ち向かおうとしている。人形が主人パドローネに逆らうなど聞いたことがなかった。

「あるいはそれが銀貨アルジエントの特性か……」

相手は銀貨アルジエントモドキなのだ。一ひと筋すじ縄なわではいかぬと思ったほうがいいだろう。

狼の視力が車内の鮮やかな金髪を捉えている。オルマ・ロッサを変える力を持ったフォーラとは、いったいどのような娘だろうか。それもすぐに分かることだ。

主を失った赤いシトロエンが減速する。どうやら馬力は向こうの車のほうがありそうだ。フランチェスコは車を捨て、フォーラを乗せた車の屋根に飛び移ろうとした。

掃そう射しゃ音おんが響いたのはそのときだ。

とっさに身をひねる。肩口に異様な熱さを感じた。

　これは銀だ！

　銀の銃弾が肩口をえぐったのだ。反応が遅れていたら心臓を直撃されるところだった。

　奴らは銀の武器を持っている。しかし悩んでいる時間はなかった。制せい御ぎよを失ったシトロエンが縁石に乗り上げようとしている。あとは横転するか建物に激突するかだ。

「ままよ！」

　叫んで闇夜に身を躍らせた。この暗闇でフランチェスコの姿をとらえるなど、人間には不可能だ。しかし──取りつく寸前に再び掃射音が鳴り響く。直撃はしなかったが、かすめた銃弾が太ふと腿ももの肉を引き裂いた。

　フランチェスコはアスファルトの道路に放り出された。

　受身を取って再び跳ね起きる。いったい奴はどこからこっちの動きを見ているのだ。

　前方で激しい衝突音が響いた。シトロエンがコンクリートの構造物に正面から突っ込んだのだ。そのさらに向こうに、目標とする車のテールランプが滲にじんでいる。

　エンジンの音が遠ざかっていった。

　フランチェスコは舌打ちして、石に覆おおわれた大地を蹴けった。

「迂う闊かつだった」

　甘く見ていた。相手をただの人間だとたかをくくったのだ。

　あの黒ずくめの男は尋じん常じような相手ではなかった。

　赤い車の運転席に、狼の反射速度についてくる怪物がいたのだ。そしてそいつは銀の弾丸を持っている！

　肩口と太ふと腿ももから焼けるような痛みが伝わってくる。食堂で傷つけられた脇腹もまだ癒いえてはいない。しかし、それがどうしたというのだ。フランチェスコは鋼鉄の鉈ベイダナを拾い上げた。

　黒服を喰い殺し、あの金髪の骨董人形アンテイークを我が物とする。

　そして変えるのだ。

　シルヴィオとともにオルマ・ロッサを！　この世界の裏側を！

　フランチェスコは胸のポケットから黄金のカプセルを摘つまみ上げた。

「忘れるな、人を喰うのが狼だ」

　カルメロに言った言葉を繰り返す。

　あの若者からもらった麻薬ドウローガが、どの程度のものだろうか。

　一息に飲み下すと、フランチェスコの体内で野生の熱がとぐろを巻き始めた。

　心臓が跳ねる。目に映る全てが黄金色に輝きだした。これはいい、どこかからギターの音色が聞こえる──これはロマの旋せん律りつだ！

　Ｃの旋せん音おんに身を委ゆだね、天を仰いだ。

　虚空に浮かんだ満月が巨大になる。満月だと？　そうだ、確かにあれは満月だ。

　血が沸き立つ。両腕が、両脚が、首筋から背中の筋肉が、全てがめりめりと音を立てて隆起していくようだ。

「大地の神よ！」

　フランチェスコは夜空に向かって吼ほえた。

　四し肢しを包むのは狼の体毛、その先端に鋭い爪つめ──しかし完全な人じん狼ろうになったわけではない。迸ほとばしる闘争心が、フランチェスコを人と獣の中間のような存在に変えたのだ。

　かき鳴らすラスゲアート！

　アスファルトを蹴り、夜空に身を躍らせる。

　今ならば、この爪と牙が全ての敵を葬ほうむり去るだろう。

　満月を背にしたフランチェスコは、雄お叫たけびとともに暗闇の廃はい墟きょに飲み込まれていった。

＊

　ヘッドライトが闇を切り裂く。

フォーラはスピードを緩ゆるめずに車を走らせている。ジュリアスプリントはアウトードロモの二週目に突入していた。

赤い合成獣キメラは最後のコーナーを曲がり損ねて、地域ホールのゴミ捨て場跡に激突したようだ。窓から身を乗り出して背後を窺うかがっても、フランチェスコの追ってくる気配はない。

「そのままだ、もう一周してくれ」

アウトードロモを出て市街地に敵を引き込むべきか、それともここで決着をつけるべきか。アレッシオが選んだのは後者だった。この暗がりで夜よ目めの利きく敵と戦うのは危険極まりないことだが、瞳石ジエンマを握った人じん狼ろうを逃がすわけにはいかなかった。

手の中には圧倒的な火力を誇るM93Ｒがある。奴に当てた手ごたえはあった。問題はそれが致命傷であったか否かだ。

「奴が行動不能になっていればいい。しかし待ち伏せていたらどうする……」

「来るわ！」

フォーラが叫んだ。

「どこだ」

「上！」

窓から身を乗り出す。黒々とそびえ立つ地域ホールの屋上から、何かが身を躍らすのが見えた。月光を受けた鋼鉄の鉈ベイダナがぎらりと煌きらめく。

フォーラがハンドルを切った。ジュリアスプリントが悲鳴を上げる。窓枠のすぐ外で硬質の衝撃音が響き、獣の匂いが鼻先をかすめた。

躱かわした。奴の姿は後方の闇に飲み込まれている。

「思ったより元気だな」

「追いかけてくるわ、すごいスピードよ」

「すごいな、奴が見えるのか」

運転席から身を乗り出すと、アウトードロモの車道を走る獣の前足がちらりと見えた。建物の影が途切れ、月明かりが奴の姿を映し出す。

「化け物め」

　それは人狼というよりも半獣人だった。十八世紀風の衣装は両肩と膝から下が破れ落ちている。そこからは毛むくじゃらの手足が覗のぞいていた。あの足が合成獣キメラのドアを蹴り飛ばし、こっちの助手席に命中させたのだ。車の中央にいたフォーラに怪け我がはなかったが、助手席の窓枠は曲がり、ドアが外れかけている。

　月明かりに照らされた人狼は、野太い四し肢しを凄すさまじい速さで振りながら、時速八○キロのジュリアスプリントに追いつこうとしている！

　車の揺れが激しい。片手で狙いを定め、相手が近づいてきたところで引き金を絞しぼった。

　Ｍ93Ｒの三点射が掃そう射しゃ音おんを響かせる。

　狼は横っ跳びにそいつを躱かわした。跳躍すれば的まとになることを奴は学習したようだ。

　それにしても、あの太い手足が生み出すスピードと反射神経はどうだ。やはり人狼は化け物だ。毛むくじゃらの腕に一撃でもされようものなら、そのときは即死と思っていいだろう。

　コーナーを曲がる。

　車が減速すると、後方にいた人狼が一気に追いついてくる。

　アレッシオは空いた左手でＭ84を構えた。こいつは鉛の弾丸だ。

　引き金を絞しぼる。人じん狼ろうはまた左に避けると見当をつけて、そこにＭ93Ｒの三点射をぶち込んだ。

　人狼は鉛の弾丸を避けなかった。

　頬に命中して顔の肉が弾けるが、それでも走るのをやめようとしない。

「見分けやがった！」

　奴はこっちのしていることを読んだ上で、あえて銃弾を喰らいやがったのだ。

「殺せ！　そこの黒服の喉のどを裂け！」

　顔面の上半分を吹っ飛ばされたフランチェスコは、瞳石ジエンマを月光に翳かざして叫んだ。

　同時に、フォーラが小さな悲鳴をあげる。車が大きく横にぶれた。

　絶対の命令が瞳石ジエンマから送り込まれてきたのだ。彼女の円筒シリンダは必死になってそれに抗あらがおうとしている。懸けん命めいにハンドルにすがりつき、アレッシオを見上げて微ほほ笑えんだ。

「大丈夫よ、アレッシオ」

　それはヴェネツィアで何度も聞いた台詞せりふだった。いまはその声が震えている。瞳石ジエンマと円筒シリンダのせめぎ合いが、フォーラの歯車を空転させている。

「私の世界はもっと広いわ、狼なんかの好きにさせない」

　その声は悲鳴に近かった。

「糞がストロンツオ！」

　フランチェスコに向けて銀の弾丸をばら撒まいた。奴は走りながら両足でステップを踏み、踊るようにそいつを躱かわした。吹き飛ばされたかに見えた顔は、まだ血まみれでこそあったが端正な若者の顔に戻っている。あれが人狼の再生能力なのだ。

　しかし、次は奴を殺す。

　そうしなければフォーラの世界があの怪物に閉じ込められてしまうのだ。

『僕に魂たましいはあるのでしょうか？』

　ノヴェラの問いが頭をよぎった。

　フォーラの円筒シリンダには人間と同じ魂が宿っている。それはノヴェラも同じだ。そして、彼らを人間でなくしているのは瞳石ジエンマの指輪だ。カリオストロだのジャケ・ドローだのというろくでなしは、人形を人間にしないために瞳石ジエンマという呪いを埋め込んだのだ。

　緑柱石アクアマリーナの呪いが、フォーラの欲求を、フォーラの物語を書き換えようとしている。

　そいつを仕掛けているのは、あの人狼だ。

　撃ち砕く！

　そう誓って銃口を窓の外に向ける。

　ハンドルにしがみつくフォーラの胸もとで、弾丸パロツトラのネックレスが躍っていた。

　　　＊

　車の動きがおかしくなった。

　おそらくは、瞳石ジエンマの命令が功を奏したのだ。

　狼の爪つめがアスファルトを嚙かむ。走りながらフランチェスコは次の手を考えた。頭を撃たれた拍子に一瞬だけ思考が飛んでしまったが、もう大丈夫だ。

　むしろフランチェスコはついているのだ。錯さく乱らんのまま指輪の命令を下したことが、かえって吉と出たのだから。

　いい気分だ。肩の傷も、腹の傷も痛くはない。

　黄き金ん色の満月は頭上に輝いている。

「停まれ、フォーラ！」

　緑柱石アクアマリーナの指輪を車に向けた。

　あの中にフォーラがいる。

　そう……人じん狼ろうと人形の宴うたげはこれから始まるのだ！

　車の速度がさらに落ちた。

　銃を持った殺し屋の狙いも、わずかにくるい始めたようだ。いまが攻め時であることに疑いはなかった。

「さあ、私のもとへ来るのだ、フォーラ」

　フランチェスコは車の右側に身体を移して一気に跳躍した。これは賭かけだ。この位置ならば、銃の化け物に私は見えないはずだが……。

　掃そう射しや音おん！　やはり見えていなくても奴には俺が分かるのだ。

　━構うものか。

　右の耳たぶを吹っ飛ばされた。顔面に当たらなかっただけでも幸運だ。渾こん身しんの力で車のトランクめがけて鋼鉄の鉈ベイダナを振り下ろした。スチール材をバターのように切り裂いて、真っ赤なトラ

ンクリッドに刀身が打ち込まれる。

　そのまま車の後席に手をかけた。

　これでいい。さっき並んで走ったとき、車内にあれを見つけたのだ！

　後席の窓を叩き割ると、掃射音とともに銀の弾丸が飛んでくる。窓枠を鉄棒のように使い、そいつを紙かみ一ひと重えで躱かわす。こぼれた窓ガラスの破片を握り、運転席めがけて投げつけた。

　掃射音が途切れる。いまだ──後部シートに置かれた鞄かばんに手をかけた。

　そこに入っていたのは銀のバンドネオンだった。

「見つけたぞ！」

　手を触れるだけで胸にむかつきがこみ上げてくる。銀製品と狼の肉体の相性は最悪だ。

　顔を上げ、一瞬で車内の様子を確認した。

　運転席に黒ずくめの殺し屋が、助手席と運転席の間に金髪の少女がいる。

　──これが、御伽話フオーラか！

　フォーラはハンドルを握ったまま、こちらを睨にらみつけている。端正な面おも差ざしを苦しげに歪ゆがめ、額にはいくつもの汗が玉を結んでいる。骨董人形アンテイークは汗をかくのだ。

　少女と目が合ったのは、ほんの一瞬だっただろう。しかしフランチェスコの黄金の瞳は、同じ色の美しい巻き髪と、意志の強そうな少女の面差しを網もう膜まくに染み込ませていた。

　美しい顔だった。大きく開かれた緑柱石アクアマリーナの瞳は、見る者の心すら吸い取ってしまいそうだ。この人形の力が自分とオルマ・ロッサを変えるのだ。その力を正しく使うことができれば、この大地に狼の摂せつ理りを取り戻すことができる。

　人喰いは狼の本能だ。ふと、カルメロという若者の顔が浮かんだ。フランチェスコは数百年前に失った家族を、この手に取り戻すことができるのかもしれない。

　それを思えば、忌いま々いましい自動機械人形オートマタすらいとおしく感じられた。

　窓枠にしがみつきながら、鉈なたを打ち込んでいたトランクリッドを片手で引っぺがした。再び掃そう射しゃ音おんが響く。紙のようなトランクの扉でも、飛来する銃弾の軌道をわずかに歪ゆがめられれば充分だ。貫通した銃弾が心臓を外れ、肩の肉をえぐった。左肩が焼けるように熱い。

　人間め！

　トランクリッドを投げ捨てたフランチェスコは、構わずにバンドネオンを奪い取った。

「分かるかフォーラ、私が主人パドローネだ！」

　すぐにその支配を明らかなものにしてやる。

　銃声が響く。

　ガラスの破片が飛び散り、車のボディに大穴が空いた。

　本能だけで身体が動く。フランチェスコは自分がどうやって弾丸を掻かい潜くぐったのかも分からなかった。

　この火力はまるで小銃だ。一撃でも頭に喰らったら即死だろう。

　カルメロの、シルヴィオの顔が脳裏をよぎる。あるいは遥か昔に喪失したロマの母親だったかもしれない。

　それでも、この戦いには命を懸かける価値がある。

　あの黒服の化け物じみた銃撃にこの身を晒さらしてでも、戦う価値があるのだ！

　弾切れを起こしたのか、黒服の殺し屋が弾だん倉そうを交換する。

　好機だ。直線コースを疾走する車の屋根によじ登ったフランチェスコは、鋼鉄の鉈ベイダナを屋根に打ち付け、その柄に脚を絡めて固定した。

「フォーラに大地の神の祝福を」

　銀のバンドネオン━まだロマだった頃、この楽器に触れたことがある。遠い昔と、来きたるべき未来に思いを馳はせながら、フランチェスコはバンドネオンの蛇腹ベローを動かしはじめた。

　　　＊

「グレゴリオ聖歌！」

　祝福を伝えるはずの音楽が、身の毛もよだつ旋せん律りつを屋根の上で奏かなではじめた。

　奴が弾いているのだ、ノヴェラの遺のこしたバンドネオンを！

　人じん狼ろうのフランチェスコは、バンドネオンでフォーラの意思をねじ伏せるつもりだ。フォーラの翼を手た折おり、己の描いた枠の中に閉じ込めようとしている。ヴェネツィアにいた頃の俺のように、あるいは仮面の男マスケリーノやペルラのように！

「いや、嫌よ……やめてノヴェラ！」

　フォーラがハンドルを左右に切り返した。ジュリアスプリントがアスファルトを滑り、激しい蛇だ行こうに車体が軋きしみを上げるが、それでもバンドネオンの旋律は鳴りやまない。この揺れでは銃で奴を狙うことが出来ない。シートの上でもみくちゃにされたアレッシオは、フォーラの手の上からハンドルを押さえつけた。

「つかまれ、フォーラ」

　思い切りブレーキを踏み込んだ。

　タイヤが悲鳴を上げ、上体がダッシュボードに激突する。車が停まった。なのに人狼は屋根から落ちてこない。天井に突き立てた鋼鉄の鉈ベイダナにしがみついているのだ。

　フォーラの胸もとで踊る弾丸パロツトラのネックレスをつまみ上げた。

「フォーラがこいつをつけている限り、俺たちは一緒だ」

「アレッシオ……」

　フォーラの声には不安が滲んでいる。そいつを消し去るには人狼を殺すしかない。

　また車を走らせる。

　どうあっても奴を振り落とさなくてはならない。フォーラの髪の隙間からのぞいた速度計が、ふたたび六〇キロまで上昇する。

　外れかけた助手席のドアから物悲しい旋律が入り込んできた。

「下へ手た糞くそがそいつを使うんじゃねえ！」

　天井に向けて機関拳銃マシンピストルをフルオートマチックで掃そう射しやした。

　三発、六発──当たっているはずなのに、奴の肉体に銀の弾丸をめり込ませているはずなのに、まるで祝福にそっぽを向かれたかのようにグレゴリオ聖歌は途切れない。

「頭を狙って」

　フォーラが叫んだ。

　一撃で脳みそを吹き飛ばしてやる。目標は視界の外だが、右手の怪物を信じて狙いを修正する。引き金を絞しぼろうとした瞬間、身体のどこかに衝撃を感じた。畳みかけるように味わったことのない激痛が襲いかかってくる。

　右足だ──視線を落としたアレッシオは、自分の足を襲ったものの正体を見た。

　それは、銀の細管だった。

　フォーラの首筋から伸びた細管が三本、アレッシオの脹脛ふくらはぎに突き刺さっている。あのバンドネオンが、ついにフォーラの機構を回しはじめたのだ。人じん狼ろうを倒すために作られた、あの殺さつ戮りくの機構を！

「いやだ、嫌……」

　闇に包まれたアウトードロモに、グレゴリオ聖歌が響き渡る。

　ハンドルから手を離したフォーラが、這はい出してくる細管を両手で握り締めた。必死にそれを押さえつけようとしている。

　その間にも次から次へと、新しい細管がフォーラの関節から這い出してくるのだ。

　バンドネオンの旋律には、フォーラの意思をねじ伏せる強制力がある。つまりノヴェラはフォーラをコントロールするための存在だったのだ。

　フォーラを支配する二つの切り札、瞳石ジエンマとバンドネオンの双方が人狼の手に落ちた。

「逃げて……アレッシオ！」

「まだだ！」

　フォーラを奴の好きにさせるものか。

　天井に向けて機関拳銃マシンピストルを乱射する。轟音とともに

ジュリアスプリントの天井に拳ほどの穴が無数に穿うがたれた。柔らかい銀の弾丸が、ひしゃげながら屋根のスチール材を貫いていったのだ。そのあちこちから人狼の血液が滴したたり落ちてくる。

　全弾を撃ちつくしたM93Ｒのスライドが後退した。なのにまだ、演奏は鳴り止まない。

　フォーラの首がぱっくりと開いたのはそのときだ。

「いやあ！」

　悲鳴を上げたフォーラが自分の頭を押さえつける。再び、右足に激痛が走った。

　意識が遠のくような激痛──またしても細管だ。管の先端についた銀の針から、水銀がアレッシオの体内に流し込まれている。

「ノヴェラが言っていたのよ。魂たましいは自分の物語を紡つむぐためにあるんだって。だったらこれは誰の物語なの？」

「奴の好きにはさせねえ」

　だが、どうすればいい？

　激痛が吐き気と眩暈めまいを引き連れて襲いかかってくる。朦もう朧ろうとする意識の中、アレッシオは右手の武器をM84に持ち替えた。

　炸さく裂れつ音おんが響いた。

　アレッシオはまだ引き金に指をかけていない、撃ったのはフォーラだった。

　助手席を見ると、フォーラの首は細管の圧力で宙に浮いて、その切断面から無数の細管が這い出してくるところだった。フォーラは自分の首の中にＭ９の銃口を突っ込んで、引き金を引いたのだ。

　体内の発バ条ネが、歯車が砕けてフォーラの身体が痙けい攣れんを起こす。

「やめろ！」

　叫ぶ声に二度目の銃声が重なった。

　いま円筒シリンダが砕けたら、それでフォーラの物語は終わりだ。

　ふたたび部品の砕ける音がして、ずたずたに切り裂かれたアレッシ

オの脹脛ふくらはぎから細管が抜け落ちた。すでに右足の感覚はほとんどなくなっている。

　ハンドルを押さえつけたまま、アレッシオはフロントガラスの正面を見た。ヘッドライトに切り取られた視界だけでは、どこがカーブなのか見当もつかない。拳銃を持つ手は激痛にがたがたと震えている。

　銃声がした。首の外れかけたフォーラは、まだ自分を撃っている。それすらも今となっては虚しい抵抗に見えた。無数の細管がルーカのＭ９にも絡み付いていたのだ。バンドネオンと瞳石ジエンマのくびきが、フォーラの自我すらも奪おうとしている。

「そいつを返せ、俺が撃つ」

　フォーラの手から取り上げた銃を、天井に向けてぶっ放した。すぐに全弾を打ち尽くし、スライドがホールドオープンする。またしてもバンドネオンの旋せん律りつが激しさを増した。これだけ銀の弾丸をぶち込んでやったというのに、屋根の上の人じん狼ろうはまさしく化け物だ。

「アレッシオ……アレッシオ！」

　細管をつかんだフォーラが名前を呼ぶ。白銀の光に包まれたフォーラには、こっちの姿が見えていないようだ。

「ここだ、まだ諦めるな」

「私、王子様に愛していると言ってもらえたの。だから名前も言葉も思い出せたのに」

　フォーラの声が悲痛に震える。

「なのに、なのにどうしてこんなことをしているの」

　グレゴリオ聖歌に操られた細管が、先端の銀の針が、いっせいにアレッシオの心臓に狙いを定めた。獲物の体内に銀の針を打ち込み、心臓に直接水銀を流し込む──それがフォーラの円筒シリンダに刻まれた戦闘の楽譜スコアなのだ。

「ほんと、自分が嫌いになりそう」

　両手で必死に細管を握ったフォーラが、べそをかきながらそう呟く。まるで暗い森の奥に迷い込んだ幼子のように、その声はか細く震えていた。

「王様の呪いは、まだ解けてなかったわ」

「ふざけるな、お前はフォーラだ！」

　人形の円筒シリンダは人間の脳に等しい。

　だからフォーラの魂たましいは、バンドネオンの旋律を拒否し続けているのだ。

　それなのに――。

　爆音の中、グレゴリオ聖歌が無情に響き渡る。

　それなのに、そこにはただひとつ、フォーラの自我を許さない機構が仕組まれているのだ。

　たったひとつだけ、人形と人とを分かつもの。

　犬の糞くそのような悪臭を放つ、おぞましくも唾だ棄きすべき機構。

「――瞳石ジエンマ！」

　銀色の細管の間に青い煌きらめきが見えた。フォーラの意思とはうらはらに、緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマは細管の目標をアレッシオの左胸に定めようとしている。

　絶望の二文字が脳裏をよぎる。

　だが、まだだ。

　この物語をここで終わらせるわけにはいかない。

「フォーラの主人パドローネは私だ」

　屋根の上から声がした――人狼め！

「お願い、私の円筒シリンダを撃ち抜いて」

「折れるな、いま自由にしてやる」

　フォーラの最後の自我が、アレッシオに決着をつけろと訴えている。

　たった一発でいい。ただ一撃、奴の脳みそを吹き飛ばせば済むことだ。

「ノヴェラが言ったの――魂たましいのある人間は、なすべきことをしなくてはならない」

「やめろ、こいつはもうお前ひとりの物語じゃねえんだ！」

　最後の頼りはやはりＭこいつ84だ。

　大穴の空いた天井に向けて、さらに引き金を引く。

　鉛なまり弾だまが人じん狼ろうを殺せなくても、バンドネオンを破壊できればいい。

　当たれ、鉈なたの刺さっているあたりに奴はいるのだ。

　一発、二発、三発──もうすぐだ、もうすぐフォーラを自由にしてやれる！

　それなのに、呪いの聖歌は鳴り止まない。

「どうなってやがる」

　これを撃ち尽くせば、もう予備の弾だん倉そうはない。

　これまでに十三発、残ったのは薬室の一発きりだ。

「さよなら」

　フォーラの声がした。

　細く、囁ささやくような声。それは昨夜、タクシーの中で聞いたノヴェラの声と同じだった。

「フォーラ！」

　手を伸ばすが、間に合わなかった。

　助手席のドアに体当たりをしたフォーラは、留め金の外れかけたドアと一緒に車の外に飛び出した。

　真っ赤なドアが路上を跳ねる。骨董人形アンティークの軀く体たいはドアよりも遥かに軽くて脆もろいのだ。

「フォーラ！」

　左足でブレーキを踏んだ。助手席から身を乗り出すと、黒いドレスに包まれたフォーラの身体がアウトードロモのアスファルトに打ち付けられ、砕け散るのが見えた。

　さよなら。

　たった一言を残して、フォーラはアレッシオの手の中から滑り落ち

てしまった。

　右足が疼うずく。

　漂白されてゆく意識の中で、フォーラの水銀を流し込まれた右足だけがずきずきと痛い。

「馬鹿な、あり得んことだ。糞くそったれ以下の自動機械人形オートマタが自分から壊れるなど！」

　頭上の人じん狼ろうが怒号を上げた。

　その声は水中で発した唸うなりのように濁にごっていた。

　バンドネオンと鋼鉄の鉈ベイダナを手にしたフランチェスコは、ジュリアスプリントの屋根から飛び降りると、路上のフォーラに駆け寄った。

　奴の動きも鈍くぎこちない。破れた衣服をまとったフランチェスコの全身は、血にまみれていた。くぐもった声は、血で気道が塞ふさがれているせいだろう。

「フォーラ！　なぜだ、フォーラ！」

　アスファルトに血の足跡オルマ・ロッサを転々と遺のこしながら、百メートル以上離れたフォーラのもとへ駆け寄ろうとする。瀕ひん死しのフランチェスコは怒りくるっていた。

「なぜ私の物にならない。お前のために、こんなにも銀の弾丸を浴びたというのに！　なぜだフォーラ、やはりロマの言うことは聞けないのか！」

　狼の叫びが谺こだまする。

　アレッシオはその背中に銃口を向けた。

　破壊されたルーカの死体を思い起こせば、こいつを許せないことは明白だ。しかしこの火力で人狼を仕留めることはできない。

　半壊したフォーラが道の外れに横たわっている。その向こうには、先ほど大破した合成獣キメラの姿があった。人狼はゆっくりとフォーラに歩み寄ろうとしている。

　運転席に戻り、ハンドルにしがみついた。

　──物語の幕引きはまだだ！

　アレッシオはシフトノブを戻し、生きている左足でクラッチをリリースしながら、感覚のない右足をねじ伏せるようにアクセルを踏んだ。ハンドルを大きく切って、右回りに車の向きを変える。

「待っていろ、フォーラ！」

　ジュリアスプリントが腹の底に響くような爆音を上げた。

　何があっても奴にフォーラは渡さない。タイヤが悲鳴を上げ、フォーラの身体に手を伸ばそうとする人じん狼ろうの姿がフロントガラスの向こうで大きくなる。

　人狼が振り向いた。

　手にしたバンドネオンを投げつけてくる。フロントガラスが粉々に砕け散った。

　血まみれの両腕が、アルファロメオの突進を受け止めた。だがこいつはただの車じゃない、仮面の男マスケリーノが遺のこした銀の戦車だ。フロントバンパーには銀の刃が埋め込まれている！

「貴様！」

　鈍い衝撃が伝わってきた。

　銀の刃は奴の太ふと腿ももに食い込んでいる。ボンネットの幅があるので振り回した鉈なたも届かない。

　獣けだものの黄金の瞳が、怒りに我を忘れている。

　フロントガラスはもうない。遮さえぎるもののない視界でフランチェスコを睨にらみつけながら、左足でアクセルを踏みこんだ。

　ジュリアスプリントが悲鳴を上げる。片手を離したフランチェスコは鉈を振り上げてボンネットを破壊した。アレッシオの両足がダッシュボードに押し潰つぶされる。

　──爆発音！

　その瞬間、鈍い音が響いてボンネットの下から一斉に炎が吹き上がった。

　地を這はった炎は合成獣キメラに吸い込まれてゆき、やがて大きな火柱を吹き上げる。あの合成獣キメラから漏れたガソリンが車を浸していたのだ！

　紅ぐ蓮れんの炎に包まれたジュリアスプリントが前進し、フラン

チェスコの左脚を切断した。

　炎に怯おびえたのか？　違う、わざと斬らせたのだ。

　左脚を失ったフランチェスコが、炎上したボンネットに這い上がってきた。

　炎に包まれたまま、鋼鉄の鉈ベイダナを振り上げる。

　アレッシオのM84はその眉み間けんをとらえている。

「撃ってこい！」

　フランチェスコが叫ぶ。

　殺やれる──いや、防がれる。

「フォーラ！」

　右手が走った。

　アレッシオの脳がそれを認識するより早く、フランチェスコの眉み間けんから照準が外された。

　薬室に残った最後の一発、その引き金を絞しぼる。

　──銃声！

　鉛の弾丸が、人じん狼ろうの左薬指にはめられた指輪を捉えた。

　台座が砕ける。緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマが二つに割れて、夜のアウトードロモに飛び散ってゆく。同時にフランチェスコの周囲が銀色に輝いた。

　アレッシオはショーケースを開いたのだ。

　もはや、彼女を縛しばる呪まじないはどこにもない──フォーラは無限だ！

　フォーラの身体がふわりと浮いて煌きら々きらと輝く銀の光が次々と立ち上る。銀の細管にフォーラの魂たましいが宿ったのだ。

　花びら状に広がった細管の光が、フォーラの背にひらひらとまとわりついてゆく。

　それは白銀の翼だった。

　光り輝く翼の中心で、フォーラの青い瞳がいたずらそうに煌きらめ

いている。

　気配を察したフランチェスコが、振り向きざまにフォーラめがけて拳を突き出した。

　アレッシオはアクセルを踏んだ。

「グアアアッ！」

　人狼がバランスを崩す。それでも奴の拳はフォーラの腹部を貫通した。

　フォーラの背中から突き出したフランチェスコの拳が、銀色に輝く円筒シリンダを握っている。まだ物語は終わっていない！

「私の蜜みつをあげるわ」

　光の翼が一斉に広がった。

　白銀の輝きが炎に包まれた狼にまとわりつく。

　半壊した軀く体たいから解き放たれた無数の細管が、フランチェスコの肉体に次々と打ち込まれた。その心臓に直接水銀を流し込むために！

　ボンネットの上で狼が吼ほえた。

　奴の身体を焼き焦こがした炎が、火勢を増して車内になだれ込んでくる。

　両足はひしゃげたダッシュボードに挟まったままだ。炎がアレッシオを包み込んだ。

　まだだ、まだ物語は終わらない。

　燃え盛る車の中、アレッシオは壊れかけのフォーラを見つめた。

　己の力で輝きながら、フォーラもまたアレッシオを見つめている。

　少し首をかしげるようないつもの仕草で。その胸もとには弾丸パロツトラのネックレスが輝いている。

　ああ、フォーラは美しい。ここで最後まで彼女を見ていよう。

　断だん末まつ魔まの悲鳴とともに、フランチェスコの鉈なたが振り下ろされる。

──俺たちは家族パロツトラだ。

アレッシオは親指を突き立てた。

白銀の円筒シリンダから解き放たれたフォーラの姿を網もう膜まくに灼やきつけたまま。

xvi

教会のアーチを包むように、ピンクの薔ば薇らが咲き乱れている。

風はスメラルドの海を渡り、私の周りを優しく通り抜けていく。

ここはサルディーニャの丘。

樹に吊るされたブランコが風を受けて揺れている。

その向こうには、白い屋根の教会が太陽の光を受けて輝いている。

狭い聖堂の参列席に座っているのは、気の置けない仲間たち。

リッカルドがいる。ルーカも、リタも、ニコロもいる。

私は彼らのお姉さんなのかしら。それとも妹なのかしら。

隣のノヴェラに聞いてみると、いつもの問いが戻ってきた。

「フォーラは僕の何？」

「妹よ」

ノヴェラはいつだって、そればっかり言っている。

けれど私の手を離したノヴェラの瞳は、とても優しい色をしていたわ。

「さよなら」

「ええ、さよならノヴェラ」

あなたの物語を聞きたかったけれど、私はもう行かなければならないの。

「終わりの時間です」

カーテンの陰に隠れたペルラ姉様がそう言っている。

終わりはちっとも怖くないわ。

私の円筒シリンダは不滅の脳みそでなくなるのだから。

水銀の暗闇に戻ることも、誰かが私の物語を書き換えることもないのだから。

残念ね、仮面の神父様。

あなたの指輪をなくしてしまったの。

けれど、あなたの復ふく讐しゆうも果たされたのよ。もうその仮面は要らないわ。

祝福して、私の魂はここにあるのだから。

さあアレッシオ、目を開けて。

東の果てから夜明けが訪れようとしている。

涙が出そうなほど眩しくて、胸の奥をえぐるような夜明けが。

なにをしているの、アレッシオ？

しっかりして、そんなところで寝ていたら狼に食べられちゃうわ。

からかうように囁ささやいて、私は逞たくましい身体にすがりつく。

首から下がった弾丸のネックレスを玩もてあそび、無精ひげに頬擦りする。

熱いわね。

車が燃えているのだから仕方がないわ。

でも、心配することはなにもないのよ。

物語が終わるには、まだほんの少し時間があるから。

あと三分で物語が終わるなら、その三分を三百年にすればいい。

扉を開けばそれができるようになるわ。

気がついた？

誓ちかいのキスをしてもいい？

同じひとりぼっちなんだから、家族になればいいのよ。

だからわたしたちはここにいる。

狼も復ふく讐しゆうも瞳石ジエンマもない、きらきらした御お伽とぎ話ばなしを紡ぐために。

「それから、王子様と娘がどうなったか覚えてる？」

「結ばれたのさ、末永く幸せに」

その声に震えたのは、きっと私の魂たましいだ。

手を繫つなぎ、唇を重ねる。

私の姿を映したアレッシオの瞳が語るのは、間違いのないただ一つの物語。

──この話を聞いた人も、話した人も、地獄に落ちることは決してないはず。

xvii

旧地域ホール周辺には、黒煙と消化剤の臭いが立ち込めていた。

水浸しになったアスファルトが投光器と回転灯の光に煌きらめき、波立った水溜りには申し訳なさそうに月光が揺らいでいる。

パオロは水面みなもの月を踏み潰して警察車輌ガゼツラを降りた。

ひどい臭いだ。焦げた車と人体の臭いがガソリンの刺激臭でブレンドされている。鼻と口を帽子で塞いだパオロは真っ黒になったアルファロメオに近づいた。消化剤にまみれた事故車輌は見る影もなくひしゃげており、車種すらもにわかに判別しえなかった。

助手席のドアからひと通りの状況を確認したパオロは、黙って首を振った。

未明のスラムで発生した自動車炎上事故については、周辺住人の目撃証言もほとんどなく、その詳細は明らかになっていない。事故車は二台あり、もう一台の改造シトロエンは、数メートル先のゴミ捨て場で同じように炎上していた。

ここはスラムのギャングどもが『アウトードロモ』などと言って、改造車のレースをしている場所なのだ。事実、事故車の一台は子供たちが乗り回している改造車だった。どうやら先に事故を起こしたのは改造シトロエンで、その車体からガソリンが流れ出したところにアル

ファロメオが突っ込んできたというのが、現場から推察できる事故のあらましだ。

　事故車の周りで交通課の警官たちがだらだらと現場検証をしている。どうせギャングの悪ふざけなのだと、まともに取り合うつもりもないようだ。街の裏側で起きた事件のほとんどが、こうしたぞんざいな扱いのまま未解決の棚に放り込まれてゆく。

　パオロが管かん轄かつ外がいの事故現場を覗のぞく気になったのは、事故車の車種が気になったからだ。

　アルファロメオ社製ジュリアスプリントＧＴ□□御お伽とぎの国ベルモントに似つかわしくないこの車は、昨夜、あのマフィオーゾが乗っていたクーペと同じだった。

　めちゃくちゃに潰つぶされた車のフロントに二つの焼死体がある。ほとんど炭になっているが、どちらも長身の男だった。片方はボンネットの上に仰向けで転がっており、もう片方は運転席のダッシュボードに足を挟まれたままハンドルを握っている。その首を抱きしめるような格好で、焼け焦げた自動機械人形オートマタが助手席から軀体くたいを伸ばしていた。

「だから言ったじゃねえか……」

　続く『馬鹿野郎』を飲み込んでウィスキーの小こ瓶びんを開ける。焼死体の足元に焦げた携帯酒瓶ヒツプフラスクが転がっていた。安酒を口の中に放り込むと、ラフロイグの強烈なピートが鼻の先に抜けていくようだ。

「こいつは結局、どういう事故になるんだい？」

　若い警官を捕まえると、そいつは持って回ったような理屈を並べたあとに、麻薬中毒者ドウロガードの暴走事故として処理されることになりそうだと結んだ。

「人形の円筒シリンダはどこだ」

「焼け焦げていますよ」

　警官が指差したあたりを覗き込む。人形の軀体から焼け落ちた黒い筒状の物体が、運転席の焼死体の懐に挟まっていた。すぐ隣には見覚えのある古い拳銃が落ちている。

　首を振ったパオロはボンネットの焼死体を調べることにした。

「こいつの指輪は、最初からこうだったのか」

「ええ、爆発のショックで外れたのでしょうかね」

　ボンネットに転がった焼死体は、両手の薬指に指輪をつけていた。

　右の指輪は大粒のスメラルドで、この男が堅気でないことをうかがわせた。左の指輪には台座しかなかったが、おそらくその上には、右手に負けぬほど大粒の宝石が乗っていたのだろう。

「あいつが死んだのか？」

　子供の声がした。

　振り返ると、ぼろのジャケットを着た小柄な少年がいつの間にかパオロの隣にいた。この小僧には覚えがある。昨夜、この焼死体の使い走りをしていたスラムの浮浪児だ。

　ぼろ服の少年は、焼け焦げた運転席の拳銃をじっと見つめている。

「刑事さん……あいつが死んだのか？」

「子供が見るもんじゃねえよ。おい、警戒責任者は何やってんだ」

　手近な奴を怒鳴りつけると、慌てた若い警官は浮浪児の肩を押さえつけて現場から連れ出そうとした。おそらくはあの焼死体に面倒を見てもらっていたのだろう。警官に引きずられながらも、子供の目は呆ぼう然ぜんと車の中を見つめている。

「ノエル、来いよ」

　遠くで別の子供の声がした。現場を遠巻きにしていた十人近い子供たちの輪に、ノエルと呼ばれたぼろ服の少年が飲み込まれる。遠目に分かるほど大きな鞄かばんを持った子供たちは、やがてぞろぞろとスラムの建物の間に消えていった。

「あいつらはなんだ」

「新しいスラムの住人です。あの連中のことですよ、バンビーニっていうのは」

「そうかい……」

　小こ瓶びんを傾ける。ラフロイグとは比べ物にならない安酒で喉を洗い、パオロは呟いた。

「いけねえなぁ、子供ってのはもっと明るいところで遊ぶもんだぜ」

　宵よい闇やみがわずかに薄くなる。ものの五分もしないうちに警官

たちが集まってきた。

「我々は撤てつ収しゅういたします」

「撤収だと、まだ遺体の搬送も終わってないんだぞ」

「署長からの指示がありまして、あとは教きよう煌こう庁ちようの人間が検分をするそうです」

「教きよう煌こう庁ちよう？　坊主がなんの用だっていうんだ」

「私どもには分かりません、それから今日のことはご内密にお願いします」

「なんだと」

「上からの命令です、お願いします」

　敬礼をした警官たちが、まるで事故現場に留まることを憚はばかるように次々と警察車輌ガゼツラに乗り込んでゆく。

「警部も乗っていかれますか」

「結構だ、これから教会に寄らなきゃならねえんでな。その鞄かばんを取ってくれ」

　警官が皮の鞄を取ってよこす。四百万ヴィンチと円筒シリンダの入った鞄が、ずっしりと手の中に重かった。

　エンジンの音がして、回転灯を消した警察車輌ガゼツラが引き上げてゆく。車の音が消えると、ひと気のなくなった現場には警備の警官と事故車輌だけが残された。

　空が白み始めている。

　消化剤の臭いがする旧地域ホール前に静寂が戻ってきた。

「いかれてやがるよ、この街は」

　吐き捨ててパオロは歩き出した。

　こんな街にだけは赴ふ任にんしたくないものだ。

　焦げた車と人体の匂いが鼻の奥にこびりついて、しばらくは取れそうにない。

　老朽化した建物の狭間に明け染める空を見上げながら、ヴェネツィ

アの麻薬捜査官は小こ瓶びんのウィスキーを一息に流し込んだ。

＊

「おめでとう、退院だ！」

　大柄の看護師は、そう言ってベッドの脚を叩いた。

「退院？」

「そうさ、それから坊やに荷物が届いているぞ」

　大柄の看護師は、次にクリスマスプレゼントのような大きな包みを差し出した。

　中には手紙が一通と、木の箱に収まった銀色の筒が入っていた。

「これだけ？」

「これだけさ」

「おいらの荷物は？」

「何度も言わせないでくれよ。これだけさ、これで全部。他には何ひとつ入っちゃいなかったよ、何ひとつな」

　大柄の看護師は、人差し指を立てて念を押すように言った。

　患者の少年は、包みに入っていた銀の筒をとても綺き麗れいだと思った。

「さあ、パジャマを脱いでくれ、退院なんだからな」

　大柄の看護師は、さっさと少年のパジャマを脱がしはじめた。

　きっとお金がなくなったのだ。少年はそう思った。

　大柄の看護師は、お金がないと入院させてやれないのだと、いつも言っていたから。

「おいらは出て行かなくちゃならないのかい」

「そうだよ、もう治ったんだ。元気な子は外で遊ぶもんさ」

「おいらはよくなったの？」

「だから言ったろう。おめでとう、退院だ！」

大柄の看護師は、少年の服をすっかり脱がしてしまうと、紙袋を差し出した。

「これは俺からの退院祝いさ。服がないと困るだろう。入院費も立て替えてやったよ」

大柄の看護師は、古着屋で買ったような服を少年に着せた。

「おいらはどこに行けばいいの？」

「もういいから、安心して家族のところへ帰んな」

「家族なんていないよ」

「手紙が来たんだからいるだろう。さあ、これにサインをして受付に持って行くんだ」

大柄の看護師は、いくつもの書類を出してにこっと笑った。

患者の少年は──よく分からないけれどにこっと笑った。

xviii

ドゥオーモ広場に夜が明ける。

眩しい朝日が虹色の町並みを照らすころ、夢の世界もまたその色彩を変えるのだ。

ここは歴史ある町並みと、自動機械人形オートマタが迎える御お伽とぎの国。古代復興運動リナツシメント発はつ祥しようの地でもあるベルモントから、観光客の姿が途切れることはない。

それなのに、今日も客はひとりもつかまらない。

「なにが御伽の国だ」

紫煙をくゆらせたタクシー運転手は、口の中で毒づいた。

朝になったら今日の営業は終わりだ。最後にひとりでも客をひっかけたくて広場に車を停めているのだが、どうやらそれも叶いそうにない。まったく、この街を御伽の国だなどと誰がほざいたのだ。

ハンドルに手を乗せて、開け放した窓から夜明けのドゥオーモ広場を眺める。

空が明るくなる少し前から、動き出した電車が新しい旅行者をベルモントへと迎え入れている。駅前の広場には、すでにちらほらと人の

流れができはじめていた。

　タクシー運転手の目は、そんな夜明けの広場をうろうろしている子供の姿をとらえていた。頭に包帯を巻いた少年が、木箱を抱えて同じところを行ったり来たりしている。

「坊主、はぐれたのか」

　運転席から顔を突き出して声をかけた。

　少年の目は運転手を見ていない。

「おいら、家に帰るんだ」

「ならさっさと帰んな。こんなところをうろうろしてたら警官に連れて行かれるぞ」

「家が分からないんだ」

「じゃあ迷子じゃないか」

　包帯の少年は不思議そうな顔で首をかしげ、それからこう言った。

「おいら、なすべきことをしなくてはならないんだ」

　少し頭がやられているらしい。頭の包帯も最近巻かれたもののようだ。余計なことに首を突っ込んでしまったような気がして、運転手は煙草たばこを灰皿でもみ消した。

「なんだ、そのなすべきってのは」

「こいつだよ」

　少年が木の箱を開ける。そこには銀色に輝く自動機械人形オートマタの円筒シリンダが収まっていた。



「これに魂たましいを入れてもらうんだ」

「魂だと？」

「そうさ──我思うゆえに我ありペンソ・ドウンケ・ソーノ」

　嫌な予感が当たった。この子供の言うことは、まるで訳が分からない。

　ため息をついた運転手は質問を変えた。

「親はいるのか」

「親父バーボがいるよ」

「そうか、それなら安心だ。腕のいい時計技師なら旧市街を当たるんだな。あっちには金持ち相手の芸術家気取りがごまんといる。優秀かどうか分からない奴でよかったら……」

「ありがとう」

　包帯の少年が親指サムを立てた。話を最後まで聞かずに歩き出す。広場を横切って旧市街の大通りへ、少年はこっちを振り向きもせず、駅から吐き出される朝の人波に紛れ込んでゆく。

「おい、時計技師なら知り合いに変なじじいがいるんだが……」

　後ろから声をかけようとしたところで、タクシー運転手は珍しく客に呼び止められた。巨大なボストンバッグをごろごろと引きずった外国人観光客が二人──見るからに上客だ。すぐにドアを開けて後席に乗せた。

　ハンドルを握り、通りの向こうを見る。

　よろよろと危なっかしく歩く少年の隣に、いつしか給仕服の女が寄り添っていた。少年が進む先を見失わないように、女は小さな手をしっかりと握っている。

　使用人がいたのか。

　どこか金持ちの家の息子かもしれない。肩を竦すくめたタクシー運転手は、後席におさまった観光客から目的地までの地図を受け取ってシフトに手をかけた。

　朝日の色が空に溶けだしてきた。バックミラーに映るベルモントが赤紫に輝いている。後席の二人は、しばらく言葉を忘れてその景色に

見とれていた。

　この街は美しい。

　そう見ることのできる奴の目には……。

　口の中で呟いてタクシーを走らせる。

　窓の外で街が動きはじめた。給仕服の女に寄り添った少年の影は、白銀の円筒シリンダを抱いたままベルモントの雑ざつ踏とうへと飲み込まれていった。

完

Ｊ□さいろー

J.Sairo

本文担当。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～III

２０１５年10月９日　電子書籍版発行

者　Ｊ・さいろー

作　ニトロプラス

行人　立川義剛

集人　野村敦司

集　望月充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００８年４月23日　初版第１刷発行

 ISBN978-4-09-451065-2